
朧月の標

日向あおい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朧月の標

【Nコード】

N5691E

【作者名】

日向あおい

【あらすじ】

『オマエモウスグキエル』。確かにそう聞こえた。というか今この猫しゃべったよね！？*****猫を助けたその日から、俺を取り巻く世界が徐々に色を変えていく。白猫シリーズ第2弾。
『桜華の雫』続編、連載開始。

プロローグ（前書き）

こちらは『桜華の雫』の続編となっています。

本作を先に読めますと、前作がネタバレになります。

前作を読まなくても分かるようになってはいますが、前作をお読み頂いてからの方がより一層本作をお楽しみ頂けると思われます。

是非、前作よりお読みいただければ、と思います。

ブローグ

自分の耳を疑った。

正確には耳でもない。じゃあ、何なのか、と問われても俺はその答えを持っていなかった。

ただ、言葉をなくして華月かつぎと顔を見合わせるしかなかった。

「颯。あたしのほつぺた、つねって」

華月の言うとおり、目の前のそれから目を離さずに、華月の頬を軽くつねった。

小さく、うつ、という華月の声が聞こえる。

「痛い？」

「痛い…」

華月はとても痛そうに自分のほつぺたを擦っている。

「…なんか俺もほつぺた痛くなってきた…」

「颯のほつぺ、私つねってないって」

「そうだけど。なんとなく」

そう言っただけ、自分の頬を手でさすった。

「ねえ、颯」

信じられる？と言いたげな華月の顔が横にあった。

「うん、かつ」

いったい、何がどうしてこうなってるんだろう。

というか、今何が起こった？

信じられないけど、でも、俺だけが聞いたんじゃない。華月もちやんと聞いていたのは華月の反応から明らかだ。

つまり。

今、この目の前にいる…。

「この猫、しゃべったよね」

二人の声が、重なった。

目の前のそれ、つまり猫は、俺たちを見上げながら、ふにふにと
白いしっぽを動かしている。何事も無かったように。

でも、間違いではないようだった。

確かに、“聞こえた”。

『オマエ モウスグ キエル』と。

一章 猫の恩返し（１）

まだ新しい制服の裾を翻しながら、華月が俺の前を走っている。俺と華月にとっては、いつもと変わりばえない月曜日の光景だ。華月と同じ近所の高校へ通うようになってから１ヶ月ちよつと。それはもうランドセルを背負いだした時から、幾度となく繰り返されてきた登校風景だ。

こういう時、先頭を走るのは、決まって華月の方になる。いつから、そうしたのかも思い出せない。それまでは、待つてよく、と後ろから追いかける華月のことなどお構いなしに、どこへ行くにも俺が競って先頭を走っていた。

もう、あの頃とは違う。

俺が前を譲るようになった頃、「どうしたの？」と華月が不思議そうに問いかけてきたことがあった。

わざわざ、危なっかしい華月がこけたり、ぶつかったり、しないように、そして、華月に進行スピードを合わせるために、などと正直に恥ずかしいことを言うバカはいない。いや、俺は一人その恥ずかしい人を知っている。俺と半分遺伝子がまったく同じ、生物学上の父親だ。

しかし、そもそも、こうやって母さんや華月の後ろから、ひよこひよここと、くつついていって、普段は放任しつつ、危険な時にとつさに手を出すというのは父のスタイルだ。そして、同時に、俺が物心ついたときに刷り込まれた困ったスキルでもある。

鉄は熱いうちに打て。

三つ子の魂百までも。

これは父を育てた祖母の教育方針のようだ。何も、それを真似することないと思う。おそらく父の策略で、自分が手が回らないときに、俺に二人のお守りをさせようという計画は、まんまと現在進行形で成功している。それはもう、父は早くから実行に移したに違いない。そして、これはほぼ確信だ。なぜなら、悲しいことにいうか、これも陰謀のような気がするが、俺と父の思考はよく似ているからだ。

ちなみに、もう一つの祖母の教育方針は、働かざるもの食うべからず。

これは、なぜか華月と母さんには適用されない。

我が家は、男尊女卑どころか、女尊男卑。いや、姫が二人いる。こっちの方が正しいだろう。

さらに、いつまでもあると思うな親と金。これは祖母の座右の銘。父が昔ため息をつきながら、そう教えてくれたことがあった。いうまでも無いが、それも我が家に世襲された。

ふと俺は気がついた。

「華月？」

なんだか、心ここにあらずな華月に、俺は後ろから低い声を投げかける。

ただでさえ、注意力散漫な華月が考え事をしているときは、歩く凶器か、歩く災害か、歩く台風の目のどれかで表現できる気がする。だから、未然に防ぐのが最大のポイントだ。

「ぼーっと走っているとコケるぞ」

「うるさいな……」

えらく不満そうな声が返ってきた。

なんだ？ 反抗期か？

今朝は甘ったれて自分にへばりついてた華月が急にヘソを曲げた理由が、と思いだたらなくて、自然に眉間にシワがよる。

内心、今までにない華月の態度に、俺は困惑していた。顔には出さないから、華月は気がついていないだろうが…。

これが、お年頃ってやつか？

自分もその“お年頃”なはずなのに、周囲の友人や、親戚を含む大人たちは「雪月（颯き）君は落ち着いているね」「颯君はかづちやんの父親みたいだね」などと言う。実際、最近華月は自分の娘なのではないかと思う時もある。妻も居ないのに、子育てしている気分になる高校1年の健全な男児なんて、たしかに、老け込んでるのかもしれない、とたまに自分で思っただち込む事もある。

そうなったのも、我が家の家族構成員が原因としか考えられない。やることなすこと危なっかしくて見ていられないのに、自由奔放すぎてやたら手のかかる母。

そのDNAを色濃く受け継ぎすぎ、というか、父の遺伝子どこへいったんだ、と思わず突っ込みたくなるような姉。

苦勞性、かつ心配性、かつ仕事で多忙を極める父の氣苦勞を少しでも軽減させてあげよう、と、父の代役を勤めるのは自分しかないのだ、と覚り切ったのは、4歳のことだったと記憶している。そういう自分も父のDNAを色濃く受け継ぎ過ぎたのかもしれない。

そんなことを考えながら小さくため息をついた時、目の前の歩行者用信号が青に点灯した。

同時に、だーっと、まるで徒競走のピストルが鳴ったかのように、華月が一目散に走り始めたので、げ、と俺は小さく呻いた。

…たく、青になったからって左右ちゃんと確認してから渡れと、何度言ったら…

と、また後で華月に説教しなきゃな、と思っただ時だった。

あぶない！

横断歩道を渡り始めた俺の足元を、さっと何かがすり抜けていつて、うっかり踏みそうになったと思った瞬間、それは数歩前にいる華月をも通り過ぎ、やっぱり華月も足がもつれそうになりながらも、それを何とかやり過ごす。

そして！

「あつ！」

自転車の甲高いブレーキ音と華月の声が重なった。

横断歩道の向かい側から勢いよく走ってきた自転車が、それ、をよけ切れないと思ったのだ。反射的に華月はそれを拾い上げようと、自転車の前に立ちふさがった。彼女の反射神経は、父親譲りでそれは、こんな時はずっと役に立つ。立つのだが、間一髪、自転車をやり過ごしても、華月の体は横断歩道から車道に転げ出てしまおうとしていた。

「華月！」

冷や汗がでた。

とっさに、俺は華月の腕を力いっぱい自分の方へ引っ張り寄せた。

「あつぶね……」

タツチの差で、華月と前方から走ってきた車との接触は免れた。

たぶん、今、俺の顔を鏡で見たら、真っ青に違いない。

「危なかったね！」

華月は、俺の腕の中で、そう言った。

でも、この会話は成り立っているようで、成り立っていない。

絶対だ。

ほっとした後、くるのはなぜ苛立ちなのだろう。

「……わかってないだろう、華月」

「え？猫、無事だよ？ほら！」

華月は、自分の腕の中の白い猫の首根っこを、わしっとつかんで、俺の目の前にぶらりと宙ぶらりんな猫を見せてみせた。

いつも、華月はこうだ。やっぱり何も分かつちやいない。

俺の心臓が止まりそうなほど、危なかったことも。現在進行形で、俺の怒りメーターが急上昇していることも。

「……今、その猫のおかげで、華月が引かれそうになったの」「え?」

華月は思っても見なかっただろうことを言われ、目を見開いた。

「……怪我は?」

「どこも痛くないよ」

「なら、いいけど。後で、こつてり父さんに説教される」

「げ…パパに言うの?」

華月は泣きそうな顔になった。

「当たり前だ。…ていうか、遅刻するぞ」

「あつ!そうだった!」

華月と母さんの説教は、やっぱり父に任せることにしている。俺の口から言っても、あんまり効果がないのが身にしみてよくわかってるからだ。父の長い長い長い説教を華月にしっかりともらおう。そして、俺は心に誓った。自分の娘がもし出来たら、こんな甘やかさない。……たぶん。

華月はとりあえず猫を抱えて走り、おかげで両手がふさがったことを理由に、華月の分の鞆を俺が抱え、先を急いだ。

そして、今日も今日とて、近道だ、といいながら華月を先頭に、

川原沿いの道を走り抜けていた。

「ていうか!華月!」

川原沿いの細い砂利道を一列になって走りながら、いつこうに猫を手放そうとしない華月に声をかけた。

「それ、学校まで連れてく気か?」

とたんに、ぴたつと華月が足を止めて、俺はぶつかりそうになりながらも、何とかそれを避ける。

「急に止まるな!」

そんな俺の抗議なんぞ、華月の耳には届いてない。

華月は、そつとその猫を地面に下ろした。

「…とりあえず、君はここに居たまえ。学校が終わったら、君の身の振り方を一緒に考えようじゃないか。おやつも持ってきてやる。しばらく、ここで姫の帰りを待つとよいぞ」

華月は猫に向かって人差し指を突きつけ、得意げにそう言った。

「誰が、姫だ。…て、猫にわかるか！」

「爺や、参るぞ」

言い終わるが早いか、華月は身軽になって、走り出す。

「誰が、爺やだ！て、こら！鞆、自分で持て！」

「おお、遅刻、遅刻ぞよ」

そういつて、俺たちが走り去ったその後姿を、白い猫がじつと眺めて、そして、すつとどこかに姿を消したことなど、俺たちは気がつきもしなかった。

猫の恩返し（２）

俺たちが所属する水泳部の練習が終わり、家路につく頃には夜の9時を回っていた。今日は、月に1度のプールの清掃日で、これは華月や俺を含む、1年生全員の仕事だった。足腰を鍛える、という名目の元、水を抜いた50メートル温水プールの掃除をさせられる。俺も華月もクタクタになりながら、校門を抜けた。

「かづ、寝るなよ」

眠そうな顔をしながら、フラフラ歩く華月を見ながら、俺はそう声をかけた。

「寝てない……」

「鞆、ちゃんと持って、ほら」

今にも華月の手から零れ落ちそうな鞆を、持ち直させてやる。しかし、その手は力なく、反応も鈍い。

これは、急いで帰らないと、歩きながら寝かねない。さすがに、今は華月をおぶって帰る体力は残されていなかった。

「かづ、頑張つて」

そんな俺の声に、よくわからない言葉で応答する華月に、いよいよ身の危険を感じた。

絶対、寝る！

十五年の経験と俺の直感がそう言っていた。

俺は、とりあえず自動販売機で冷たいスポーツドリンクを華月に買い与え、意味を成さない言葉で抗議を続ける華月に何とか飲ませ、一刻も早く帰宅すべく近道を通る決意をした。

決意、というのは、それが近道をするには、かなり決意が必要な道であるからだ。

この近辺で育った子供ならば、『あの道は、夜は危ないからと追ってはいけない』と、刷り込まれている。

近道、それは、朝、二人登校した道。猫を置いてきた川原沿いの

道のことだ。

その道は、今だ舗装されておらず、外灯もままならない。人がすれ違うことも困難な細い道。その道の両脇は、大きな桜が立ち並んでいる。春になれば、花見客も大勢訪れるような美しい光景が見られるのだが、日が落ちればその風景は一変する。その見事な桜の木の枝が横に広がって、外灯はおろか、月明かりすらも遮ってしまう。当然、日が落ちたらその道を使うことは、幼い頃から禁じられていた。もちろん、女の子の華月がそこを一人で通るなんてことは、決して、決して、決してあってはならないと、我らが父上がそれはもう、半ば泣き落としのように、口うるさく、懇切丁寧に説明して見せたものだった。

今日はこんな状態だし、一刻も早く帰りたい。

俺は心の中で、父にごめんと一応謝って、左手に華月と自分の鞆を抱え、右手で、すでに半分以上まぶたが閉じている華月の腕をつかんで、ずんずんとその川原沿いの道を進んでいった。

薄暗いその道の木々は、1ヶ月前までは桜の枝にたくさんの美しいピンク色の花を付けていた。二人で遅刻回避のための走り込み（華月はこれを体力トレーニングのための早朝マラソンなどと言うが）の最中に、毎日のようにその花びらに見送られながら、花見を満喫しつつ登校したものだった。

今は、その枝にはたくさんの葉が茂っている。それがまた、川原沿いの道を進む俺たちから光を奪っていた。

幼い頃に植えつけられた約束を破ることへの罪悪感が、それとも暗闇の恐怖からか、自然と足は速くなっていた。

華月もいつの間にか眠気が吹っ飛んだようで、足取りもしっかりしている。しかし、逆に暗闇の恐怖が華月を襲い始めているようだった。

「颯……」

華月が声を震わせている。華月の恐怖が俺がつかんでいる華月の腕からも伝わってくる。

「早く、帰ろう」

「う、うん」

「暗いから、転ぶなよ」

そういつて、華月を振り返った時だった。

俺の横目に、何か白いものがぼんやりと、目に飛び込んできた。

なんとなく、気になってそっちを見る。

急に足を止めて、川原のほうを眺める俺につられて、華月もそちらに目をやった。

「あ…昼間の…」

華月がつぶやいた。

こちらからすこし離れた大きな桜の木の下に、ぼんやりと白い猫の姿が映し出されていた。

「君、待ってたんだ！」

そういい終わるが早い、華月が俺の手を振り解いて、猫の方へ、つまり、川原の方へ走り寄っていった。

「華月！」

ぎよっとして、華月を追いかける。

「待て！」

華月の腕を再びつかんだときは、すでに猫の前にたどり着いていた。

華月はそんな俺をよそに、実に嬉しそうにこちらを振り返った。

「颯、この子昼間の子だよな」

「そうかもね…」

正直、そんなことはどうでもよかった。早いところ、この道から抜け出して、家に帰りたい気持ちが大きかったからだ。それなのに、華月は、今まで自分で持ちもしなかった、自分の鞆を俺から奪い取って、ごそそと鞆の中を漁りだす。

「うゝん…ごめん、食べ物もってないかも」。

「かつ、今日はもう遅いから帰ろう。母さんが心配する」

帰るときに、今日は遅くなったから、メールで連絡は抜かりなく

入れておいたが、それでも心配するのが親というものだろう。

そして、今日はきつと、母さんが夕飯を作っているに違いないが、その夕飯を作ったあとのことを思うとうんざりする。

料理は食べる専門の母上である。ごくたまに作る料理も、味や見た目はそれほど悪くない。むしろ、いいほうだろう。ちよつとオリジナリティー溢れていて理解できないときはあるが。

この間は、牛肉しかないのに、豚汁を作ると言い出して、牛肉の臭みがたつぷりな味噌汁が出てきた。こっそりピーマンが入っていると、いう独創的なその牛肉ピーマン炒め風味味噌汁が、不思議味の一品だったのは言うまでもない。

そこまでは、俺も許せる。…頑張れば。作っていただいたのだから、顔に出さないように、文句を言わないように、感謝の気持ちを込めて残さず食べる努力をしよう。食べ物を粗末にしてはいけない。

問題は、そのあとの台所。

ガスレンジの上の換気扇に何か茶色い5センチ大の物体が、べとつとへばりついて、これは何だろう、としばらく考え込んでいたら、
「あ、味噌がね、上に飛んじやつたの」と飄々と言われた時には、
「へー…味噌なんだ、これ…」と切ない気持ちになったものだった。
そのあと、どうして味噌が換気扇につくのかについて考えながら、無言で1時間かけて台所をピカピカにした息子に、父は軽く肩をぽんぽんと叩いて、ため息を一つ漏らして自室に戻っていった。今だ、その怪奇現象については結論がでていない。母上はどうやら、普通の市販の味噌を、空飛ぶ味噌に変えてしまったらしい。その不思議パワーを華月に遺伝させないでほしいと心底思ったが、これは俺のわがままなのだろうか。

きつと、今も台所は大惨事が怪奇現象を迎えていることだろう。そして、クタクタな現状に、追い討ちを掛けるようなその台所掃除が待っているかと思うと、早いこと帰って、ぴかぴかに片付けて、とつと寝たい、というのが切なる今の俺の願いだった。

しかし、そんなことは、台所の惨事をまったく気にしないのと同

じく、気にも留めていない華月は、この猫のことが気になって仕方ないのだろう。助けたついでに、家につれて帰りたいと言い出さな
いか、内心ヒヤヒヤしてた俺がいた。なぜなら、その華月が拾った
猫の世話をするのは、当然、俺だからだ。

「華月、帰ろう」

「ん…でも」

華月は諦めきれず、まだ、鞆をあさっている。

どうやって華月をつれて帰ろうかと考えあぐねていた、その時。

強い風が、川原からそこら一帯を包み込んだ。

その風の強さに俺までもが思わず、うわっ、と声を上げて、目を瞑
る。

桜の木が揺れて、葉たちの唄が降り注いできた。

なんだったんだ、今の風は。

そう思った、まさにその瞬間。

オマエ モウスグ キエル

「は？」

先に声をあげたのは華月だった。

「今、颯、なんか言った？」

「いや？」

俺たちは顔を見合わせて…同時に視線を足元に移した。そして、
再び顔を見合わせて、はは、っと笑った。
そんなまさか。

おそらく華月も同時にそう思ったに違いない。こういう時は双子
であることを実感する。

でも、すぐにまた、同時に俺たちは顔を凍りつかせた。

オマエ ワタシヲ タスケタ。
ダカラ オマエヲ タスケル。

自分の耳を疑った。

正確には耳でもない。じゃあ、何なのか、と問われてもその答えを持っていなかった。

「颯。あたしのほっぺた、つねって」

頭が真っ白になっている俺に、華月がそう言った。俺は、それから視線をそらさないで、華月の頬を軽くつねった。

「痛い？」

「ありえないくらい痛い……」

華月はとても痛そうに自分のほっぺたを擦っている。

「……なんか俺もほっぺた痛くなってきた……」

「颯のほっぺ、私つねってないって」

「そうだけど。なんとなく」

そう言っただけで、自分の頬を手でさすった。

「ねえ、颯」

信じられる？と言いたげな華月の顔が横にあった。

「うん、かつ」

いったい、何がどうしてこうなってるんだろう。

というか、今何が起こった？

信じられないけど、でも、俺だけが聞いたんじゃない。華月もちやんと聞いていたのは華月の反応から明らかだ。

つまり。

今、この目の前にいる……。

「この猫、しゃべったよね」

二人の声が、重なった。

目の前のそれ、つまり猫は、俺たちを見上げながら、ふにふにと

白いしっぽを動かしている。何事も無かったように。
でも、間違いではないようだった。
確かに、“聞こえた”。

オマエニ カシテヤル と。

卵爆弾事件（１）

いきなり俺の部屋のドアが開いて、パジャマ姿に枕を抱えた華月が乱入してきた。

「華月：ノック」

言うだけ無駄なような気がするが、言わずには居られないこの性分が恨めしい。

そして、やっぱり、無駄だった。華月はまったく聞いてない。

「ねえ、颯！」

づかづかと俺のベッドに近づいてきて、すでにベッドに横になっている俺の腹の上に腰を下ろす。

「ぐふっ」

「あれって、何？」

「か……かづ……重い……」

「ねえ、あれって何！？」

華月は興奮状態だった。

わかったから。

とりあえず、どいてくれ。

俺は、なんとか身動きして、ベッドを半分空けて華月を布団の中に誘導することに成功した。

小学校を卒業して俺と華月が別々の部屋になってから、こうしてたまに一緒に寝ることはあったけど、それももう何年も前のことであんまり覚えてない。

別に、一緒に寝るのが嫌になったわけじゃない。むしろ、こうやって一緒にいるのが自然であるように思う。

「で、さあ……颯はどう思う？」

華月は、興味津々で俺に話しかけた。

「猫だろう？」

俺は、華月の言う“あれ”についてひっぱるつもりはなかった。

確かに、あれは猫だった。

猫の形をしていた。

でも、何かよくわからないことを言っていた。

あの直後、華月が悲鳴を上げて走り出したので、あわててそれを追いかけて、捕獲し、何とか家まで護送した。

その間、華月は終始無言。

帰ったら帰ったで、やはり我が家は大惨事に見舞われていた。

今日は母さん得意のオムライスにしようと思っただけ、俺のメーイルを受け取るや否や、卵を買いにスーパーまで意気揚々と出かけたらしい。この時点で母さんは父さんの“夜間婦女子外出禁止”という地雷を踏んでいるのだが。

たぶん気がついていないだろう。

とりあえず、今は父さんが居ないので不問。

卵を手に入れた母さんは、腕を振るう気満々で帰宅。

その直後、卵がスーパーの袋から、“なぜか”瞬間移動したか、袋が透明になったかして、玄関で不慮の事故を起こしたらしい。

10個入りのパックの中の卵たちは、着地が大の苦手だったようで、見事に玄関を派手に汚した。なんとその、7割が死傷するとう、大事件となった。まさに、卵爆弾だ。

俺が推測するに、単に母さんは玄関の敷居に跨またいだ拍子に、派手に卵を袋ごと放り投げてしまった、というところだろう。

残念なことに、これは父さんの説教行き決定だ。

結局、負傷した卵と無傷だった卵を使って、俺がささっと夕飯を

作った後、母さんなりに掃除した玄関をしつかり掃除する羽目になった分ぐらいは、母さんには説教されていただくことになるだろう。

というわけで、実に大変な一日だったと、俺は今日はほんと疲れてきつていた。

だから、もう、猫がしゃべったとか、猫がなんだか言ってたとか、どうでもいい。

寝かせてほしい…。

実際現在の時刻は、2時を回っている。

「かつ、そろそろ寝たほうがいいと思うぞ」

「だって、寝れないよ、こんな時に！」

おれは、こんな時こそ眠りたい。

冷静な判断は健全な体あってこそ……ってこんなことを考える俺は、やっぱり老け込んでるんだろうか。

小さくため息がこぼれてしまう。

「かゝづゝ。寝ないと、父さん帰ってきてても知らないよ。絶対、こつてり叱られるぞ。今日、おまえ何したか忘れたの？」

華月は、げつという顔になった。そして、眠る気になつたらしい。「おやすみ、かつ」

俺はどうやら、華月のせいで狭くなったベッドでも熟睡できるくらい疲れていたらしく、あつという間に深い眠りに落ちたようだ。

卵爆弾事件（2）

次の日の朝、俺はなかなか起きない華月を叩き起こして、朝食の支度を始めた。

我が家の朝の食卓は、俺以外、半分寝てる。

仕事で夜中に帰ってきたばかりの父さんは仕方ないとしても。というか、父は今日は平日だが仕事が休みなのでわざわざ起きてこなくてもいいと思うのだが、「俺が休みの日くらいは朝食は家族でとる！」と言いながら頑張って起きる父は、確かに根性があるなと思う。

まあ、普段ほとんど仕事を理由に我が家の滞在時間が短い父である。そうでもない和我が家の姫たちに、父の存在をあつという間に忘れ去られそうだという強迫観念もあるのだろうが。

華月がまだ小さい時に、「パパまた遊びに来てね」と「あ、パパ居たの？」言われたのが相当ショックだったらしい。

さらに言えば、「かづは大きくなったら、颯のお嫁さんになるの」と面と向かって言われ、「パパじゃ駄目なの？」と聞けば、「駄目！」と即答されたことも、まだ響いていると母さんが言っていた。

不憫。

頑張れ父よ。

そんな父の涙ぐましい努力は、果たして意味をなしているのかと、よく思う。

華月は半分以上寝たまま朝ごはんを食べているし、母さんだって似たようなものだ。

「華月。昨日、危なく引かれそうだったそうじゃないか」

が、父は娘の身の危険となると、そこは睡魔に勝つらしい。しっかりとした口調で華月に話しかけた。

「え、なんだっけ？」

ぼーっとしたまま華月が答える。

なんだっけ、って……おい。

どうやら、俺と同じく、父さんの導火線にもこの一言が火をつけたらしい。

「いいか、華月。いくら横断歩道を渡るときとは言え、信号が変わったらすぐに飛び出したら危ないと、何度も言っているだろう？ 華月は運転したことがないから、まだわからないかもしれないけれど、信号が変わっても、右折してくる車があわてて、アクセル踏んでぶっくと、走ってくるかもしれないだろう？」

「父さん」

「なんだ、颯」

「華月寝てる」

「……この〜！ 華月っ！ 起きろ！ ていうか、君も寝てないで、朝飯を食べなさい！ 遅刻するぞ、ほら！ 今日は仕事が忙しいって言っていたじゃないか！ “ちゃんと食べないと、もたないぞ。って、華月も寝るな！”」

……不憫だ。

俺も、いづれ所帯をもったらこうなるんだろうか。

絶対に、ごく普通でいいから、ほかに何も望まないから、我が家の女性人のようなタイプの妻だけはやめよう、と心に固く誓った。とはいっても、二人で充分だ。三人もいて堪るか。大体、俺の奥さんが母さんや華月タイプだったら、俺は母さんと華月と奥さんと三人も相手にすることになり、そして、その奥さんが、同タイプの娘でも産んでみる…。

そんな、量産いらない！
無理！絶対無理！

俺タイプも量産しないと、絶対無理！

と、そこまで考えて、はたと俺は気がつく。

ああ、だから父さんは俺をこうやって育てたんだな、と……。

俺が恨めしげに、自分の奥さんと娘に翻弄される父の様子を眺めていた時だった。

「いてっ！」

激痛と、騒音と、自分の叫び声と共に、俺は目を覚ました。

え？

目を覚ました？

俺は、暗がりの中、強打した自分の尻を擦りながら、あたりを見回した。

そこは俺の部屋だった。

ベッドを見ると、完全に華月に占拠されている。

どうやら、華月にベッドから蹴り落とされたらしい。

ということは、今は夢か？

実にリアルな夢を見たものだ。そもそも、俺は夢をあまり見ない。眠りが深いのだろう。見たとしても、こんなにはつきり覚えていることなんて、初めてかもしれない。

その時突然華月が、叫んだ。

「それ私の夢！」

び、びっくりした。

おもわずビクつと体が反応してしまったじゃないか。

昔から、華月は実に見事な寝言を言う。今までの寝言大賞ベスト3は、3位から順番に…。

3位。「この砂糖しょっぱい！」
それはおそろく塩だ。

2位。「私トマトにだけはなれない」
誰もなれない。むしろ、

トマト以外にはなれるのか、おまえは。

堂々の1位。「そしてスタートへ戻る」
どんな夢だ！ ス

ゴロクか！？

一度、華月の頭の中を、割ってみて見たい…。

まだ、むにゃむにゃと、何か言っている華月を起こさないように少し動かして、自分の寝れるスペースを確保し、再び眠りについた。

卵爆弾事件（3）

再び目覚ましがなった。

俺はむくつと起き上がって、隣ですぴすぴと寝息を立てる華月を眺めた。

華月の腰まである長い髪が、布団に広がっている。

どうやら今度こそ朝になったみたいだ。

なんだか夜中の夢と映像がかぶった気がした。

まあ、よく見る光景だからだろう。

俺はなかなか起きない華月を叩き起こして、朝食の支度を始めた。朝食が出来上がった頃には、一同が食卓を囲む手はずになっているが、俺以外、やっぱり半分寝てる。

ここまでは、俺はいつものことだから、まったく気にも留めなかった。

「華月。昨日、危なく引かれそうだったそうじゃないか」

父さんが、すっかりとした口調で華月に話しかけた。

「え、なんだっけ？」

ぼーっとしたまま華月が答える。

ん？

俺は、漠然と何か引つかかって、首をかしげながら目の前のやり取りを見守った。

「いいか、華月。いくら横断歩道を渡るときとは言え、信号が変わったらずくに飛び出したら危ないと、何度も言っているだろう？華月は運転したことがないから、まだわからないかもしれないけれど、信号が変わっても、右折してくる車があわてて、アクセル踏んでぶっくと、走ってくるかもしれないだろう？」

父が話している間に、華月はこつくりこつくりと、船をこぎ始めていた。

おれは、再び、あれ？と思いながらも、父に声をかける。

「父さん」

「なんだ、颯」

「華月寝てる」

「……このー！華月っ！起きろ！ていうか、君も寝てないで、朝飯を食べなさい！遅刻するぞ、ほら！今日は仕事が忙しいって言っていたじゃないか！“ちゃんと食べないと、もたないぞ。って、華月も寝るな！”」

おれは絶句した。

この会話…。

夢の中の会話とまったく同じ…？

偶然なのか？

でもそんなことあるのだろうか。

「颯？おまえまで寝てるのか？」

「…え？」

呆然としていた俺に、父が声を掛けてきた。

「颯が寝ぼけてるなんて、珍しいな」

「…ああ…なんか疲れてるみたいだ……」

「大丈夫か？」

「大丈夫だよ。きつと気のせいだし」

「何が？」

父に突っ込まれて、俺はつい口を滑らしたことに心の中で舌打ちした。

「いや、昨日の卵爆弾事件で、玄関の掃除した時に使った雑巾ちゃんと洗ったっけかな」と

俺はとつさに、よくわからない話のそらし方をしたが、うまいこと父はそれに乗った。

「卵爆弾事件?!」

父上の眉が釣りあがると、母さんが一瞬で目を覚ますのが一緒だった。

「颯の裏切り者!ちくつたわね」

母さんが非難の目をこちらに向ける。

裏切り者って…。

「美桜希さん、^{みさき}一体全体、卵爆弾事件とは何のことか、俺にわかるように丁寧の説明してくれないかな？」

「えっと…あのですね…」

「なんですか？」

父さんの目は据わっている。父さんが母さんを『さん』付けで呼ぶ時ののは、お咎めを免れない時だと母さんも承知しているので、この調子だと「夜間婦女子外出禁止」地雷を踏んだことも、あつという間に明るみにでるだろう。

「はっ!新くん、遅刻しちゃうから、帰ってきてからお叱りは受けるという方向で!」

母さんはどうやら、逃げることにしたらしい。逃げ切れるわけないのに…。

「ほう!叱られるようなことなわけですね」

ほらね。

と、我が家のにぎやかな今朝の食卓は、本当に遅刻しそうな時間が迫ってきたので、まだ半分眠っている華月の腕をつかんで俺が立ち上がり

「遅刻するから、俺ら行くわ」という一言で、お開きになった。もちろん、母さんもすかさず
「わ、私も！」と便乗したのは言うまでもない。

断っておくが、これは、日常だ。

だから、一瞬、狐につままれたようなことも、その日常にすぐに埋もれてしまったが、数日後、今日のことを俺は思い出すことになるのだった。

暖かい場所（１）

ぱちつと目が開いた。

恐ろしく目覚めのいい朝だった。

私の目に飛び込んできたのは部屋の天井のクリーム色。

目覚まし時計がなる前に目が開くなんて、私にはありえないことなのに。

不思議なこともあるもんだ。

不思議なことといえば…。

颯は、ただの猫だって言うけど、ただの猫はしゃべったりしない。私は、すやすやとまだ私の隣で寝息を立てている颯を見た。

颯の短い髪が枕からシーツにさらさらと零れ落ちている。朝の光に透けて、綺麗なこげ茶色に見えた。

3日前、あの猫を見た日から私は、颯の部屋で寝てる。

理由なんてないけど。ただ、なんとなく。

颯と一緒にいるのは、心地がいい。

昨日も颯は、私が自分の枕をもってドアを開けると、一瞬の間を置いて、しょうがないな、って笑ってベッドを半分開けてくれた。小学校を卒業して、私と颯が別々の部屋になってから、こうしてたまに一緒に寝ることはあったけど、なんとなく自然に、いつのまに別々に寝るのが普通になっていた。

一緒に寝るのが嫌になったわけじゃない。むしろ、私は颯とそうやって一緒にいるのが自然だと思っていたし、きつと颯もそう思っていると思う。だから、私にとって、別々に寝ることのほうが、なんか不自然な気がする。

私は、そつと颯に体を寄せた。
暖かい。

なんとなく、嬉しくなった。

すると、その身動きで、颯が目を覚ましたみたいだった。
あわてて、私は寝たふりをする。

まだ、こうして二人で布団の中でぬくぬくしていたかったから。

私は颯の胸に顔を寄せて、聞こえてくる颯の心臓の音に耳を澄ませた。

とくん。

とくん。

一定のリズムを刻んでる。

私の心臓と、まったく同じ時間だけ動いてきた颯の心臓。

私は不思議な気持ちになった。

ママのお腹の中に、二人でいたときも、こうやってたのかな。
二人で小さく丸まって。

身を寄せ合って。

聞こえてくるママの心臓の音を聞きながら。

お互いの心臓の音を聞きながら。

ぜんぜん覚えてないけど、きつとこんな感じだったんだろうな。

私は、急にそんな懐かしい気持ちが出た。

「かつ。起きてるでしょう」

不意に、目の前から、しょうがないなあ、という笑いを含んだ声
が私の耳に心地よく届いた。

いつだって、颯は私のことは、全部お見通しだ。

こっそり、私は布団の中で舌を巻く。

まだ、こうやって一緒にいたい。

だから、目を瞑ったまま、ばれねな嘘をついてみる。

「寝てるよ」

「ふん、寝てるんだ……相変わらず、はっきりした寝言だなあ」
くすくす、と颯が笑いながら頭をなでてくれた。

その仕草は、颯の癖であり、ママの癖でもあった。

颯はいつから、こんなママの真似をするようになったんだろう。

物心がついた頃には、颯はもう私よりずっと先を進んでいるように思える。

そんなことを考えながら、私はさらに身を寄せて颯の腕の中に収まった。

私が颯の中にすっぽり隠れてしまう。

いつの間にか、颯の体は私より一回り大きくなっていた。

颯って、やっぱり男の子なんだな。

小さい時は、私より、ずっと背が低かったのに、いつの間にか私の背をはるかに追い越して、腕や胸も引き締まっている。明らかに私とは違う構造の生き物だ。

まったく同じ日の、同じ時間に生を受けて、同じママのお腹から出てきたというのに、どうしても違うのだろう。

いつからだったのだろう。

急に颯の声が低くなったのは。

ヒゲが生え始めたのは。

どうして自分は女で、颯は男なんだろう。

私は、原因不明のモヤモヤが胸の中を支配していく気がして、颯の腕の中で体をぎゅっと丸く縮めた。

「今日は甘えんぼだな、かづは」

そういつて颯は、やさしく抱きしめてくれた。

ほっとした。

嬉しかった。

でも、子ども扱いは嫌だったから、私は寝たふりを続けながら言っ
た。

「かわいい華月は寝ています」

すると、耳に吐息がかかった。颯が、ふっ、と優しく笑ったみた
いだった。

「はいはい。じゃあ、今のうちに今日の朝食にはかづの嫌いなトマ
トを…」

そこまで、颯が言ったとき、がばっと私は反射的に起き上がる。

「トマトはいやだ〜!」

「あ、起きた」

私があわてるのを見て笑みをこぼしながら、ゆっくりと颯は体を
起こす。

それで、颯の策にはまったことがようやくわかった。

トマトは嫌い。

あのぐちゅっとした感じが嫌い。

でも、もう少し、颯とこうしてベッドでゴロゴロしてたかったの
に。

思わず、口を尖がらせて、ベッドから立ち上がる颯を目で追った。

「ほら、手伝って。母さん起こしてきてよ」

「はい」

しぶしぶ、自分も颯のベッドから降りた。

でも、私が颯の部屋から出ようとドアノブに手をやった時、「華月」と、颯が低く唸った。

颯が“かづ”ではなく“華月”と呼ぶときは、小言が待っている。条件反射で身をびくつと勝手に反応してしまう。

私は後ろを振り返らないで、颯の言葉を待った。

ここは逆らうと小言が倍になって、さらに長くなるからだ。

「ちゃんと、自分の部屋もどって着替えてからだぞ。風邪ひく」

颯の低い鋭い小言が飛んできた。

パジャマ代わりのキャミソールと短パン姿でパパとママの寝室へ行こうとしたのが、すっかりお見通しだったみたい。

なんでわかるんだろう……。

私はこっそり舌を巻いた。

しかも、言葉につまって体が素直に反応して一時停止したことで、すべてが颯にばれてしまう。

こういうときの颯は容赦ない。

正直、我が家では一番颯が怖い。パパやママよりよっぽど。

「今、そのままのかつこで、寒い廊下を降りて二人のとこへ行こうとしたよね、華月」

固まったそのまま、大きく首を横に振った。

正直に、『はいそうです。ごめんなさい』とは言えなかった。でも、そんなところまで、きつと颯にはお見通しなんだと思う。

前に、なんで颯には私の考えてることがわかるの？と聞いた事があった。そしたら、颯は平然となんでそんなこと聞くのかわからないという顔でこう言った。

『華月、嘘つくの下手だし。わからない人なんていないんじゃない？むしろバレテナイと思ってる方が俺は不思議だけど？』

本当に失礼しちゃう。

人を単細胞扱いしないでほしい。

女の子は色々複雑なんだから。

言い返してやりたがったが、颯を言い負かせることが出来ないことは、よくわかってるのでその時は抵抗するのを諦めた。

今回も颯に容赦はない。

「華月は、すぐ風邪引くよね。だから、昨日の夜もちゃんとパジャマ着ろって言ったよね。この部屋は暖房効いてるから、大目に見たけど…」

何も言い返せないのは自分が悪いのはわかっているのだけれども、何か言い返してやりたくて、言葉を搜した。

背中を、颯の刺すような視線が追い討ちを掛ける。

何か。

必殺技はないのか。

私は頭をフル稼働させた。

とはいっても、フル稼働させたって、中身がもともと少ないんだから、颯には到底かなわない。

でも悔しいんだから、しょうがない。

「かつ？」

返事をしないまま部屋のドアの前で固まっている私に、颯は少し心配そうな声で呼びかけた。

でも、私は苦肉の策の一言を言い逃げて、颯の部屋を飛び出す。

「…なんか最近、颯、パパに似てきたよね」

「…はい！？ あ、こら華月！」

背中から、そんな颯の声が追いかけてきた。

暖かい場所（２）

着替えを終えて両親の寝室へ行くと、ダブルベッドで並んで眠るパパとママの姿が見えた。遮光カーテンの閉まった窓から、まぶしいほどの朝の光が漏れている。

物音をさせないように、二人のベッドへ近づいた。そしてそっとママの隣にもぐりこむ。

「ん…かづ？」

ママが眠そうに目を少しだけ開けた。かまわずに、今度はママの腕の中に、ずいっと収まった。その物音に、パパも少し反応した。

「え、かづ？…どうした？」

パパはそう言いつたまま、また眠りに落ちていった。きっと、パパは昨日も遅くまで残業し、明け方帰ってきて、大好きなママの寝顔にキスをして、こてつ、と電池切れのように寝たんだね。

私は、そっとママの顔をのぞくと、パパの寝顔を眺めるママの優しい瞳が眩しかった。

綺麗だなと思った。

ママは本当にパパが好きなんだろうなと思った。

二人のような夫婦になりたい、と思うのはいつもこんな時だった。

私は自分の両親が好きだった。

いつも二人は一緒だった。

よく喧嘩もする。でも同じくらい、デートに出かけていく。

小学生の頃などは、颯と二人で手をつないで家に帰ってくると、テーブルの上にパパのお手製のクッキーと置手紙『パパとらぶらぶデートしてくるね。夕飯はパパが作ってくれたよ。冷蔵庫にあるからね。いつてきま〜す！』に出迎えられたことが何度あった。

ついこないだも、明日は急に休暇になったから、温泉にいこう！と明け方に帰ってきたパパが、眠そうなママの分の荷造りをいそいそとして、朝一番の新幹線で温泉に出かけていった。

なんだか、二人はとっても楽しそうだな、いつも思う。

パパは忙しいから私もなかなか同じ家にいても会うことが少ない。ママの仕事は家で作業できることみたいで、たいてい自分の部屋で忙しくしている。

そんなパパとママは、きっと一緒の家にいなかったら、1年に数回しか会えないんじゃないかなと思う。一緒に住んでたって、朝早くに出かけるママと忙しくて明け方に帰ってくるパパは、いつ話をするんだろう、と颯と話したこともあった。

それでも、二人は私や颯のことをよく知っていたし、久しぶりにあったパパに、「高校生活はどうだ？か、か、か、かつこいい男がクラスに居るらしいけど、男は顔じゃないんだぞ、早まるなよ！」などと、的外れなことを言われたりした。たぶん、ママや颯から情報がダダ漏れしてるんだろう。でもママとパパが1時間も楽しそうに話し込んでるのなんて、一週間に2回がいいところだろうか、不思議だ。

それでも、二人のような夫婦になりたい。

いつか、私も好きな人が出来るのかな。

好きな人と毎日こうやって一緒にいれる日がくるのかな。

好きな人の寝顔をママみたいな顔で眺める日が、私にも来るのかな。

来ると、いいな…。

ママに見とれながら、私はそんなことを考えていた。

すると、すつと、ママと目があつ。ママは、私に可愛く微笑んで、人差し指を口元にあてて、しーっと言った。

「パパは寝かせておこう」

私はこくと頷いてみせてから、そつとベッドから抜け出した。

そして、部屋を出た。

振り返って、ドアの隙間から見える両親の寝室を覗くと、パパにそつとキスをするママの姿が目に入った。私はかーっと頭に血が上るのがわかった。

ママのキスに気がついたパパが、そのまま起き上がらずにママを抱き寄せた。パパとママの影が重なる。何か話し声が聞こえて、さらにクスクスと笑うママの声が耳に届いてきた時、見てはいけないものを見た気がした。

私は恥ずかしくなって、急いで台所へ向かった。

台所では、すでにエプロン姿の颯が朝ごはんを作っていた。ほとんど毎日、明け方まで帰ってこないパパが、休日の日は趣味の料理をする以外、家事全般は颯がやっている。

そういえば、いつから、ママはほとんど台所に立たなくなったのだろう。

颯のエプロン姿を見ながら、私はそんなことを考えはじめた。

私たちが小さい頃は、基本的に、パパの方が料理の腕がママよりもずっと上手いので、パパが朝も昼も夜も作っていた。朝は、仕事に出かけるママのために、明け方帰ってきたにもかかわらず、朝ごはんを作って家族と一緒に食べる。そして夕飯の時間には、一度仕事から帰ってきて夕飯をささっと作って、再び仕事に出かけて行った。今は、パパの職場が遠くなってしまったのでできなくなったみたいだけど、昔は職場が家からすぐだったから、そんなことも可能

だっただけ。パパが風邪を引いたり、出張でかえってこなかったり、どうしても忙しかったりなどという非常事態以外はパパが台所に立っていた。

だから、私も颯も、世の中の父親というものは、料理が上手いもので、奥さんを「おいしい！」と喜ばせるように出来ている生き物なのだ。とずっと信じて疑わなかった。それで、颯が小学生の頃に、ママのために料理をするようになったもの、ごく自然のこと。それを見たパパに、「おまえも大変だな」と颯の肩を叩いたと言っていた。二人で、なんでだろう？と思ったのを覚えている。

それからパパは、私ではなく、一切の食事を颯に教え始めた。パパは今も休日になると、楽しそうに颯と二人でプロ並みな料理を作ってくれる。

私はそんなパパたちをみて、ずるいと思った。二人ばかり楽しそう。

でも、きっと料理とは男の人がするもんなんだ、と思っていたから「ママは料理しないの？」とママに聞いてみたこともあった。すると、ママが答えるよりも早く、台所からパパの声が返ってきた。「華月は、ママと一緒に皿並べて。割らないようにママを見張ってね」と。

確かに、人よりおっちょこちょいでよく色々なところで転んだりしたりして生傷の絶えないママが、その時口を尖がらして、小さく「割らないもん」と言っていたのは、私の記憶違いでも聞き間違えでもなかったと、今はそう思う。

そんなことを考えていたら、私の気配に気がついた颯と目が合った。

私は、トマトを切る颯の足元に、背中を向けひざを抱えて座り込んだ。

「かづ。邪魔」

すぐに、頭上から低い声が降ってくる。たぶん颯はさっきの私の捨て台詞を根に持つてるんだ。

「…トマトやだ」

「…食べなさい」

「…ママも食べないじゃん」

「だから、いつも父さんに叱られてるだろうが、母さんは」

「…颯の頑固オヤジ」

「……かづのサンドイッチだけパセリも入れてやる」

「やだ！」

「……………かづ、どうかしたのか？」

絶妙なタイミングで、背中合わせなはずの颯からさっきまでとは違った優しい声が降ってきた。

いつだって、颯には全部お見通し。

いつだって、自分はこの家で一番子供だ。

「あたし、颯よりお姉さんなのに…」

少しだけ間があって、颯が言った。

「数分だろう、双子なんだから」

15年ずっと、この数分間差の弟にはかなわない。きっとこれからもずっと、それは変わらないのかもしれない。

私はお姉さんなのに…。

しっかりしなきゃいけないのに…。

もっとオトナにならないといけないのに…。

でも、オトナって何。

恋って何。

私もいつか、あんな風にキスをするの？

なんだか顔が熱い気がした。だから、私は膝の上に顔を伏せて見えないように隠した。

「かづ？」

「なんでもない……」

「熱でもあるの？ 顔赤いよ」

颯が、華月のおでこに自分の手を当てたとき、ますます、自分の顔が赤くなる気がした。

それで、思わずその手を振り払ってしまった。

「なんでもないったら……」

「……感じ悪い」

むっとした顔になって颯はまた料理に戻った。

ごめん。

なんか、すごいひどいことをしたのはわかってる。

でも、素直に謝ることが出来なかった。

やっぱり私は、まだまだ子供だ……。

その日の朝食のサンドイッチは、トマトがみじん切りになっていて、いつものように摘んでトマトだけを弾くことも出来ず、付け合せのオニオンスープのパセリもみじん切りで、ふんだんに使用されていた。

それを見たパパとママは、「珍しく喧嘩でもしたの？」と不思議

そんな顔をしていたが、私も颯も答えなかった。

暖かい場所（3）

「颯君に連絡しなくていいの？」

真帆ちゃんもニヤニヤしながらそう言った。

「だ〜か〜ら〜。今私の話聞いてた？」

「うん、うん。聞いてた。トマトとパセリでしょ？」

「そう！嫌がらせみたいなのに、みじん切りで入ってたんだよ」

私が言つと、真帆ちゃんはティーカップの紅茶をずーっと気持ちいいくらい音を立てて飲んだ。

「うん、嫌がらせだね〜」

「でしょ？」

「ていうか、かづ、携帯の電源切ってたの？」

電源の切れた私の携帯に気がついた真帆ちゃんが、目ざとくそれを見つけた。

「そうだった、忘れてた！」

学校を出る時に、電源を切ってからそのままだったのを忘れてた。だって、絶対、颯からメールが来ると思ったんだもん。

終礼が終わるなり、教室を飛び出して真帆ちゃんのところに行つたから…。

「はい、今すぐメールしなさい」

真帆ちゃんも、今まで笑顔を引つ込めて、少し強い口調で私の携帯を目の前に差し出した。

「もう21時だよ。絶対心配してるって、颯君。きっと連絡しないと、明日からかづは私のうち立ち入り禁止になると思うよ？」

…たしかに、ホントにそう言いそう。

しかも、パパとぐるになって、追い込んできそうだし。

それは非常に困る。

言葉に詰まった私に、真帆ちゃんは追い討ちをかけた。

「ほら、かづ」

「うゝ」

「私が電話しようか？」

そんなのますます、子供扱いじゃなか。

「…わかったよ。メール入れる」

そういつて、私が携帯の電源を入れたとたん、携帯が鳴った。

「げっ」

「颯君？」

「…うん」

「早くでなよ」

「だって…」

「後ろめたくなるなら、やらなきゃいいのに。ほら、貸して」

「あっ」

私の手から、あっという間に真帆ちゃんが携帯を奪い取ってしまった。

「あ、もしもし、颯君？うん、そう。かづなら今うちでちゃんと預かってます。うんうん。なんか携帯の電池切れちゃってたんだってうん、今連絡入れようとして、気がついてたらしい。あほだよね。」

うん、うん、うん。分かった」

そして、携帯をぶちっと切った真帆ちゃんは、ほい、とそれを私に放り投げた。

「駅ついたら連絡しろって」

「…颯怒ってた？」

「そら、電源切れてれば、心配するでしょう。しっかり、怒られなさい」

「うゝ…」

「だって…」

心配させてたくて、こんなことしたんじゃないけど。

ちよつと、電源切るつもりが、いつのまにか21時になってたんだもん…。

「はい、これ以上颯君を待たせない。忘れ物しないように、さっ

さと帰る」

「……はあゝい」

私は真帆ちゃんと、真帆ちゃんのお兄さんに駅まで送ってもらった。

真帆ちゃんの家から、家の最寄り駅は2駅。

駅に着いた時にいつも颯に連絡する約束になっていた。けれど、今日はどうしても連絡をする気になれない。

きつと、それはそれはものすごく怖い顔で迎えにきて、無言の圧力をかけながら家まで二人で歩き、家についたと同時に堰をきったように怒涛の颯の説教が始まるにきまつてるから。

いつだって、颯が正しい。

いつだって、颯はオトナで私は子供。

わかつてるのに。

心配かけたって、素直に謝りたいのに。

言葉がうまく出てこない。

ごめんなさい。

心の中では、何度も謝ってるのに。

私は、最寄り駅についても、颯には連絡をいれず、そのまま家までの道を一人で歩き始めた。

少し歩くと、人はまばらになって、あっという間にその道を歩くのは私だけになる。

いつも通る道なのに、昼間とはちがつて、私の足音が大きく響く。だから、早く家に帰ろうと思って、私はいつもとは違う、公園の脇を通るルートで、少しでも近道をすることにした。

そして、数分後、ちゃんと颯に連絡すればよかったと、心底後悔することになる。

突然、私は、誰かに腕をつかまれた。
あまりの驚きと、恐怖に声がでない。

誰っ！？

何が起こったの！？

その腕に公園の中に引っ張り込まれる。

「は…はなしてっ」

やっとの思いで出た声は、自分の声とは思えないほど、上ずって
弱々しいものだった。

そのせいで、一気に恐怖が私のなかにあふれる。

怖い！

何、この人！

いやだ！

「離して！…んっ」

口を手で塞がれて、身動きが取れなくなる。
体中が恐怖で震える。

それでも、必死に体をよじつてもがいてもがいて、何とか逃げ出
そうとした。

口を塞いでいた手におもいきり噛み付いてやった。

「いてっ」

男の低い声だった。

「このっ」

逆上した男が、私を殴ろうと振りかぶる。

殴られる、と思った。反射的に私は目を瞑って、心の中で叫んだ。

いやーーーーっ！

二秒後。

私はあれ？と目を開けた。

絶対殴られると思ったのに、その予想してた痛みがない。

それもそのはず、目の前のその構えられた手が振りかぶったまま止まってる。

というよりも、まさに。

その男が、止まってる（……………）。

え？

何これ、どういうこと？

「華月っ！」

私が、わけもわからず、私の目の前で、固まって動かない男を眺めていたら、聞きなれた声が後ろか聞えて来た。

声の方を振り向くと、息を切らした颯が見えた。

「…そ…う……………颯っ！」

私は、ほっとする気持ちと、今までの怖かった気持ちがいつぱいになって、涙が溢れてきた。

颯の方へ走りよろうと、私の手をつかんだまま動かない男の手を、力いっぱい振り切った。

そして、颯の腕の中に飛び込んだ。

颯は、肩で息をしながら、私をしっかりと抱きとめた。

「よかった…無事で…」

私はただ、ただ、颯の暖かい胸の中で、声をあげて泣いた。

暖かい場所（４）

その晩、私は颯のベッドで横になっていた。

でも、さっきの出来事が頭から離れなくて、なかなか寝付けない。

「寝れないの？」

颯が、私の頭をなでた。

返事をするかわりに、私は颯の胸に顔を埋めた。

「ちよっと、話でもしようか」

顔を上げると、その声と同じくらい優しい颯の顔があつた。

「俺さ、なんか変だなんて最近思っただよ」

「変？」

颯は、ベッドから起き上がって窓側の机の椅子に座った。

「昨日の夜、変な夢見たんだ」

「夢？」

「そう。しかも、これが初めてじゃない」

颯が何を言いたいのかわからなくて、私は首を傾げる。

「夢の中で見た、同じことが起こるんだ」

颯は、何かを思い出すように、ゆっくりゆっくり話を始めた。

心なしか、颯の顔が強張っている気がした。

「今日だって、かづが真帆ちゃんの家に行くことになるのは、夢で見たんだ。だから、学校から帰るときに、俺、かづに『今日はまっすぐ帰れよ』って言ったんだ。」

たしかに、放課後颯は部長と話があるからって、今日は颯と一緒に帰る気分じゃなかった私が先に帰ることになったけど。真帆ちゃんの家に遊びに行くことになったのは偶然だ。真帆ちゃんは塾やらピアノやらで普段忙しいからなかなか放課後遊ぶ時間がないのに、今日はたまたま留守番を頼まれて家にいなきやいけないからって言うてたから、じゃあ遊びに行く！ってことになったんだ。

私はますます颯の話がよくわからなくて、じつと颯の顔を伺った。
颯はさらに、難しい顔をしたまた、続けた。

「それで、かづが帰りが遅くなることも……あの公園の道を通ることも……こんなことになることも……夢で見たんだ」

「え……？」

「そんなことはある分けないって、思っで。でも、かづは帰ってこないし、連絡も付かないし。それで、やっぱり真帆ちゃんの家にいるし……」

だんだんと、その颯の声は弱々しくなり、ついに震えだした。

「まさかとは思ってたんだけど……そろそろ連絡あってもいいのに、なかなか連絡ないから……迎えにいこうと思っで、ふと夢を思い出して……公園の方へ行っただ……そしたら……心臓が止まるかと思っだ」

颯は俯いたまま口を閉ざした。

颯の頬を涙が伝うのが見えた気がした。

そんな颯の姿に、胸が締め付けられる思いだった。

「ごめんなさい。」

こんなに心配かけてるなんて思わなかった。

そして、ありがとう。

私は心から素直にそう思っだ。

「……颯……ごめん……」

私は、颯の頭を抱きしめた。

「ごめんなさい……もうしない……」

「無事でよかったよ……だから泣くな」

颯は、引きつった顔で私の涙を拭ってくれた。

いつもみたいに叱られるよりも、ずっとずっと胸が痛かった。

「はあ……ほんとよかった……」

しばらくの間、颯は私の頭をやさしくなでていてくれた。

「でもさ、あれなんだっただろう」

私は、やっと落ち着いてきて、そう切り出した。

「あれか……」

颯も、腑に落ちない顔をしている。

「止まってたよね」

「止まってたね」

そう、あの男は、私の腕をつかんで殴ろうとして手を振り上げた瞬間、まるで再生映像を一時停止するみたいに、ぴたっと止まった。私も颯もちゃんと動いてたから、あの人だけが止まってたってことだ。

しかも、私が颯のところに駆け寄って、間もなく、男はまた動き出して、「え？」と呟くと、私たちを呆然と見つめて、やっと状況がのみこめたらしく、あわてて走って逃げていった。

「なんだっただろうな…俺も止まった瞬間見たよ。かづが殴られると思った」

「……とりあえず」

「そうだな、結果オーライかな…？でも、父さんや母さんには、ちゃんと自分で言えよ」

「……はい」

素直に私が返事をしたら、颯は、ふっと笑って、私のおでこをぺちつと叩いた。これは、パパが許してくれる時の癖。

「さ、寝よう」

「うん！」

「……かづ……ベッドの真ん中に寝るな。俺が落ちる……」

比翼（１）

そして、俺は再びこの不思議な体験をすることになった。

「松本颯」

授業中に教室のドアががらつと開いて、学年主任の山崎先生に俺は名指しされた。

「はい」

俺は、そのただならぬ様子に、顔を強張らせながら返事をする。俺を手招きする山崎。

呼ばれるままに、教室の後ろのドアから、教室中の視線を集めながら、廊下へと出る。

そこに、青ざめた華月もいた。

いやな予感がする。

「颯…どうしよう」

華月が俺の服の裾をつかむ。

わけがわからず、俺は山崎を見た。

「お母さんが病院に運ばれたそうだ。支度をして急いで病院に向かいなさい」

「…母さんが？」

倒れた？

きっと、一度同じことを言われているはずの華月が、そのセリフで再度その事実を突きつけられたことによるショックからか、顔をくしゃくしゃにして今にもその場に崩れ落ちそうになる。

「華月、しっかり。母さんのところへ行こう」

以外に冷静な自分に驚きながら、華月の肩を支える。

「うん…」

「病院はどこですか？父はもう向かってるんですか？」

「ああ、お父さんが病院から連絡をくれたんだ。急ぎなさい」

山崎は俺に、小さな紙切れを渡した。

そこには病院の名前とその病院の電話番号が書かれていた。近所の病院だった。

華月を見ると、すでに帰り支度をしてから俺を呼びにきたようで、カバンを手に持っていた。

今頃、そのことに気がつくあたり、実際のところ俺も動転していたのかもしれない、とこの時思った。

しっかりしなくては。

「華月。支度してくるからちょっと待つてな」

そう言つて、俺は華月の震える手を俺の制服の裾から離れた。

「う、うん」

とたんに、華月が心細そうな顔をする。

「大丈夫だよ、華月。母さんは殺したって死なない」

華月にそう言つて笑いかけて、でこを叩いた。

華月に少し笑顔が戻る。

「山崎：せんせー。タクシー呼んでもらっていいですか？こつからだったらバスだと遠回りなんで…」

「お、おう。そうだな」

なんで、あんたがテンパってるんだよ、と突っ込みたくなったが、俺はとりあえず帰り支度をするために再び教室へもどった。

ドアを開ける音に、いつせいに視線が俺に集まる。

その視線に一瞬ひるんだが、俺は無言で席に戻つて帰り支度をし、華月をつれて校門へ行き、山崎が呼んでくれたタクシーで病院へ向かった。

病室へ向かうエレベーターの中で華月がすすり泣き始めた。

俺はそつと華月を抱き寄せる。

あの、母さんに限つて…。

どうせ、あつけらかんと「ごめん、心配かけちゃった？あははは」とか言うに決まってる。

「大丈夫だよ、大丈夫」

華月に向かって言っているはずなのに、自分に言聞かせてるみたいだなと、苦笑したら、涙が出そうになった。

エレベーターが8階に着くと、一番奥の病室に『松本美桜希 様』という名前を見つけた。

自然に喉が生唾を飲み込む。

病室の中を覗くと、肩を落とした父がベッドの脇に座っているのが見えた。

「父さん」

声を掛けると、はっとしたように父はこちらを見る。

「ああ…来たか」

その声はかすれていた。

「パパっ！」

華月がベッドに横たわる母さんに泣きながら駆け寄った。

父はそんな華月の肩を抱いて、見たことのない辛そうな顔で「大丈夫だよ」と言った。

母さんは、寝ぼけて駅の階段から落ちて、意識不明のまま病院へ担ぎ込まれたらしい。頭を強く打っていて危険な状態らしい。

「…母さんらしすぎて…笑えない」

俺は思わずそう言ってしまった。

「だから、あれほど、毎日のように階段から落ちるな、こけるな、それが無理なら、そうならないように意識を持て、って言ったってなのに…足りなかったかな…」

父は華月の頭を撫でながら俺に笑いかけた。

「ママ、目覚ますよね」

涙をいっぱいにためた瞳を華月は父に投げかけた。

父は、見ているだけでこっちが痛くなるような、苦しくなるような笑顔で母さんを見た。

「なんだかな…昔を思い出すなあ…美桜希はこの病院のベッドで寝るのがほんとに好きだな…」

どういう意味だろう。

俺は首を傾げた。

でもそれを問う気にはなれなかった。

その日、母さんは亡くなった。

比翼（2）

「颯っ！」

はっと俺は目を開けた。

「颯、大丈夫？」

何が？

俺は呆然としたまま、瞬きをした。その拍子に瞼から自分のほっぺたに、何か暖かいものが流れていった。
目の前に華月の顔。
心配そうに覗き込んでいる。

「…嫌な夢でもみたの？」

華月はそっと俺の頬の涙を拭う。

…涙？

夢？

夢なのか…今は…。

「えっ！颯！？ちょっと、ねえどうしたの！？」

ほっとしたのか、後から後から涙が溢れる。

自分で気が付かないほど、こんなに苦しかったんだな。
苦しくて苦しくて。

泣いてたんだな。

ああ、夢でよかった。

俺は、力いっぱい抱き寄せて、華月を抱きしめてた。

「うわっ」

最初困惑していた華月は、何も言わずにそつと俺の背中をぽんぽん叩いてくれた。

余計に涙がでた。

俺は何事もなかったように朝食を準備した。

華月の心配そうな視線を随所で感じながらも、平然としてテーブルについた。

俺は、なんとなく目で母さんを追っていた。

母さんはいつものように、ぼーっとしたまま朝ごはんを食べ始めている。

俺の頭の中を、夢でみた光景がよぎり、一瞬にして不安が全身を覆いつくした。

「母さん」

俺自身も思いがけない低い声に、家族の視線が俺に集中した。

「ん？」

母さんもきょとんとして、目をぱちくりしている。一瞬にして目が覚めたようだった。

「…今日、階段気をつけて」

「…階段？」

「そ。階段」

「颯、どうしたの？今日変だよ？」

華月がますます心配そうに顔を覗き込んでいる。

「…そんなことないよ。早く食べないと遅刻するぞ」

知らん顔をして、そう返事をした。俺はそれ以上何も言わない

もりだった。

そして、その日は、何事もなく過ぎていった。

その日は。

だから、すっかり安心しきっていたんだ。

比翼（3）

「松本颯」

教室のドアががらつと開いて、学年主任の山崎に俺は名指しされた。

俺は、一瞬であの日の夢を思い出した。

「はい」

俺の声は震えていた。

ドアの向こうから俺を手招きする山崎。

教室の後ろのドアから、教室中の視線を集めながら、廊下へと出る。

やはり、そこには青ざめた華月が帰り支度をして立っていた。

「颯…どうしよう」

華月が俺の服の裾をつかむ。

「お母さんが倒れて、病院に運ばれたそうだ。支度をして急いで病院に向かいなさい」

「…母さんが…」

母さんが倒れた。

今度は、夢じゃない。

これは現実だ。

俺はいつの間にかこぶしを握り締めていた。
すっかりしなくては。

華月が、顔をくしゃくしゃにして今にもその場に崩れ落ちそうに

なる。

「華月、しつかり。父さんのところへ行こう」

「うん…」

「病院はどこですか？父はもう向かってるんですか？」

「ああ、お父さんが病院から連絡をくれたんだ。急ぎなさい」

山崎は俺に、小さな紙切れを渡した。

そこには病院の名前とその病院の電話番号が書かれていた。

不思議だった。

夢と同じ会話、同じ映像が目の前で繰り返されている。

自分の口からでてくる言葉すら、まるで言わされているような感覚に陥る。

「華月。支度してくるからちょっと待ってな」

俺は帰り支度をし、華月をつれて校門へいき、山崎が呼んでくれたタクシーで病院へ向かった。

どこまでも、夢が再現されていく中、俺と華月が母さんのいる病室へたどり着いたとき、やはり夢と同じように肩を落とした父が母さんのベッドの脇に座っているのが見えた。

「父さん」

声を掛けて、はっとしたように父はこちらを見る。

「ああ…来たか」

その声はかすれていた。

「パパっ！」

華月が父に駆け寄って、泣き出した。父は華月をしっかりと抱きとめて、見たことのない辛そうな顔で「大丈夫だよ」と言った。

やはり、母さんはつまり、寝ぼけて駅の階段から落ちて、意識不明のまま病院へ担ぎ込まれ意識不明の重体だった。

「…母さんらしすぎて…笑えない」

もう、疑う余地がない。

つまり、このままだと…。

このまま夢の通りに進むと母さんは死んでしまう。

どうにかして、夢とちがう結果にできないだろうか。

何とかできないのか。

俺には何もできないのか。

何も出来ずに、母さんが死んでいくのを待つしかないのか。

母さんが死んでしまうのを知っているのは俺だけなのに。

俺は、ぐつと握り締めた手に力を込めた。

「だから、昨日、階段気を付けろって言ったんだ」

父は、見ているだけでこっちが痛くなるような、苦しくなるような笑顔で母さんを見た。

「なんだかな…昔を思い出すなあ…美桜希はこの病院のベッドで寝るのがほんとに好きだな…」

ただ、その父の言葉が気になって、俺は首を傾げた。

だから、この時ほんの少しだけ夢とは違う現実があったことに、俺はこの時は気がついていなかった。

「どういう意味？」

そう聞いたのは、華月だった。

「美桜希は、ずっと前もここで、こうして何年も寝ていたことがあったんだ」

何年もここで寝てた？

どういう意味なんだろう。

俺は父を見つめた。父は寂しそうな笑顔を浮かべていた。

「何年も寝てたってどういうこと？」

俺がそう問いかけたとき、「みさ姉！」と病室の入り口から聞き

覚えのある声が聞こえた。

「新さん！みさ姉は！」

それは、母さんの妹の千明希おばさんだった。

何年ぶりだろう、彼女に最後に会ったのは…小学校の頃だったか、中学生の頃だったか…。

「千明希さん…忙しいのにごめん」

返事をした父さんの顔に、一瞬、ほっとしたような安堵の顔が浮かんだ。

「何言ってるのよ。どうせ、またみさ姉は眠ってるだけでしょ？」
…また？

さっき父さんが言ってた、“ずっと何年も寝ていた”っていうのを、さしているんだろうか。

しかし、口を挟むことができず、俺と華月はただ二人を見守るしかなかった。

「それが、今回は…」

「大丈夫よ。だって、みさ姉のことだもん」

「……そうだよな」

「そうだよ」

千明希おばさんは、そういつて父さんの肩に手を置いた。父さんは力なく笑った。

俺はその父の…父さんの顔を一生忘れない。

そして。

その日の夜、母さんは亡くなった。

比翼（４）

その日の夜、２時を回った頃、俺と華月は自宅に戻ってきた。

まだ病院に残っている父に「帰って、少しでも寝なさい」言われ、呆然としている華月を連れて帰ってきた。

華月は抜け殻のようになってしまって、一言も言葉を発しない。

俺たちは、真っ暗な俺の部屋で、身を寄せ合って布団で丸くなっていた。

制服のまま。

まるで段ボールに入れられて捨てられた子猫のように。

寝れるわけない。

俺は夢で、母さんがこうなることを知っていた。

そう、知っていたんだ。

もう、疑うことはない。

原因はどうであれ、俺はいわゆる“予知夢”を見れるようになったしまったんだ。

だから、俺だけは、母さんがこうなることを阻止することが出来たはずなのに…。

何もできずに…。

結局死なせてしまったんだ…。

俺が、今朝もっと、階段に気をつけるように、きつく注意していれば…。

頭の中を、ぐるぐると後悔の黒い渦が回り続ける。自然と涙が枕

を濡らした。

一度決壊した涙は、もうせき止めることはできなくて、後から後からあふれ出し、声を出さないようにするのが精一杯だった。

そんな俺に気がついた華月が、そつと俺の頭を抱きかかえるように、そつと自分の胸に俺の顔を押し当てた。

ますます、涙は溢れていく。

「ねえ…颯…」

華月は、抑揚のないかすれた声で俺を呼んだ。
返事はできなかった。

華月もきつと、それを望んでいないと思った。

「ママが…死んだなんて嘘だよね……」

その、静かな声が部屋に響いた。

まるで、自分と華月しか、今この世界には存在しないような気分になった。

「ママは…パパが本当に好きなの。パパもママがいないと、生きていけないの。…神様が本当にいるなら、どうしてそんなパパとママを引き離すの？ママは…何か悪いことしたの？」

その華月の言葉が俺の中でこだまする。

「ママに会いたいよあ……ママ……ママ……帰ってきて……」

華月はついに声を上げて泣き始めた。

そっだよ。

なんで母さんなんだ。

母さんと父さんは、いつも一緒にいるだけで幸せそうなんだ。

どうしてその二人を引き離すんだ。

どうして父さんから母さんを奪うんだ。

どうして俺たちから母さんを奪うんだ。

母さんが何をしたっていうんだ。

俺は、まだ母さんに…何もしてない。

何の親孝行もしてやれてない。

お願いだ…。

母さんを…奪わないでくれよ。

俺たちから…奪わないで。

そのときのことをあとで聞いたら華月も同じことを考えていたと、
言っていた。

その時のこと。

つまり。

俺たちは、そのとき時を飛んだ。
。

あの猫だね（１）

何が起こったのかわからなかった。

気がつく、私と颯は制服姿で駅の階段の下にいた。

泣き顔で抱き合う私たちを、怪訝そうな顔でたくさんの人が避けて通る。

どうということ？

さっきまで、颯の真つ暗な部屋にいたのに。

颯の顔を見ると、颯もわけがわからないといった表情であたりを見回している。

不意に、颯が信じられない物を見たような顔をした。

「かづ、あれ見ろ」

颯が指差す方向を見ると、駅の壁に埋め込まれた液晶テレビの中のお姉さんがニュースを読んでいるのが目に入った。

何が言いたいんだろう？

わけがわからず、颯の顔をもう一度見ると、颯の顔が青ざめていた。

「日付見てみる」

日付？

もう一度その液晶に目をやって、私は目を疑った。

「…え？」

それは昨日の日付、5月27日。

時刻は7時34分。

つまり、どうということ？

何がどうなってるの？

「これ、今朝の7時半ってことだよな」

颯も半信半疑という顔でそう言った。

「どうということ？」

「わかんない」

「……タイムスリップ？」

「そうかもしれないよ」

その颯の返事は、意外だった。

絶対、ありえない、って馬鹿にされと思った。

でも、颯の顔は真顔で、どこか確信してるみたいだった。

颯は不意に何か思いついた顔をして、ごそそと自分の制服のポケットを漁った。取り出したのは携帯電話。

「かづ…正解だ」

颯が私に差し出した携帯を見ると、5月28日午前2時37分。

「何で…？」

「…わかんない。でも…一つだけわかることは、最近、俺たちの周りでおかしなことが、何度も起こってるってことだ」

「おかしいこと？」

こないだの変な男が突然動かなくなったことが、私の頭の中に、ぱつと浮かんだ。

「俺の夢も。こないだの男のことも、そして、今のこれも」

そう言われてみれば…颯が、夢で見たことが実際に起こるって言うてたことを思い出した。

何で突然？

そこで私は、はつとして颯を見上げた。

「かづもそう思う？」

「…うん」

「あの猫だね」

二人の声が重なった。

そういえば、あの猫がなんか変なことを言ってた。

あれが原因なのかな…？

なんて言ってたか正確には思い出せないけど…。

「もう一つ」

颯の声が、少し、力を帯びていた。

「母さんを助けられるかもしれない」

「えっ？」

「ほら…」

急いで、颯の指差す方を見る。

すると、慌てた様子で駅に走ってくるママが見えた！

「ママっ！」

ママだっ！

ママがいるっ！

ママが生きてるっ！

「華月っ！」

ママに駆け寄ろうとした私の腕を、颯が掴んだ。

「かづ、待って。今行って、階段気を付けてって言ったところで、聞くような母さんじゃないから…」

颯は苦笑いしていた。

確かにそうだけど…

じゃあどうしたらいいのよ。

「ちよつと見てよう」

私たちは柱の影に身を隠して、ママが通り過ぎるのを待った。

ママは私たちの背中側を通って、階段を駆け上がり始める。

…足でも踏み外して、階段から転げ落ちたのかな…ママ…

私も颯も、じっとママの背中を目で追った。

「行くよ！」

「うん！」

私たちはママのすぐ後ろから階段を駆け上がった。

まさにその時！

階段を下ってくる太めのおじさんと、ママの肩が勢いよくぶつか

った。

ママがバランスを崩す。

「ママっ！」

あの猫だね（２）

落ちる！と思った瞬間、私も颯も手を伸ばしていた。

私は倒れてきたママを両手で受け止める。

でも、その勢いで、ふわりと後ろに倒れそうになった。

やばい、落ちる！

そう思っ、目をぎゅっと瞑ったとき、力強い腕に引っ張られた。
颯だった。

颯の手は片手を手すり、もう片方を私の腕を掴んでる。

ママは私の腕の中。

派手な音を立てて、ママの鞆だけが、階段を落ちていった。

「あつぶねえ…」

颯が深いため息をついた。

私も落ちるかと思った…怖かった…。

ほっとしたら私もため息が出た。

「怖かった…落ちるかと思った…」

ママが、そんなことを言いながら私の顔を見る。

「え？かづ？…あれ？颯まで！」

ママはすつとんきような声を上げてる。

のんきなもんだなあ…今死に掛けたのに…。

なんだか、急に腹が立ってきた。

「ママ！階段気をつけてよ！」

「…うわ、びっくりした。かづに叱られるなんて」

「びっくりしたじゃないよ！死ぬとこだったんだよ！」

思わず声を荒げた私に、周りの人が視線を投げかけてくる。

なのに、ママはそんなのお構いなし。

「死ぬなんて、大げさね〜！ちよっと落ちそうになっただけじゃない」
「い」

私の頭から血の気が引いた。

颯の言うとおりでた。あの時私が飛び出して、階段に気をつけるように言ったところで、こんな会話が繰り返されるだけだったと思う。

「母さん」

それまで黙って、ママの代わりに落ちた鞆と荷物を拾い上げていた颯が、地の底から湧きしてきたような怖い声でママを呼んだ。

思わず、私までビクツと体を震わすほど、颯の目は据わってた。

こ、怖すぎる…。

もしかしくなくても、ものすごい怒ってる…。

「とりあえず、通行人の邪魔だから」

颯は邪魔にならない場所まで移動することを私たちに促すと、深い重いため息を付いた。

「母さん」

「は、はい」

思わずどもってしまふママの気持ちもわかるけど、今は同情しない。

「今ね、母さんを助けようとした華月まで、落ちそうになったんだよ、気がついてた？」

「え？」

とたんに、ママの顔が青ざめた。

「母さんだけじゃなくて、ほかの人も巻き込むこともあるんだから、気をつけてよ」

ママは、私の顔を眺めてから、もう一度颯を見た。

ママの顔が、苦しそうに歪んだ…。

本当に死にそうだったことに、気がついたのかな。

「うん、ごめんね。気をつける」

ママは、今度は反省したみたいだった。

私がほっとすると、颯がため息を付くのが一緒だった。

「わかったならいいよ。帰ってきたら、たっぷり父さんに説教してもらっから」

颯はにやつと笑った。

「げっ」

「うわ…説教長そう…」

私とママの顔が同時にひきつる。

「事細かに、報告するからそのつもりで」

「…がーん…」

そんな泣きそうなママの顔を見て、思わず私は笑顔になった。

颯もニヤニヤ笑っている。

「母さん、ほら、遅刻するよ？」

「はっ！そうだった！」

ママは、腕時計を見て、やばいっ小さくつぶやいて、颯の差し出した自分の鞆を受け取った。

「あんたたちも、遅刻するよっ。気をつけていておいでっ」

そういう終わる前に、ママは階段を再び駆け上がろうとした。でも、そこでピタッと動きを止める。

「気をつけます」

ママは颯の方を見て、笑顔でそう言った。

「そうしてください」

颯は、クスッと笑った。

……こういう時、私はママの子なんだなって、ちょっとだけ思う…。

身に覚えのある会話だな、と思ったただけだけど。

「はあい。二人とも、ありがとう！いつてきます」

ママはとびっきりの笑顔で、こちらに手を振った。

「いつてらっしゃい」

私たちは、久しぶりに、ママを見送った。

最近、そういえば私たちより先に仕事に出かけるママを見送りするのは、パパで。

ママに『いつてらっしゃい』って言うてないことに気がついた。

「『いつてきます』って何のために言うか知ってる？」

私はママの背中を目で追いながら、颯にそう言った。

「なんだよ、急に」

颯の方を見ると、なんだか嬉しそうだった。

「昔ママに教えてもらったの」

「母さんに？」

「うん」

颯は再び、もうママの見えなくなった、階段を見た。

だから、なんとなく、私もそつちを見る。

「『いつてきます』はね、『ただいま』を言うために言うんだって」

「…なるほど」

「ママ…帰ってくるよね」

これで、ちゃんと今日家に帰ってくるよね。

大丈夫だよな。

「…そうだな」

颯の優しい声が、私を安心させた。

きつと大丈夫。

そう思ったら、目頭が熱くなってきた。

私たちは、しばらくそのまま、ママの見えなくなった背中を追いかけていた。

「ところで、かづ」

沈黙をやぶったのは、颯だった。

「ん？」

「俺たち、どうやって28日にもどるんだろう…」

「そうじゃん！どうすんだろう！」

そもそも、どうしてタイムスリップしちゃったかも分からないのに。

もどれるの！？

「…もどらないで、このまま学校へ行けって事かな…」

颯が、そんなことを言い出した。

「やめてよ…ほっとしたら眠くなってきたんだから私…」

「俺も…」

「家で寝たいよ…」

私たちは、がつくりとうなだれて、肩を落とした。

「でも、学校行くにも…手ぶらだよ…」

「あ、そうか。どっちにしても家に戻らないといけないのか…」

手ぶらで学校に行ったら、先生たちに何言われるかわからないし

…。

「帰るか…」

「そうだね…」

27日をもう一度やり直すってことよね、私たちだけ。

なんかそれも不思議な話だけど。

そんなことを考えながら、颯の後について私も歩き出した時、颯が私の腕をぐいっと引っ張った。

「前、ちゃんと見て」

通勤時間の駅で、何も考えずに、前に歩こうとして人にぶつかりそうになった私を颯が、かばってくれた。

「あ、ごめ…」

ごめん、ありがとう、そう言おうと思った。

言おうと思ったのに。

その後の言葉を私は飲み込んでしまった。

「…あ…」

颯が小さく声を上げたとき、私たちは薄暗い部屋にいた。

あたりを見回しても、今まで目の前にいた、たくさんの通行人はいない。

どうみても、ここは颯の部屋。

「…もどってきた…の？」
半信半疑で、私が颯を見る。

颯は、慌てた様子で自分の机の上を探って時計を見る。

「28日」

颯は、時計の画面を私に見せた。

確かに、28日の3時01分の文字。

「…帰ってきた…のかな」

颯もほっとした顔をしてる。

よかった…帰ってこれたんだ…

…ん？

よかった？

私のはつとして颯を見ると、颯も同じ顔をしていた。

そして、私たちはほぼ、同時に颯の部屋を飛び出した。

「ママっ！」

私たちは、一目散にママとパパの寝室へ！

「ママ、ママ、ママっ！」

私が叫びながら、寝室のドアを勢いよく開けると、ママとパパがベッドから何事か、と飛び起きるのが見えた。

生きてる！

ママが生きてる！

私は、胸が詰まって…苦しくなって…涙が溢れてきた。

「どうしたの、二人とも…ちょっと、かづ、何泣いてるの!？」

「ママあ~~~~！」

私は、たまらず、ママに抱きついた。

「え、ちょっと、かづ？」

そんな困ったようなママの声と。

「なんだ、なんだ？華月はどうしたんだ？」

そんなパパの寝ぼけた声と。

「……すごく怖い夢をみたんだよ」

そんな颯の声が、ママのあったかい腕の中で聞こえた。

テイクオフ（１）

俺たちがあの日、母さんを助けて“帰って”きた後、華月はしばらく母さんから離れずにワンワン泣いて泣いて泣き疲れて眠ってしまった。

両親は訳分からず終始困惑顔で華月をあやし続けていた。

眠りこけた華月を抱き上げ、華月の部屋へ運び、俺も寝ようとベッドに潜り込む。

「はあ」

無意識にため息が飛び出した。

ああ…よかった。

嘘じゃないんだ。

母さんは生きてる。

華月みたいに素直には表にだせないけれど…明らかに安堵している俺がいる。

無意識にずっと力が入りっぱなしだったのだろう、肩がガチガチに凝り固まっている気がする。

「まったく……世話のやける母と娘だ……」

毒ついて笑みを浮かべてみた。

久しぶりに一人で横になるベッドは広くて。
久しぶりに一人ですごす夜の自室は静かすぎて。
そんな言い訳を自分にしながら。

自分の顔を両手で覆った。

あとからあとから溢れる涙を止めることはできない。

一度にたくさんのお持ちが、抑えていたお持ちが、涙と一緒に決壊したみたいだった。胸が苦しくて息が出来ない。

人は悲しくても、嬉しくても、同じように涙がでるから不思議だ。

でも……。

……まさかこれが夢で、また華月にベッドから蹴り落とされて目が覚めるなんてことは……ないよなあ……。

そんな不安が頭をよぎった時だった。

「颯っ！」

バンっ！という騒音と共に部屋のドアが開いた。生きた災害、またの名を松本華月はまるで弾丸のように一直線に俺の方へ飛んできた。

「うっ！」

当然のように俺の腹の上に飛び乗った華月。

声にならない悲痛な俺の叫びは、これまた当然のようにスルーされる。

「ねえ、さっきのってどうやるんだろうね」

既に目を爛々とさせた華月が俺の腹の上に馬乗りになって聞いてきた。

「どうやる、とか言う前に、重い……。」

「わ、わかったから、降りろ……。」

華月は面倒くさそうに、俺から降りた。

「ねえ、ねえ、ねえ、ねえっ！」

「はいはいはいはい？」

もう4時近いというのに、何だってそんなに元気なんだお前は……。そんなため息を付きながら適当に答えた。しかし華月はそれを気にとめる訳もなく。

「もう一回やってみない？」

「やってみない」

俺は即答した。

「えーっ！ 何でよ！」

「いいか、華月。今何時だ？ ん？ 時計読めるか？」

「4時12分？」

華月は真顔で答えた。

「そんなことを聞いてるんじゃないんだよ。俺は、もういい加減に寝ろといってるんだ。明日学校あるんだぞ？ そもそも何だっけ起きたんだよ、さっきまで爆睡してたくせに」

一気に俺がまくし立てたが、華月は動じない。

「じゃあ分かった！ 学校から帰って来たら実験ね」

「……はいはい。早く寝ろ」

「絶対約束だからね」

まあ、俺もホントにタイムスリップが出来るようになったのかどうか、気になるところだ。有り得ないことではあるが、俺と華月が昨日に一時的にタイムスリップし、母さんの運命を変えて来れたのは確かな事実のようだった。

物語やドラマの世界じゃあるまいし、そんなことが何度もあつて
たまるか、と思う気持ちもある。

……やめやめ。

こんなこと考え始めたら寝れなくなる。華月の思うつぼだ。

と、そこで華月を見ると、すでに俺のベッドスペースを半分占領
して寝息をたてていた。

早っ！

ていうか……今日も俺の部屋で寝るのかよ……。

別にいいけどさ 蹴り落とされなければね。

俺は小さくため息をついて、華月に布団をかけなおし、自分も眠
りについた。

テイクオフ(2)

5月28日、午後10時半頃。

こついつ時の華月は、文句がつけられない。

俺はいつものように風呂から上がって、タオルで頭を拭きながら自室のドアを開けた。

「……」

そこには、俺のベッドの上で正座している華月の姿があった。俺の顔はおそらく引きつっていただろう。

……見なかったことにしよう。

無言のままに、ドアを閉めようと試みる。

「ちょ、ちょ、ちょっと！ 颯っ！」

華月があわててこちらに駆け寄り、もう一息で閉まるところだったドアの隙間に自分の足をつっ込み、それを阻止する。

俺は心の中で舌打ちをした。

こついつ時ばかり、反応の早い華月だ。

「約束だよ！」

「……そうだったけ？」

「風呂も入ったし！」

「聞いてないし」

「歯磨きもしたし！」

「聞いてないから……」

華月は得意げにいちいち俺に人差し指を突きつけながら報告する。報告内容は幼稚園児と変わらない気がするの俺だけだろうか……。さあ、どこからでもかかって来いと言わんばかりに華月は胸を逸

らした。

「……宿題は終わったんっすか？」

「終わらせました！今日は真帆ちゃんと学校で休み時間にやつちや
ったもんね！」

「……それはそれは」

もう一度言う。

こういう時、だけ、華月は完璧だ。

俺の教育の賜物なのか…？

喜ぶべきなのか…？

「じゃあ…」

俺が口を開くと、華月は目を輝かせて俺の次の言葉を待つ。

「……」

「じゃあ〜？」

「自分の部屋でおやすみください」

俺は早口で言い終わるや否や、ドアを大きく開けて華月の横をすり抜け、布団にもぐりこんだ。

「は〜っ！？」

布団の外から、華月の絶叫が聞こえる。

「本日のご来室ありがとうございます。すでに颯くんは寝ています。速やかに退出してください」

俺はわざと鼻をつまんで、電車のアナウンスのような声をだした。すると、返事の変わりに、華月得意のヘッドスライディングが炸裂した。

勢いよく、華月の怒りのこもった攻撃に、俺は呻く。しかし、華月の攻撃は続いた。

俺に馬乗りになったまま、俺の横腹をくすぐり始めたのだ。

「ひい〜！や、やめてくださいお代官さま！」

「良いではないか〜」

「お、お許しを……うはははは」

「私の言うことを聞くか？」

「いひゃひゃひゃ、こんの横暴ですっ！」

「ええい、うるさい。まだやるか？　こうしてくれる」

華月は器用にクルリと向きを変え、俺の足の裏をくすぐり始めた。これはたまらない。

「ギブギブ！　お代官様、仰せに従いますっ！」

俺が観念すると、華月は満足げに

「うむ。最初からそのようにしていればよかったものを」と言いながら俺の上から降りた。

その時だった。

ガチャっという音とともに俺の部屋のドアがほんの少しだけ開いた。

俺も華月もドアの方をみる。

しかし、誰も入ってこない。俺たちは顔を見合わせて首を傾げた。「ママ？」

華月はドアを開けて廊下を確認する。キョロキョロと見回すも、すぐに俺の方を振り返り、首を横に振った。

誰も居ないらしい。

「風かなあ？」

「窓開いてないのに？」

「ほんとだ」

「母さんたちが、あんまり俺らがうるさいから覗きにきたんじゃないの？」

「楽しそうだから文句も言わずに静かに戻ったのかなあ？」

「……楽しそう？　苦しそうの間違いじゃ？」

「え、ちょー楽しいじゃん、悪代官ごっこ」

「……………」

「おぬしも悪よのうーふおふおふお」

「お代官様こそっ！」

腹いせに、俺は華月にむかつて枕を投げた。しかし、華月は枕をキヤツチし、さらに高らかに笑った。

「ふおゝゝつふおつふおつ」

越後屋のため息と悪代官の笑い声が、部屋に響き渡った。

時刻は5月28日、午後22時47分。

テイクオフ(3)

「それで？」

それで、とか簡単に言うなよ、と華月に突っ込みたくなった。

「それでって？」

「だからどうやってタイムスリップするの？」

華月は獲物を捕らえた猫のような目で、俺を食い入るように見つめている。

何で俺がそんなの知ってるんだよ。

そう言ってやりたい気持ちを何とか抑える。

俺はため息を一つついて、華月をとりあえずベッドに座らせた。自分は勉強机の椅子に座る。

「できるかどうかは分からないけど、挑戦するだけしてみようか…

…」

「うん！ うん！ うん！」

華月はまるで振り子のように首を振る。

こういうところは昔のまま、ちっとも変わらない。

「まず…よくあの時のことを思い出してみようか」

どうやって“飛んだ”のか。

まず考えられる方法としたら…。

「あの時を再現してみたら、できるかもしれないぞ」

「あの時、どうやってたんだろう」

華月は珍しく、眉間にしわを寄せて腕を組んだ。

「えっとおゝ颯が泣いてて」

「………そういうことは思い出すんじゃないやねえよ………」

「颯が泣いてたから」

「繰り返すなよ」

「泣いてたから、どうしたんだっけ？」

「わざとだろう！」

俺は華月に力一杯抗議した。しかし、華月はお構いなしに、あさつての方を見ながら考え続けている。

「確か、颯に抱きつき付いたの」

「……………それで？」

若干ふて腐れ気味なのは否めない。が、そのまま華月は話を進める気なので、仕方なく数々の抗議の言葉を飲み込む。

というのも、実はあの時、俺はかなり気が動転していたらしく、よく覚えていないというのが正直なところだった。

「それで……………気がついたら、駅にいたのよね」

そうなんだ。

気がついたら周囲が騒がしくて。ビククリして涙も一瞬にして止まったわけだ。

“帰って”来たときも、突然、俺の部屋に戻ってたんだ。

たしか、華月がぼけっと歩いてたから、俺が華月の体を引き寄せた時だった気がする。

この2回のタイムスリップの共通点はなんだ？

「……………あの時何考えてたっけかなあ」

華月がベッドの上で膝を抱えながら、呟いた。

床の一点を見つめながら、ものすごい真剣に考えているようだった。その集中力と前向きな姿勢を普段の勉強にも向けたら、きっと赤点になんて悩まされることはないんじゃないだろうか。

そんな華月の様子を見ていたら、何となく頬がゆるんでしまうから不思議だ。

「そうだった！ 階段から落ちる前に止められたらって思ったの！！」

「へ？」

突然、華月が叫ぶので、俺は何の話か分からず、間の抜けた声を出してしまった。しかし、華月はさっきにもまして、興奮状態のまま俺の両腕を掴んで再び叫んだ。

「だからっ！あの時、ママが事故る前に、ママのことを止められたらって思ってたの！」

あの時？

何を考えてたかつて？

俺は愕然とした。

「俺も似たような事だったきがする」

じゃあ、“帰ってきた”時は、何を考えてたんだ。
確か…。

「……帰って寝たい……」

「え？」

今度は華月がきょとんとしていた。

「駅から帰ってきた時だよ。何考えた？」

「帰ってきた時？」

華月は再び険しい顔をして　すぐにはっと顔色を変えた。

「帰りたい！　颯の部屋に帰って寝たい！」

俺らは顔を見合わせ、頷いた。

「決まりだな」

「だね」

つまり、二人で同じことを考えたんだ。2回のタイムスリップの時に、2回ともに。

「試してみるか」

「うん！」

華月は目を輝かせて、勢いよく首を縦に振る。

もし万が一、タイムスリップがこれで出来た場合、変なところに飛ばされたらたまらない。

真夜中の無人島とか、真冬の北極とか、戦争のまっただ中とか。帰って来れないなんて非常事態も考慮すべきだ。

「よし。華月、テストフライトだ」

「ラジャー、キャプテン！」

華月はベッドから飛び降り、俺に笑顔で敬礼して見せた。

「うむ。任務は、今から30分前に飛ぶ。場所は俺の部屋だ」

「了解です！」

「今が23時になるところだから、22時半だな」

そこで俺は、ちょっと待てよ、と腕を組んだ。

もし、30分前の俺たちがタイムスリップに成功したとして、俺の部屋に飛んできたなら、『今の俺ら』と『未来の俺ら』の二人ずつ存在していたことになる。でも、実際に30分間、俺の部屋に未来の俺たちは現れなかった。

ということは、テストフライトが失敗したか、別の場所を選んだか、……別の場所に飛ばされたか。結局、飛ばなかったという選択肢もあるな。

これは……結構難しい選択だ。

俺は目を爛々とさせて、俺の様子を窺っている華月を見た。

そして、確信した。これは、たぶん『未来の俺』も絶対、テストフライトは決行してる。中止を告げたとしても、華月に押し切られているのは間違いない。だから、無駄な抵抗はやめて決行したはずだ。

だとすると、失敗か、別の場所を選んだのか？

失敗ならいいんだ。身の危険がないなら。

俺はかなり緊張している自分に気がついた。

この俺の選択は正しいのか。いつだって、何を決めるときも、俺は何度も自分に問いかけてきた。今だってそうだ。

大丈夫なのか。

華月に危険が及ぶことはないのか。

「颯？」

華月が眉間にしわを寄せて俺の顔を覗き込んだ。

これだから俺は心配性だと言われるのかな。きっと、今俺の考え

ていることを華月に伝えたところで「大丈夫だよ、行こう!」と即答されるに決まってる。

俺は頭をワシワシッと掻いた。

「……場所は、廊下だ」

俺は口を開いた。

「OK」

華月は目をつぶった。俺もつられて目をつぶる。

「いくよ。せーの」

夜22時半の廊下に。

テイクオフ（４）

「あれ？」

数秒後、華月の声が聞こえて、俺は目をあけた。
目の前に華月。

あたりを見回すまでもなく、そこは俺の部屋だった。

俺は慌てて、机の時計を確認する。時計は、28日の午後23時
04分。

失敗か。

「ダメだったみたいだな」

「えゝ。何で？」

何でって言われてもな。

俺は、わざとらしく肩をすくめて見せた。

肩すかしをくらったわりには、ほっとしているのは否めない。

まあ、何事もなかったんだから、良かったことにしよう。

少し期待していたところもあったのは否めないが。

小さく息を吐きながら、勉強机の椅子に座った。

「あ、わかった！」

俺が半分以上、諦めていたというのに、華月は何か大発見したか
のように声を上げた。

「もう一度やってみようよ、颯」

「もう一度？」

俺は華月を見上げる。

まだやる気？、とは言わないが、きつと顔に出ているだろう。
「もう一度だけ！これでダメなら諦めるから」

華月は俺の腕を引っ張って椅子から立ち上がらせようとした。俺はため息をつきながら椅子から立ち上がる。

「わかったよ」

「よし、いくよ」

華月は俺の腕を両手で掴んだまま、そう言った。そしてゆっくり目を閉じた。

何度やっても変わらないと思うけどな、と思いながら俺も目を閉じる。

「せーの」

華月のかけ声と共に、俺は心の中で呟いた。

28日午後22時30分の廊下に。

数秒後、おそろおそろ目を開ける。

目の前に見えるのは、華月。

そして……

「あ、廊下っ！」

華月が俺のセリフを取った。

そう、そこはどう見ても我が家の2階の廊下。俺の部屋と華月の部屋をつなぐ廊下だ。

「……ホントに飛んだのかよ」
思わず呟く。

はつきり言つて、信じられない事が起きてるのに、受け入れなければならぬ状況だ。

俺は呆然としていた。

だから、華月が俺の部屋のドアをあけようと、ドアノブに手を掛けた事に気付くのが一足遅れた。

ドアノブが、ガチャリと音を立てる。

「げっ！」

やばい！

俺は慌てて華月を引っ張り、華月の部屋に駆け込んだ。

「な……」

華月が何か叫ぼうとするので、手で口をふさぐ。そして、自分の口に人差し指を当てて、華月に静かにするように伝える。華月がそれを見て、頷いたので、俺は華月の口をふさいでいた手を離れた。しばらくして、隣の部屋のドアが開いた気配がした。

「ママ？」

聞き慣れた声が廊下の方から聞こえる。

その声を聞いて俺の目の前にいる華月がびつくりしたように華月の部屋のドアの向こうを見た。そして俺の顔を無言で見つめる。

俺は頷いた。

まもなく、隣の部屋のドアが閉まる音が聞こえた。

「どうやら、テストフライトは成功したみたいだな」

俺は小声で華月に話しかけた。

「ねえ、今のって私の声に聞こえたけど？」

華月は、まだわけがわかっていないようだった。

「今のは華月だよ」

「え？」

「よく思い出してみろよ、30分前のことだろう？」

そう、あの時、俺が風呂からあがって自分の部屋に戻ると、すで

に華月がいたんだ。そして、あーでもないこーでもないと言っている間に突然、俺の部屋のドアが開いたんだ。

「母さんたちが、あんまり俺らがうるさいから覗きにきたんじゃないの？」

そんなことを言っていたんだ、あの時は。

まさか、あれが華月の仕業だったとは。

「え？じゃあ……」

華月もやつと理解したようだった。なんだか嬉しそうな顔をしている。

その時、隣の部屋から「ふぉーっふぉっふぉっ」という華月の高笑いが聞こえてきた。

俺たちは再び顔を見合わせて、噴き出しそうになったのを何とか堪えるので、精一杯だった。

重くなったりユック（1）

「もう逃げられないよ」

私はにやりと笑みを浮かべた。

ビー玉のように澄んだ2つの青い眼をとらえたまま、じりじりと足を進める。

それ（・・・）は、ただ静かに、こちらの様子を伺っているみたいだった。

「華月！」

後ろからの颯の声にも、私は振り向かず、背中で颯の気配を感じ取った。

「……居たよ」

颯は信じられないというように呟いた。

そう。

ここは、あの日の川原。

桜の木の下で、あの猫と会ったあの日の川原　　。

それは数時間前のこと。

私たちは、テストフライトが成功したあとの私の部屋で作戦会議をしていた。

「まとめると……」

私と颯は部屋の座卓の上に置かれたメモ書きを囲んで、二人して

腕を組む。

メモ書きには、タイムスリップの条件、と丸字で書かれている。颯は水泳で鍛えたがっちりとした体格と小うるさい性格に似合わず、可愛い丸字を巧みに使う。だから、先生にばれないと思って、宿題とか作文とか、颯が私の分までやったのだろつと言いがかりをつけられたりもした。まあ、実際、そんなこともあった……かもしれないけど。

「まず、二人で同じ時間や場所を考える」

私がそう言つと、颯がメモ書きにペンで書き加えていく。

「それから……」

颯が言葉を切つた。

そう、テストフライトの1回目と2回目の違い。それは、私と颯が手をつないでいたということ。

「俺と華月の接触　か」

「接触？　手をつなぐ、ではなくて？」

私が座卓をはさんで向かい側にあぐらを掻いて座っている颯を見上げた。

「よく思い出してみろ」

颯は、私に優しく笑いかけた。

何のことだろう、と私は思いながら、膝を抱えて座り直した。

「たしかに、さつきと駅から帰ってきた時は、俺たちは手をつないでいた。まあ、正確にはどつちかの腕を掴んでた」

あの時、私は駅でぼけつと歩いていて、通行人にぶつかりそうになったから、颯が私の腕を引っ張つた。そして颯の部屋に帰ってきた。

さつきも私がその腕を掴んで、飛んだ。

「でもね」

颯は私の方にペンを向けて続けた。

「最初に駅まで飛んだ時は、別に手はつないでないだろつ？」

「……そう言えばそうだね。私が颯が、泣いてたから、颯の頭に手

を回してたもの」

「……………いちいち、強調するなよ、だから」

颯は悔しそうにあさつての方向を向いた。

もちろん、泣いてたから、と言う台詞を強調したのはわざとだ。

私はにやりと笑って見せた。ますます、颯は苦々しい顔で舌打ちした。

「とにかくっ！　今、考えられるのはその２つの条件だな」

「みたいだね」

私はニヤニヤしながら、頷いた。

でも、もう颯は動じなかった。それどころか、眉間にしわを寄せ、深刻ぶりながら、何か考え出したみたいだった。

どうしたんだろう。

「華月」

颯は真顔でこちらを向いた。返事をせずに、颯の次の言葉を待つ。

「もう一度、試してみようか。タイムスリップだ」

重くなったリュック（2）

10分後。

私たちは、川原に居た。

颯が選んだのは、私たちがあの白い猫を助けた日。

私たちが川原にタイムスリップしてきたちょうどその時、川原沿いの道を悲鳴を上げて走る私の後ろ姿と、二人分の荷物を抱えて私の私を追いかける颯の後ろ姿が小さく見えた。

タイムスリップは成功したみたい。

時間的にもぴったりでパーフェクトにね。

私は左手に握っていたスニーカーを急いで履くと、背負っていたリュックをぱいっと放りだして、川原の方に走り出した。

「あ、こら華月！ ちょっとまって！」

後から颯の慌てた声が聞こえる。

「それ、よろしく！」

私はリュックを指差して、ひらひらと手を振り、先を急ぐ。

だいたい、リュックの中身は、万が一、タイムスリップが失敗したとき、そして帰って来れなかった時のために、颯が用意した荷物だ。

寒いといけなから上着とかジャージとか、私が持ってたありったけのお金とか。

こっそり台所にいつてペットボトルに水を入れ、ママの密かな楽しみであるお菓子まで拝借してきて、リュックに詰め込んだ。

もちろん、全部、心配性な颯隊長のご指示にしたがったまで。

けれど、重いつたらありやしないし、走るのに邪魔なのは言うまでもない。もしかしたら、それが颯のねらいだったのかもしれないけどね。

身軽になった私は、あの大きな桜の木の下に標的の猫を見つけた。
「ちよつと、話を聞こうじゃないの!」

私は叫びながら、猫の前に仁王立ちし、にらみをきかせた。
なんて堂々とした猫なんだろう。普通、猫はこういふとき、びっ
くりしていつでも逃げられる体勢にかまえるものなんじゃないのか
しら。

ところが、この猫ときたらどうだろう。じつとこちらを見つめた
まま、目をそらすこともなく、背をぴんと伸ばして座っている。
きつと気品があるっていうのは、こういう時につかう言葉なんじ
やないかと思う。

「いったいどういう事なのか説明してくれる?」

私は、負けじと、猫を見下ろしながら続けた。

「私たちに何したのよ」

どうして、タイムスリップが出来るようになったのか。

どうして、時間が止められるようになったのか。

どうして、颯が予知夢を見るようになったのか。

なんでママが死にそうになったのか。

聞きたいことは山ほどある。どれから聞いていいのか分からない
くらい。

「さあ、答えなさいよ!」

私がたたみかけるように言っても、目の前の白い動物は、しつぽ
をふにふにと動かすだけだった。

そればかりか、小さくあくびをすると、桜の木の下から川原の方
へ歩き出そうとした。

私は、そうはさせるかと、さつと回り込んで猫の前に立ちふさが
る。

「もう逃げられないよ」

私にはやりと笑みを浮かべた。

私は、猫との距離をじりじりと詰め寄る。

猫はそれ以上、歩こうとせず、にまっすぐその強い青い瞳をこちらに向ける。

追い詰めたのは私のはずだったのに、逆にこっちが捕らえられたみたいだった。

動けない。

ごくりと私は生唾を飲み込むのが精一杯だった。

「華月！」

背後からやつと追いついた颯が声を掛けてきたけど、私は猫から目をそらさなかった。

颯は私の先の猫に視線をうつしたのだろう。まもなく、「……居たか」という颯の抑揚のない呟きが聞こえてきた。

その時、初夏の香りがただよう川原からの風が、私たちを包み込んだ。

頭上の大きな桜の木が囁くように歌ったように感じた。

その風でなびいた猫の白い毛が月明かりを反射し、キラキラと光って見える。

なんて綺麗なんだろう。

まるでガラス細工みたいだ。そう思った。

でも、何かがおかしい。

私は眉をひそめる。

だって、こんなに桜の葉が生い茂った桜の木の根本に居るのに、
なんでこんなに周りの様子がはっきり見えるのだろう。
まるで、街灯がそこにあるかみたいに明るく感じる。

私は、頭上に視線を移す。

桜の葉の間からかすかに、ぼんやりとした輪郭の月が見えた。

やっぱりおかしい。

こんな微かな月明かりで、こんなに桜の木一帯が明るく見えるわけがない。

どうしてこんなに猫が輝いて見えるのだろう。

なんなんだろう、この猫。

私はこの不思議な現象を目の前にしているのに、なんだかワクワクしてきた。

自分でも不思議だけど、ちっとも恐くはない。
それはきつと……。

私は隣に立つ颯の顔をそつと見上げた。その存在だけで、表現で
きない安心感を感じる。

颯がいれば、私は何でもできる。
颯がいてくれるから、私は自由に動ける。

私はぐつと唇の端に力を込めて、再び猫に向き直った。

「説明してくれ」

颯が静かに口を開いた。
すると……。

ナニヲ シニ キタ

低い声が私の頭の中に響いた。まるで、おじいさんの声だ。そして、それは以前聞いたあの日の猫の声と同じ声だった。私は颯を振り返る。颯は私と目を合わせ、頷いた。

「お前に会いに来た」

颯が短く答える。

「お前は俺たちに何をしたんだ」

再び、川原からの風が草や葉の存在を告げる。

長く重い沈黙に感じた。知らず知らず、私はつばを飲み込んでしまっ

ジカン ガ ナイ

「時間？」

私が口を開くまえに、颯が眉間にしわを寄せて聞き返す。

時間て何？

何の時間？

オマエ モウスグ キエル。 ハヤク イケ。

「は？ 消える？ 意味分かんないんだけど、分かるように説明してくれない？」

私は猫に視線を合わせるようにしゃがみ込んだ。

しかし、その私の要望には応えるきはないらしい。

猫は黙ったまましつぽを動かすだけだった。

「行かつてどこに行けばいいんだ？」

そんな颯の質問にも答えず、猫はゆっくりと桜を見上げた。

つられて、私も桜に視線を移す。青々とした葉が生い茂って力強い印象が強い。

その枝は太く横に伸び、根も幹も雄々しい。つい数ヶ月前には、この木にはピンク色の小さな花びらが咲き誇っていたはずなのに、そんな様子はまったく想像できない。

ハヤク……

私は、その声にはっとして猫を見た。その猫の姿は、だんだんと薄くなって、そして、すーっと消えてしまった。

「え？」

私と颯は小さく声をあげ、二人で顔を見合わせた。

と、同時に、颯の体が揺れた。颯の驚きの表情が一変する。

まるでスローモーションのように、颯はうつぶせに倒れた！

数秒後、私の悲鳴が川原に響き渡った……。

ぬくもり

「颯！」

華月かな？

誰かが俺を呼んでる。

確かめたいのに、体が重い。

目が開かない。

口も動かない。

どうなってるんだ。

「颯、目をあけて！」

泣いてるのかな。

華月の声は嗚咽混じりだ。

「颯！」

泣くなよ、華月。

どうしたんだよ。

俺はいつものように、華月の頭を撫でようとした。
でも、腕が鉛でできているかのように動かない。

あれ？ どうしたんだ、俺。

「颯！死んじゃ嫌あゝ！」

え？
死ぬ？
俺が？

おいおい、待てよ。いくら何でも、華月、俺を殺すなよ。
つい、苦笑した時だった。

ハヤク イケ

この声。
聞き覚えがある。
この老人のような声は、あの猫だ！

俺に何をした！なんで華月が泣いているんだ！
そう言ってやりたいのに、まるで自分のものではないかのように
体が動かない。

タスケテ

その言葉に、俺は思考を停止せざるを得なかった。
助ける？誰を？

助けて

突然、聞いたことのない女性の声がした。
もう訳が分からない。
何がどうなっているんだ。
どうして、俺の体は動かなくて。
どうして、華月が泣いていて。
どうして、俺が死にそうで。

猫の声がしたかと思えば、女性の声が聞こえてきて。
しかも、助けを求めている……？

俺が未だかつて無いくらい混乱してショートしそうになっていた
その時、俺の腕に何かが触れた。

暖かい 手？

そう思った瞬間、俺の頭の中に大量の映像が流れ込んできた。

それはまるで大量の写真をいつきにめくるように。

「うああーっ！！」

「颯！」

肩で息をしながら、俺は飛び起きた。

顔を上げると、青ざめた顔で覗き込む華月の潤んだ瞳とぶつかった。

「颯……よかった」

あたりを見回すと、川原の桜の木の根と、草の臭いと、冷たい土の感触がいつきに俺の感覚神経を伝わって脳に到達したようだった。

「俺は……？」

「颯は、急に倒れたんだよ。呼んでも目を開けないし、びっくりしたよ、もう」

華月はそう言いながら、俺の胸の中に飛び込んできた。
倒れた？ 気を失っていたということか？

じゃあ、さっきのは夢だったのか……？

「もう大丈夫だよ、華月」

腕の中で涙する華月の背中を撫でながら、俺は呟いた。
「大丈夫だ……俺は死んだりしない」

二章 蒼い瞳と白い雪（1）

目が覚めるなり、私はパジャマのまま本棚を漁り始めた。

とは言え、もう昼近いだろう。日曜日くらい朝寝坊は許されてもいいと思う。

「えっとえっと……」

背の高い背表紙の前を指が彷徨い、古ぼけた一冊のアルバムを探し当てた。

これだ、きつと。

そのアルバムを本棚から引っ張り出すと、ぱらぱらとページをめくる。

もう、変質して色あせてしまった写真たちの中には、若かりしころのパパとママ、赤ん坊の颯や私の姿。

ママを真ん中に挟んで、ママの両頬に颯と私がキスをしている写真。

パパの寝顔に私と颯が落書きをしている写真。

私と颯がオムツ姿のセミヌードで水遊びしてる写真。
ざつと10〜15年以上前の写真ばかりだ。

不思議だなあ。

写真ていうのは、そのときの風景や人物をそのままの姿で残す映像、というだけではないんだね。

カメラを向けた人の感情とか、写っている人の楽しさや嬉しさまで、しっかり閉じ込めておくことができるものなんだ。

そこには、パパとママの作った“家族の幸せ”が形になっているんだろうなと思った。

「何を始めたんだ？」

声のする方を見ると、開けっ放しの私の部屋のドアの内側をコンコンとノックする颯の姿が目に入った。

思わず、写真の中のかわいいかわいい颯と見比べて、ため息をついてしまう。

「……なんだよ」

「このかわいい颯くん、どこいつちゃったんだろっ、とか思ってないよ全然」

「……………その写真のかわいっかつちゃんは、相も変わらずかわいいことだ」

もちろん、そんな嫌味ったらしい発言は聞き流すに限る。

「あ、ママかわいいっ。このワンピースまだ持ってたら、貸してもらおう」

わざとらしく言うと、ドアのほうから悔しそうな声が聞こえた。

「そんなことより、寝てなくていいの？」

「大丈夫だよ、もう」

颯が桜の木の下で突然倒れた時は、本当にどうなるのかと思った。1、2分で意識を取り戻したから良かったものの、あのままだったら病院にも行けないし、帰れないし。

考えただけでもぞっとする。

でも、颯の話によると、意識を取り戻したあとも、すぐに強烈な眠気に襲われたそう。だから、やばいと思って必死に耐えたらしい。

だから、やばいと思って必死に耐えたらしい。私は訳分からず、颯の言うままに、慌てて“帰って”きたけど、帰ってくるなり颯は電池が切れたようにその場に崩れて眠りだした。けれど、私が度肝を抜かれて悲鳴を上げるより先に、私も私で、急に体が重くなった。あれ？と思っている間に、次気がついたら朝だった。なんとかベッドまでたどり着いたところまでは記憶があるけど、そのあとは覚えてない。

その後の数日、何度かタイムスリップを試してみた。

今日が日曜日ということもあって、昨日の夜はかなり無茶に何度も何度もタイムスリップを繰り返した。

万が一、二人のどちらかが気絶して帰って来れないことになって
も大丈夫なように、颯の部屋から私の部屋へ30分間から2時間く
らい戻るということを計画的に繰り返した。三回目のタイムスリッ
プした直後に、颯が先にダウンしたために、結局最後のフライトは
戻ってこれなかった。

分かったことは、夜しか出来ないということ。

そして、未来には行けないということ。

さらに、大事なことが分かったと颯が言っていた。

それは、タイムスリップには限界があるということだ。

颯の推測だと、タイムスリップを繰り返すとすぐ眠くなると
いうことから、何度も飛ぶのはむりだろうということ。

特に、“遠く”に飛べば飛ぶほど、体力的負担は大きいのではな
いか。

タイムスリップした途端に、意識を失ってしまうのも危険だろう
から、悪戯に歴史見学などしてる場合ではない、というのが颯先生
のお達しだった。

ちなみに、体力的な負担は、颯の方が大きいみたいだ。

颯の考えだと、実は颯は予知夢を見ている時、本当は一人でタイ
ムスリップしていたんじゃないかということ。颯自身は夢と認識し
ていたけど。

ただ、颯が自身ではその力をコントロールできない。逆に私は、
以前、時間を止めてしまった事があった。

これらを総合すると、颯のタイムスリップの力を、私がコントロ

ールしている。それで過去へ飛べるのではないだろうか。
以上が、二人の結論だった。……ほとんど、颯のだけだ。

でも、二人でないとタイムスリップできないのだから、私がいくら、「水戸黄門に会いたい！ 大岡越前に会いたい！ 暴れん坊將軍に会いたい！ 悪代官と越後屋に会いたい……！」と叫んだところで、「却下！ そもそも、悪代官と越後屋はフィクションだ！」と即座に言われ実現するはずもなく、「本場の『お代官様、お許しを。あゝれ』が見たかったのに……」という私の長年の夢は、露と消えたわけだ。

二人じゃなくて、一人で飛べたら、絶対行つてたのになあ。残念。

その時、私の視線が一枚の写真に釘付けになる。

「あつた！」

私の叫び声に、颯がびくつと体を反応させた。

「な、なんだよ」

「ほら！ これっ！」

私はアルバムを引っつかみ、ドアに寄りかかる颯に詰め寄った。

颯はその写真を見るや否や、険しい表情になる。

「まさか……」

「この猫、あの猫じゃないの？ ねえ、違う？」

その写真には、白い猫を抱きかかえる幼い私の姿。その猫の目は、まるでビー玉のように透き通ったコバルトブルー。

「白い猫ならいくらでもあるだろう？ 考えすぎじゃない？」

そう口にするも、颯は本心でそう言っていないと、私の15年の力が全身で訴えていた。

私はアルバムを颯から奪い取り、1階へと階段を駆け下りた。

蒼い瞳と白い雪（2）

突然の私の登場で、朝食の支度をしていたパパが鍋とオタマを持つ手を止めて啞然としている。

サラダ担当のため、レタスをちぎっていたママもきょとんとしてこちらを見た。

「ど、どうしたんだ、華月」

「ママっ！」

パパを無視するつもりはなかったけど、タイミング的にそうだった。視界の端っこでがっかり肩をうなだれるパパが見えた気がしたけど、気のせいかな。

「これ見て！」

私はテーブルの上にアルバムを音を立てて置き、例の写真を指差す。ママはエプロンで手を拭きながら、テーブルに近寄って写真を覗き込んだ。

「うわ、懐かしい写真を持ってきたわね」

「どれどれ？」

パパまでついでに覗き込む。

「いやん、颯もかづもかわいい」

ママ！

見るところがちがう！

このままだと、思い出話に火が付きそうだったので、私は慌てて口を挟む。

「そうだけど、そうじゃなくて！ この猫見て」

「え、猫？」

ママの視線が、例の写真に戻ったのが見て取れた。

「あ、雪ちゃんじゃない。ねえ？」

ママはパパに同意を求めるように写真を見せた。

「ああ、ほんとだ。雪の写真、残ってたんだな」

「そつだよね。3年ぐらい一緒にいたのに、写真なんてとらなかったからね」

「猫飼ってたことがあったの？全然記憶にないんだけど」

私は写真を奪い返し、まじまじとその猫を見つめる。

どう見ても、私にはあの猫とこの写真の猫が同じ猫に思えてしょうがない。確かに颯の言うとおり、猫なんてみんな似ていて区別できないけど。

でも、私のカンが同じ猫だって言ってる。

「雪ちゃんね、不思議な猫なのよ」

ママを見上げると、優しい色の瞳とぶつかつた。

「雪ちゃんは、ママとパパが結婚する前に、パパが飼ってた猫だったんだけど、突然いなくなっちゃったんだって。でも、ママたちが結婚したあとに、また家に帰ってきたのよ」

「でも、お前たちが生まれて2年くらいだったかな、また居なくなつたんだ」

ママの言葉をパパが繋ぐ。

「それで俺らは記憶がないのか。2歳じゃね」

いつの間にか、降りてきていた颯がテーブルの椅子に座つた。

「そうね、ふらつと数日居なくなつたと思つたら、最後は颯に抱かれて死んでたんだよ。たしか、今ぐらいの時期の、雨の降ってる日だったなあ」

「え？」

思わぬところに颯の名前がでてきて、颯ばかりか私まで目を白黒させてしまった。パパは口の端を緩ませてさらに続けた。

「庭で、颯がわんわん泣いてるって華月が俺を呼びに来て、行ってみたら颯が雪を抱きかかえながら泣いてたんだよ。引き離すのが大変だった。雨はザーザー降ってるし、颯はずぶぬれのまま家の中に入ろうとしないし」

「お墓に入れてあげようね、って説得するまで、かなり時間かかったのよね」

ママまでにやにやしなから言つので、颯はいよいよ、ばつの悪そうな顔をした。

「雪は俺たちにとっても、大事な猫だったからなあ」

不意にパパはママに柔らかな笑顔を向けた。ママもそれに答えるように微笑む。

「はい、その中年バカップル、子供の前でいちゃつかない。昼飯、何作ってるの？」

颯が釘を刺すように一喝してキッチンへ移動する。パパもガスコンロに戻った。

「うらやましかろう。俺の嫁だからな、やらんぞ、愚息」

「いらん」

「娘もやらんぞ。まだやらん！ いや、誰にもやらん！」

「あほかっ！」

パパの足を、颯が軽く蹴ったのが見えた。ママと私は顔を見合わせ、同時に噴出した。

小箱

天井を見上げると、結露した無数の水滴が、懸命に重力に抵抗しているのが見えた。

俺は、浴槽のふちに頭を乗つけて、出来る限り足を伸ばした。

浴槽の長さよりも俺の脚のほうが長くなったのはいつ頃からだったろう。

水面に顔をだした膝に視線を移したものの、俺の脳裏には別のものが鮮やかに映し出されている。

あれは……なんだったんだろう。

あの時 桜の木の下で意識を失っていた時 見た夢の中の映像に、明らかに俺の記憶の中には存在し得ない映像がいくつもあった。

俺が思い出せないだけで、写真なんかで一度目になっている映像なんだろうか。

でも、この間華月が見ていたアルバムの中には、それらしき写真は見当たらなかった。

第一、写真で目にしたのでなければ俺の記憶にあるわけがない。

なぜなら、それは……若い頃の母さんの姿だったからだ。

高校生だろうか。セーラー服を着て自転車にまたがっている映像。たぶん、幼い頃の千明希おばさんだろう女の子と、まだ若い祖母さんが一緒に笑っている映像。

もっと他にも、たくさんあったんだ。

いくつものスライド写真を、15秒ぐらいの間に見せられたような感覚だった。

これが、いわゆる走馬灯というものだとして、母さんのことばかり思い出すなんてことあるんだろうか。

だいいち、今の母さんならわかる。若かりし、というか、若すぎる母さんの姿なんて、普通思い出すものなんだろうか。

「どんだけ、マザコンだよ」

深いため息と一緒にこぼれた声は、狭い風呂場ではよく反響した。とりあえず、母さんのアルバムでも見せてもらうことにしよう。

何か手がかりがあるかもしれないし。

もしかしたら、走馬灯でも、マザコンでもなくて、あの猫のメッセージかもしれないじゃないか、と大いに期待しながら、俺は湯船から上がった。

いつものように、風呂上がりには台所で一杯の牛乳を飲んだ後、俺はまだ濡れた頭にタオルをひっかけて、2階の自室に戻ろうと階段を2段ほどあがった。

でも、ぴたりと足を止め、引き返す。向かったのは母さんの自室。

「母さん」

俺は、ノックする代わりにドアの前で声をかけた。

「はい？」

ドアの向こうからは、気のない返事が帰ってきた。忙しく仕事してるのなら、またにしようかなと躊躇してた時、再びドアの向こうから声がした。

「颯？ なに？」

ドアを恐る恐る開けると、優しく笑う母の瞳に出迎えられた。

部屋は決して広くない。6畳ほどのフローリングに、パソコン机と大きめな本棚が2つ並ぶ。部屋の真ん中にはクリーム色の肌触りのよいジュータンが敷かれ、その中央に木目調の座卓が置かれている。母さんの部屋兼客間だ。いや、客間だったはずだが、いつのまにか母さんに占領された、これが満点の解答だな。

「珍しいわね、こんな時間に」

母さんは、座卓の上にハサミやらノリやら折り紙やらを広げて、何やら作っていた様子。

息子が、夜遅くに神妙な顔で訪ねてきたので、カンのいい母さんらしく、机の上を片づけだした。

「どうしたの？」

「ごめん、邪魔した？」

「いいよ、まだ時間あるし。それより何？ 珍しいじゃない？」

「うん……」

俺は思わず口ごもり、言葉を探しながら母さんの顔を見つめた。母さんはふっと笑う。

「何よ、部屋の中に入りなさいよ」

言われて初めて、俺はドアの前から一步も動けなかったことに気がついた。

それも全部……聞いてもいいのかな……この疑問が心に刻み込まれてるからだ。

俺は中へ入り、座卓を挟んで母さんと向かい合って座った。

「あのさ……」

普段なんてことはないのに、二人っきりで、しかも改まって話すとなるとなぜか照れくさかった。

言葉が口から出てこないのが不思議だった。

「何、へんな子。どうしたの？」

母さんはおかしそうに吹きだした。

俺だって変だなんて思ったさ。いちいち言うなよ。

そう思ったら余計に言葉が出なくなってしまった。

「もう、何なのよ」

ケラケラ笑いながら母さんは俺の背中を叩いた。

「笑いすぎ」

やっとの思いで出た言葉が、小さな小さなつぶやきだから、我ながら情けない。

「だって、用があるから来たくせに黙りこくってるんだもん」

「アルバム！」

「は？」

「アルバム貸してよ」

口にしてから自分で泣きたくなった。

何でそんな単語？

何でそんな説明もなしに唐突？

俺……いつももつと論理的だよな？

もう、その場から今すぐ逃げ出したい気持ちでいっぱいだった。

「アルバム？」

母さんは驚いたような声を上げた。

「そう。母さんの若い頃のアルバム」

もはや、うつむきながら投げやりな返答をするのが精一杯だった。顔を上げるのも恥ずかしい。さっきからずっとジュータンのふさふさな毛を撫でている手の感触も、俺の心を落ち着ける役目ははたせないようだった。

「若い頃ってどのくらい？　もしかして……二十歳ぐらいの？」

そういった母さんの声が、少しだけ曇った気がした。

顔をあげると、母さんの顔からは笑顔が消えている。

「二十歳ぐらいのもみたいけど……」

母さんはじつと俺を見つめた。

逆にその視線に俺は目を泳がせる。

いつも笑顔を絶やさない母さんの、その表情が何を語っているのか俺にはわからなかった。

なんとも言いがたい沈黙が部屋の空気を張り詰めさせる。

「何が聞きたいの？」

俺は母さんの口からでてきた言葉にぎょつとした。

どういうことだ。

母さんは何か知ってるいるのだろうか。

いや、でもそんなまさか。

困惑している俺を置き去りにするように、母さんは小さく笑った。

「いつか、この日が来るのはわかってたの」

母さんは立ち上がり本棚の方へ向かった。俺はただそれを目で追うしかなかった。

「楽しみに待ってたんだから」

その母さんの背中へは、母さんは何か知っている、そう言っている気がした。

でも、何を知ってるんだろう。

「私がまだ22歳だったころよ。夜、仕事から帰ってきたらアパートの前に男の子と女の子が立ってたの」

母さんは本棚の扉を開けながら嬉しそうに言った。

本棚はもう年代物で、苦しそうな声で鳴いた。

「その子たちのことは今でもはっきり覚えてる。あんなことがあったから……いろんなことがまだ思い出せなくて曖昧なんだけど、でもその子たちのことは鮮明に思い出したの」

母さんが本棚から取り出したのは小さな小箱。その小箱を座卓の前に置き、包み込むような笑顔を見せた。

「私が15年前に妊娠して、男の子と女の子の双子だって聞いたときに、やっぱりなってると思ったのよ。しかも、ぼろぼろ泣きながら新くんが双子の名前を『颯』と『華月』にしたって教えてくれた時に、ほらねって思ったのよ」

母さんは何がいたんだろうか。

俺は黙ってその言葉を待つしかなかった。

「あなたたちは、21年前の4月1日、私の前に現れたのよ。これを持ってね」

それは、片手に乗る大きさの、小さなオルゴールだった。

だから言うなって(1)

6月1日、午後10時。

俺と華月は、時報で秒針をびったり合わせた腕時計を互いに身につけ、母さんの言葉を頼りにタイムスリップを試みた。

オルゴールを片手に華月に状況を説明したら、案の定というか、当然というか、ものすごい勢いで華月が食らいついて来たのだ。「行くしかないでしょっ！」の一点張りで、相変わらず何を言っても引き下がらないから、途中から諦めたのは言うまでもない。抵抗した10分間ももったいなくすら感じるほどに。

そしてタイムスリップは決行された。

俺たちが目を開けると、あたり一帯は暗く、雲の影からのぼんやりとした月明かりで照らされた見覚えのある風景が広がっていた。ひんやりとした風が頬を撫でてゆく。

「川原？」

華月が頭上を見上げる。

つられて見上げると、大きな木が横に腕を広げるように枝を伸ばしているのが目に入る。

どうやら、ここは例の川原のようだ。

タイムスリップは成功したのだろうか。

カレンダーも時計も見あたらないので、確認するすべがない。

「何年前かな、ここ」

桜の幹に寄りかかりながら、華月も不安げに呟いた。

「何年前に飛んだかどうかはわからないけど」

俺は再び桜の木に目をやる。俺の口からこぼれた白い息が、裸の枝先をそっと包む。

「どこかに飛んだのは間違いないな」

視線の先には、大きく膨らんだ桜の蕾が開くその時を待っている

姿。

この肌寒さといい、蕾といい、6月ではないのは確かだ。

俺は持つてきた荷物から、上着を取り出し華月に渡した。

「確かめるためにも、もたもたしている時間はないぞ」

「どうするの？」

俺も自分の上着を着込みながら、華月に上着を着るように促す。

「とりあえず」

ポケットにしまつてあつたメモを取り出しながら、続けた。

「母さんになんとかしてもらおうか」

そのメモは、母さんから受け取った、当時の住所が書かれている。

「オッケー！ ママに会いに行くんだ、22才の！」

「会えるといいけどね」

俺は荷物を背負い直し、華月と共に歩き出した。

月だけが川原沿いの道を、そっと照らしていた。

だから言うなって（２）

俺らの住む町から母さんの家へ行くには、電車にのって２駅。俺たちはまず、最寄り駅に向かった。

そして駅にたどり着いて愕然とする。

「なんか変……」

華月が呆然と呟くのも無理はない。

俺たちの知っているこの駅は、改札が地上２階にあつて、電車はいつも頭の上を走っている。

駅周辺のビルや店の様子も全然違う。銀行も聞いたことのない名前だ。

「駅の窓口で今、何年かわかる情報がないかな」

まるで独り言のように呟いて、俺は窓口の方へ近づいていった。

その事務室に貼られたカレンダーが目に入り、そこに記された２年前の年号に息を呑む。

窓口のカウンターに置かれたプラスチック製の卓上カレンダーも

４月１日の表記。

時計は午後８時２３分の文字。

隣にいた華月も時計を指さしタイムスリップの成功を確信したようだった。

「４月１日……」

成功したのは嬉しいはずなのに、体を言いようのない緊張が走る。これから、どうなるのだろうか。

俺たちは何をすればいいのだろうか。

唇を噛みしめ不安そうに改札の方を見つめる華月の肩に、そっと手を置いた。

「行こう」

「……うん」

普段そうするように、俺は自動券売機で切符を買うため、千円札を機械に入れようとした。

しかし、何度入れても千円札は出てきてしまう。

「え、何で？」

その様子をすぐ隣で見ていた華月も怪訝そうな顔をする。

ちらりと隣の自動券売機に千円札を入れる男性の手元を見やる。

そして俺は気がついてしまった。

「そうか……」

がつくりと、うなだれるしかなかった。

「華月、歩くぞ」

「え？ 何で？ 電車は？」

訳も分からず、踵を返した俺を必死に追いかけてくる華月の質問には答えなかった。

いや、人が多すぎてここでは答えられない。

「いいから、歩くよ」

「2 駅も!？」

「そう!」

「ありえないって! 電車のろうよ」

文句を言いながらも華月は俺の後ろから付いてくる。

しばらく歩いて、人がまばらになってきたところで俺は華月を振り返った。

華月は完全にふて腐れている。

「華月。俺たちの持っているお金は、ここでは使えないよ」

「え？ 何で？」

俺は財布からさっきの千円札を取り出した。

「このお金は、この時代には存在しない金だ。ここでは何の意味もない、ただの紙切れだよ」

再び足を進めながら俺は続けた。

「小銭だって同じだよ。この時代にとっては未来の製造年号にあたるような年号が、ばっちり読めちゃうような小銭、使っわけにはい

かないだろう？」

「そっか……」

華月はしょんぼりと肩を落としながら隣を歩いた。

「だから……がんばって歩いて母さんに小遣いをせびろっ」

俺は少し冗談めかして言った。

「そうだね！ お小遣いの前借りだね」

笑顔が戻った華月は、どうやら不安から立ち直ったようだった。

「21年間も前借りかよ」

「しょうがないよ、ママが行けっていったんだし！」

「……母さんは一度も、行けとはいってないぞ」

「えゝ？ だってオルゴール渡してって言ったんでしょ？」

「言ってない行ってない」

俺は勢いよく首を横に振った。

「あれ？ そうだっけ？」

「オルゴールを持って現れたって言ったただけだ！」

「同じじゃん！」

「………どこがだ」

げんなりと肩を落とすのは、今度は俺の番だった。

「まあまあゝ。ほら、兄さん行きまっせゝ！」

華月は元気いっぱい先頭きって歩き出す。

「張り切っているところ申し訳ないが、華月さん、どうやら今のところ右に曲がる必要があったみたいだ」

前途多難だ。

だから言うなって(3)

どのくらい歩いただろう。

「これ、絶対北と南が逆だと思う」

その地図を描いたのが母さんだということを忘れていた。何度もメモ用紙の上下をひっくり返ししながら、俺たちはやつの思いで『武山』という表札のかかった一軒家の前にたどり着いた。

大きくはないし新しくもなさそうだが、手入れがよく行き届いているようで、黒い無機質な門越しに見える小さな庭には、かわいい植木鉢が綺麗に並べられている。もっと暖かくなれば、この植木鉢に色とりどりの花が咲く様子が容易にイメージできる。

「ここ？」

不安そうな顔で華月がこちらを振り返る。

「たぶんね」

俺はメモ用紙をポケットにしまいながらため息混じりに答えた。いうなれば、俺たちが今目の前にしているのは、祖母の家。

しかし、その祖母の家まで迷いに迷ってたどり着いたというのは、当然といえば当然だろう。

一度も来たことがない、というか記憶のない場所なのだから。

正直、母方の親戚のことはよく知らない。

俺たちが幼い頃に祖母は他界したと聞いている。

千明希叔母さんに会ったのだって、こないだの予知夢騒動がなければ、いつ会うことが出来たかわからない。

「じゃあ、とりあえず」

華月は大きく深呼吸をし、右の人差し指を頭上高くに掲げた。インターフォンを押す前の気合い入れだろう、と俺は察知し、慌てて声をかける。

「ちょっと待った！」

インターフォンに人差し指が伸びたところで、華月がぴたりと止まった。

「くれぐれもママってよぶ……」

「どちらさま？」

背後から、よく耳に馴染んだ声が聞こえ、俺たちは勢いよく振り返る。

「あ、ママ」

そこには、俺のよく知る母とは違う、女性がきょとした顔でこちらを見つめていた。

「だから……ママと呼ぶなと言おうとしたというのに」

などという俺のつぶやきなぞ、もう華月の耳には届かない。

「ママ〜！ え、写真よりかわいい！」

華月はつかつかと女性に詰め寄り、こともあろうに抱きついた。

これには俺もぎょとした。

「え！？ ちょっと！」

女性は慌てて華月を引き離すが、華月はそんなことお構いなしだった。

やっぱり華月は最強かもしれない。

そう再確認した時だった。

俺の目の前の世界が揺れる。

「あ、そっか。ママ今22歳だもんね。わかるわけないよね〜あはは」

「ママ？」

「そっ。私ママの娘〜。あっちのが颯。こちら双子だよ〜」

「娘？ 双子？」

そんな華月の何もかもをぶった切るような会話が遠くで聞こえたきがした。

「え？ 颯！？」

そんな華月の悲鳴まじりの声も、冷たいアスファルトの感触を頬に感じながら聞いた気がした。

俺は意識を失った。

三姉妹、出生の秘密（1）

まるでスローモーションのように、颯が倒れていくのが見えた。

「颯!？」

慌てて私は颯に駆け寄った。

つられてママも颯の傍に駆け寄る。

「だ、大丈夫なの？」

ママも心配そうに颯を覗き込んだ。

私は夢中で颯の体を揺り動かす。でも、颯が目を開ける気配がない。

完全に眠りに落ちてしまったみたいだった。

私の頭は真っ白だ。

「どうしよう……」

颯が気を失った原因にはすぐに思い当たった。同時に、今回のタイムスリップをする直前の颯の言葉が私の頭にこだまする。

“俺がもし先に気絶したら、まずは自分の身の安全のことを考えるんだ。俺はいつ目を覚ますかわからない。目を覚まさない可能性だってあるんだ。それに、おそらく、かづも遅からず意識を失うだろうから、そうなる前に自分の安全の確保と、万が一の時は……かづだけでも帰る方法を考えるんだぞ。いいな”

「身の安全の確保だ」

私は小さくつぶやいた。

「それから、帰る方法を考える……そんなこと言っても」

颯に頼ることはできない。

自分で考える。

考えるんだ。

「何、どういうことなの？ 彼は大丈夫なの？」

ママが何がなんだかわからないといった顔で私を見つめる。

「うんとね、説明すると長いんだ。とりあえず、ママ助けて」

私はすぐるようにママの手を取って続けた。

「颯をまず、寝かせてあげてほしいんだ」

やっこのことで颯をママの家のリビングにあるソファーに転がした。

ママも私も肩で息をしながら、ソファーの横に座り込んでしまった。

「もう、颯重すぎ！」

「あれだけ、ずるずる引きずったのに全然起きなかったね」

「いろんな所にぶつけたのにね」

私たちは二人で顔を見合わせ、ぷつと吹き出した。

「とりあえず、お茶入れるね。麦茶でいい？」

ママは立ち上がり、台所に向かった。

私はそつとママを目で追う。

確かに声や見た目は若いけれど、その一つ一つのしぐさは私のよく知るママそのものだった。

なんだか私はうれしくなった。

もうパパとは会っているのかな。

今何してるのかな。

お祖父ちゃんやお祖母ちゃんはどうな人だったのかな。

聞いてみたいことはいくらかもある。

「それで？」

ママは両手にマグカップに入れた麦茶を持ち、再び私のところへ戻ってきた。片方のマグカップを受け取り、私は思わずつぶやく。

「あ、このコップ知ってる」

「コップ？」

ママは驚いたように私の手の中のマグカップに視線を注ぐ。

「うん、これ今も使ってるよ」

なんだか、この時代と私の知っている時代を繋ぐものを見つけるのが、すごく嬉しく感じた。

でも、ママには伝わるわけもなく、眉間にしわを寄せて首をかしげている。

「それで、君たちは何しにうちに来たの？」

ママは麦茶を飲みながら問いかけた。

「ママに言われて来たの」

私は即答した。

「さつきから、ママって何？」

ママはいよいよ混乱したみたいで、マグカップを持ったまま腕を組んだ。

「私たちは、ここから21年前から来たの。私は華月。父は松本新母は美桜希。この転がってるのが双子の弟、颯。私たちの前に白い猫が現れて、そいつがなんか何か言い出して、そしたらタイムスリップできるようになっちゃって。それで……」

私が一息に言うと、ママは慌てて「ちよっと待った！」と口を挟む。

「今、21年前がどうかいった？」

「うん」

私は深くうなずいた。

「母親の名前は何て言った？」

「み、さ、き。桜のように美しい希望で美桜希」

一音一音くぎって、わざとらしくこれでもかという気持ちで、その名を本人に伝える。

「それって、私？」

ママは自分を指差して確認する。

「だから、さつきからそう言ってるじゃん。ママはえっと……ここが21年前だから……あと6年後に双子を生むのよ」

「よりによって双子！？ たしかに、男の子と女の子の両方ほしいし、いっぺんに生めるのは嬉しいかなと思うけど……」

「うんうん！ ちょっとお得な感じはあるよね」

「そう、そんな感じよね。育てるのは大変だろうけど」

「えゝ楽しそうじゃない？」

「あ、そうか。そうかもね」

二人で、ひとしきり盛り上がったから、一瞬の沈黙。

「って、話ずれてる！」

「うん、ずれた！」

やっぱり親子だなあとと思うのは私だけだろうか。

おかしくなって笑みがこぼれてしまう。

そこへ、階段を下りるような軽快な足音が近づいてきて、ママによく似た私と同じ年くらいの女の子がひょっこりとリビングに顔をだした。

すぐにそれが千明希叔母さんだと分かった。

千明希叔母さんはゆっくり近づいてきて、ママに声をかける。

「誰？」

「それが、どう説明していいかわかんないんだよね」

「どういうこと？」

叔母さんは私と颯に交互に視線を送ると、ママに答えを求めるように見つめた。

「この子が言うには、私の娘と息子らしい」

「……はい？」

「しかもね、未来からタイムスリップしてきたんだって」

「誰が？」

「私と颯が！」

私は思わず二人の会話に口を挟むと、二人は同時にこちらを無言

でじつと見つめた。

今度は私が代わる代わる二人の顔を覗き込む番だった。

「あの……」

恐る恐る口を開くと、すぐに女の子がママの方を見て「何で家に入れるかな」とため息をついた。

「だって、男の子は倒れちゃうし、この子は必死だし」

「……宗教じゃないの？」

ママは千明希叔母さんの言葉に、驚いたように私を見た。

急な展開に私は慌てて首を振る。

「違う違う！ 宗教じゃないし！」

ママはその言葉にほっとしたような顔をしたものの、千明希叔母さんの冷たい疑いの視線が私を突き刺すように降り注ぐ。

どうしよう……。

何て言えば信じてもらえるんだろう。

こんな時に暢気に眠りこける颯が恨めしい。

私がちらりと、ソファアの上で気持ちよさそうに寝息をたてる颯をにらみつけた瞬間、玄関の方からの「ただいま」という声がその場の緊張を打ち壊した。

「何してんの？」

ひょっこりとリビングに女の子が顔を出す。

その顔は、確かにママや叔母さんに似ているけど、誰だろう。

ママには妹は1人しかいないはずじゃ……？

私が分けもわからず首をかしげていると、ママがその子に向かって手招きをした。

「ん？ 誰、この子たち」

その子は私たちを見とめてきょとんとした顔をした。

「それがさあ……」

「宗教の勧誘」

ママが説明しようとしたところを千明希叔母さんが遮る。

「……だから違っつてば」

これじゃ、もちがあかない。
どうしたら信じてもらえるんだろう……。

三姉妹、出生の秘密（2）

すぎるような気持ちで、再び颯を眺めやった時、私はあることを思い出した。

「あ、そうだ！」

私の声に、いつせいに視線が集まる。

私は、背負ってきたリュックの中に手をつ突っ込んで、それを取り出す。

「これ！」

腕をママの方へ突き出して、少し興奮気味に差し出す。

すると、部屋の空気が一変する。

「……これ」

三人ともが食い入るようにその小箱を見つめているのが分かった。ママは恐る恐る手を伸ばし、小箱を受け取ると妹たちにそれを見せるように二人に歩み寄る。

「……どうしてこれを？」

千明希叔母さんは驚きの表情を浮かべている。

「ママが渡せて……ママに」

私は静かにママの言葉を待った。

「そう……」

ママはそれだけ言うと、じっとその小箱を見つめるだけだった。

この小箱はいったい何なんだろう。

どういう意味があるんだろう。

疑問に思ったけど、この重たい沈黙を打ち負かす勇氣はなかった。私はそっと三人の悲しい苦しそうな表情を見守るしかなかった。

「それで」

最初に沈黙を破ったのは、さっき帰ってきたばかりの例の女の子だった。

「君たちは、未来から何しに来たわけ？」

私はその質問に思わず口ごもる。

「それが……」

何をしに来たのかわからないから、ママのところにとりあえず来たんだ。

私にわかるわけがない。

「……わからないの」

そう答えると、千明希叔母さんが間髪いれずに口を開く。

「このオルゴール届けにわざわざ来たわけ？　しかも片方は寝てるし」

その強い口調に私は次の言葉を見つけられなかった。

「まあまあ」

ママが千明希叔母をなだめるように言うと、もう一人の女の子もにこやかに続いた。

「いいじゃないの。私こういうの好きだけど」

「あのね、好きとか嫌いとかの問題じゃなくない!？」

「いいじゃん、今のところ別に害ないし。面白いし。何をそんなにカリカリしてるの？　分かった、男と喧嘩したんでしょう」

「優希ちゃんには関係ないでしょっ!？」

「わかりやすい。八つ当たりしたって、フラれるものはフラれるのよ」

「何も知らないくせに、勝手なこといわないでよっ」

千明希叔母さんと優希と呼ばれた女の子の会話がヒートアップしていく様子を、目を丸くして見つめていた私は、一瞬見せたママのひどく沈んだ顔に気付くことが出来なかった。

「よく、このにぎやかな中で、寝てられるね、彼」

私に聞こえる程度の小さな声で、ママは言うと、笑顔で颯を指差した。

私はつられて笑ってしまった。

「それで、これからどうするの？」

ママがそう言つと、口論していた二人もこちらに注目する。

「颯がこれじゃ……とりあえず、帰るよ」

私が颯を振り返り、肩をすくめてみせると、ママも颯に視線を落とし微笑む。

「帰れるの？」

「分からないけど、やってみる」

「そう」

「ダメだったらどうしよう……」

私がため息と一緒に吐き出すと、その返事はなんと三人同時だった。

「その時考えたら？」

その三人の明るい笑顔に背中を押され、私は荷物を背負つて、いそいそと帰り支度をし始めた。

「あ、靴！」

ママが慌てて玄関に靴を取りに行ってくれた。

「どうやって帰るの？ 何か乗り物使うの？」

優希と呼ばれた女の子が興味深々に私の荷物を覗き込む。

「あの……」

私はおそおそと優希さんの顔を覗き込んだ。

「ママの妹さんですか？」

「あゝ、うん、そう。あれ？」

優希さんは千明希おばさんと顔を見合わせて笑いあつた。

「ちよつと、本当に未来から来たわけ？」

「優希ちゃんはきつと、未来では別人になっちゃってるか、海外にでも旅に出てて行方不明なんじゃないの？」

「行方不明かよっ！」

「うんうん。何しろママが生んだんじゃないくて、川から流れてきたんだからね、優希ちゃんは」

「千明希なんて、畑に植わってたんでしょ？」

「うん、そうそう」

再び二人は顔を見合わせてから、お腹を抱えて笑い出した。

この二人は、実はとても仲がいいのかな。

姉妹というものに少なからず憧れを持つ私は、羨ましさでいっぱいになった。

そこへ、長女のパパが私と颯の靴をビニールに入れて持ってきてくれた。

「何、どうしたの？ 何笑ってるの？」

すると話しかけられた二人の姉妹は、同時に噴出す。

「姉ちゃんが、木に生ってたって話」

「それをママがもいだんでしょ？」

「え〜？ 何それ〜」

私は三姉妹を順番に見つめてしまった。

どこか抜けてる長女。

暢気で陽気な次女。

しつかりものの三女。

きつとこの三人はこの三人じゃなきゃだめなんだろうな、と思った。

中に入れたら良いのに。

四番目の妹になれたらいいのに。

私は思わず笑顔になっている自分に気がついた。

「じゃあ、帰るね」

私はソファアの横にしゃがみこみ、颯の腕を掴んだ。

「また来てもいい？」

三人は返事をするかわりに、同時にふわりと笑顔になった。

「今度はその子とも話がしたいわ」

ママは颯を指差して笑いかけた。

私はこくりと頷くと、目をつぶる。

大丈夫、帰れる。

颯と二人で家に帰るんだ。

一つ深くゆつくりと呼吸をする。そして心の中で強く叫んだ。

家に帰らせて！

私は強く強く、颯の手を握りしめていた。

きっかけはドーナツ(1)

カーテンの隙間から、朝日が床に零れ落ちる。
ぼんやりとした頭をゆっくりと起動させると、俺の部屋の天井が見えた。

「……ん……」

今日もいい天気だ、シートでも洗おうかな。

そんなことを考えて、はっと我にかえり、勢いよく体を起こす。
膝の上にかぶさるようして眠りこける華月の姿が目に入った。

今気がついた。

どうやら、俺たちは部屋の床で折り重なるようにして寝ていたら
しい。しかも華月ときたら、荷物を背負い、俺の腕をしっかりと掴
んだまま寝ている。

ようやくそこで俺は、昨夜タイムスリップしたことを思い出した。
母さんに会えたまではないが、その後の記憶はまったくない。む
しろ、また夢を見たのではないだろうかと錯覚してしまう。だが、
こうして洋服を着たままりユックを背負って爆睡する華月を見る限
り、現実起きたことなのだろう。

さらに、この状況から想像するに、華月は何とかして俺を連れて
過去から現在に帰ってくることに成功し、現在にたどり着いたとた
んに、安心したのか、または、力尽きたのか、倒れるように正体を
なくしたのだろう。

何にせよ、華月のおかげで無事に帰ってこれたのは間違いない。

「ありがとう、ご苦労様」

俺は華月の頭をそつと撫でた。

きつと必死だったんだろうな。その華月の姿を想像するのは容易
なことだ。でも、華月のことだから、そんな中でも、楽しんで来た
に違いない。その器のでかさにいつも俺は感服する。俺には到底ま
ねできないことだ。そんなことを考えながら華月を眺めていると、

思わず頬が緩む。

「今何時だろう」

部屋の時計を見やると、起床するにはまだ1時間ほど早い時間だということがわかる。遅刻させるわけにはいかないが、もう少し寝かせてやりたい。

俺の腕を掴む華月の手をそつと解き、華月の背中の中の荷物を降ろす。すると、大抵というか、めったにというか、絶対に普段なら目を覚ますことのない華月がまるで何かに取り付かれたかのように、ばちつと目を開けた。

「華月？」

声をかけるも、華月はじつと俺の顔を見つめるだけで身じろぎ一つしない。

「もう少し寝てていいよ」

俺は華月をゆっくり抱き上げ、俺のベッドまで運んだ。その短い間に、華月は安心したように再びその大きな瞳を閉じる。いつのまにか、華月の手がまた俺の腕を掴んでいた。

そんな華月の様子から、俺が目覚めますか心配だったんだろうな、と俺は感じ取った。

不安でいっぱいだったはずだ。
帰って来れるかどうか。

俺が目覚めますかどうか。

俺はもう一度華月の頭を優しく撫でた。

「おやすみ。朝食は華月の好きなホットサンドにしてやるよ」

華月の寝顔にそう囁きかけると、華月はそれが聞こえたのだろうか、それはもう嬉しそうに微笑んだので俺は噴出しそうになるのを必死で押し殺した。

「ゆきつて名前みたい」

華月は夕飯の酢豚を乗せる皿を俺に渡しながら、そう言った。

「つまり……母さんは三姉妹だったってこと？」

今日も例外なく、華月を遅刻すれすれに登校させ、学校でも少しは話を聞いたりもしたがゆっくり時間を取ることがかなわず、家に帰ってきてからの作戦会議兼反省会となったのだ。

「みたいだよ。ママと千明希叔母さんの間に。そんな人のこと聞いたことある？」

「写真でも見たことがないよな」

「うん」

どういうことなんだろう。

そもそも、祖父母のこともよく知らないのだが、それにしても、血縁である叔母の存在を母親が自分の子供たちに隠したりするだろうか。

「喧嘩でもしてるのかな」

俺は華月から茶碗を受け取り、ご飯を盛りながら、まるで独り言のようにつぶやく。

「喧嘩？　ありえないと思うけどな」

俺から再び茶碗を受け取ると華月は続ける。

「すごく仲が良さそうだったもの。喧嘩別れとか、骨肉の争いとか、遺産相続決別とか、男の取り合いとか、ありえない感じだったけど？」

「……………昼ドラの見すぎ」

「とにかくね、ママに聞いてみようよ。あ、お腹すいた」

箸をテーブルに並べ終えた華月は、もうすでに目の前の夕飯に興味を取られたようだった。俺もエプロンはずし、席に着く。

「二人が帰ってきたら、の方が良さそうだけどな。家族会議ものじゃないか、話題的に？」

父さんはこのことを知っているのだろうか。

知らないとなると、波紋を呼びそうなきもするし……下手に話題にしないほうがいいのではないだろうか。

「気にしすぎじゃない？ いただきます！」

華月は手を胸の前でぱちんと合わせ食べ始めたので、俺もそれに倣う。

ただの杞憂ならいい。

考えるだけ考えて、取り越し苦労なら、そんなのいくらだって請け負う。

小さな慢心で、大きな幸せを失うのが怖いだけなのかもしれない。

この間の母さんのように。

「それより」

華月は酢豚を頬張りながら、悪戯を思いついた時に見せる顔をした。嫌な悪寒が俺を襲う。

「今日も行くでしょ？」

「……味を占めたな」

「違うよ！向こうが来いって言ったの。颯と話したいって」

「本当かよ……大体どうやって信じさせたんだ？ 簡単に信じてもらえることでもないだろう」

華月は不適な笑みを浮かべ、胸をそらした。

「へへん。華月様に任せておけばこんなもんよ」

「……………何したんだ」

思わず俺の、華月を見つめる目が細くなる。

「アレを使っただの、アレを」

「アレ？」

「そう、アレ！」

もったいぶる言い方に、苛立ちを覚えながらも、華月に分かつて自分に分からないなんてことはありえないことなので、瞬時に大脳をフル稼働させる。

「ふふふふ」

「ちよつと待て考えてる」

「降参かえ〜？ そちも、たわいがないの〜」

「黙れ！ たわけ！」

「ほっほっほっほっ」

華月があの時考えそうなこと……？

その時、俺の頭でピンと何かがひらめいた音が聞こえた気がした。

「はは〜ん。お代官様、わかりやしたぜ」

「ほう、申してみよ」

「オルゴールですな」

そもそも華月は、オルゴールを21年まえの母さんに届けるためにタイムスリップしたと思ってるんだ。答えを導き出すのは簡単だった。

「ちっ」

「ちっ、じゃない。あのオルゴールなんだったの？」

「さ〜？」

華月は、ご馳走様でした、と再び手を合わせて食器を片付けに台所へ向かう。

「さ〜って……」

興味がなかったから、聞かなかったな。

まあ、とりあえず、追いつかれたとか、警察に突き出されそうなところを逃げてきたというわけではなさそうだし、もう一度俺の目でその謎の叔母を確かめてからでも遅くないのではないだろうか。

「よし。今日も行くことにするか」

「やった〜！ そうこなくっちゃ！」

華月の陽気な声が台所から聞こえた。

「ただし、今日の宿題が終わったら、だけどね。数学の宿題終わったのか？」

「……………ただいまの発言は華月さんには聞こえてません。電波障害みたいです」

「……………お代官様、がんばってくださいね、宿題」

「越後屋！ 夕飯の片付けは私にまかせろ、そちは宿題を！」

「却下」

きっかけはドーナツ(2)

「あ、出た」

その声を合図に俺と華月がぱちりと目を開ける。目に飛び込んで来たのは、母さんに良く似た女性と、見慣れないリビング。あたりを見回すが、置かれたテーブルも、黄色い花柄のカバーのかかったソファーも、白い壁にかかったカレンダーも、まったく記憶の中に引つかかるものはない。初めて目にするものばかりだ。

ここはどこなのだろう。

目の前の女性は誰なのだろう。

俺がきよろきよろしている間に、華月が目の前の女性に抱きついた。

「うおっと」

女性は華月の勢いとペースに押されて、小さく声をあげる。

「優希ちゃん！ また来ちゃった」

「いらっしやい」

華月はゆきという女性から体を離し、女性に微笑みかける。まるで自然に、女性は微笑み返した。

ずいぶん馴染んでいるその様子に俺は驚きを禁じえない。

「今日、何日？」

華月は女性に問う。

「4月3日」

「あれ、3日なの？」

「昨日は来なかったのね、絶対来ると思って待ってたのに」
女性はにかつと笑う。

「えゝ！ こつちの時間では1日しかたっていないんだよ。何で2日にこれなかったんだろっ」

華月は俺を振り返って答えを求めた。もちろん、その答えを俺が持っているわけもない。

「こんばんは」

女性が俺に微笑みかけた。

「……どうも」

「今日は起きてるんだね」

にやりと笑い、女性はソファーに腰かけた。

「今ね、姉ちゃんは仕事でまだ帰ってこないんだ。千明希は彼氏のところに出かけてるし、まーそろそろ別れるっぽいけど。時間の問題ってやつ？ ママは今日は夜勤で帰ってこない」

女性は、話しながらリモコンをつかってテレビの電源を入れる。

「夜勤？」

華月は女性の隣に座り、尋ねた。

「うん、ママは看護師。おとといから夜勤」

「へーおばあちゃんは看護師さんだったんだ〜！」

華月が驚いて見せると、女性は興味を示した。

「あれ、知らないんだ？ そういえば、私のことも知らなかったみたいだしね」

女性が面白そうに華月の話に食いついてきた。

「うん。私たち、ママの家族のことよく知らないんだ。あんまり会わないし」

「ねえちゃんは、遠くに嫁いだの？」

「ううん、近所。ここから2駅」

「近っ！」

女性は噴出した。

「でもね、この前来た時はね、お金使えなくて電車乗れなかったから、二駅歩いてここまで来たんだけど、すごく遠かったよ」

「歩いてきたの？ だから疲れて寝ちゃったわけ？」

けらけらと女性が笑いながら俺を見た。

「情けないよね〜」

華月までが相槌をうつて笑う。

俺は、明らかに自分が笑われているのに、なぜかその女性から目

が離せなかった。何かが俺のなかで引っかかっていたんだ。

この声……どこかで聞いたような……？

「颯？」

「え、ごめん、何？」

考え事をしていた俺を不振に思った華月が俺を心配そうに見上げている。また倒れてしまうのではないかと思っただのかもしれない。

実際、自分でもいつ限界になるのかが分からないから困る。

前回、こちらに来てどのくらいの時間で倒れたのか、ちゃんと見ておくんだったと何度も後悔したものだ。

「まゝ、せつかく来たんだし、ゆっくりしてけば？ 何もないけど。むしろ腹減ったけど」

「あ、私も。ね、颯、小腹がすいた」

「……へーそら大変だ」

雲行きが怪しくなってきたのをびんびんに感じながらも俺はさらにとかわす気満々でこたえる。

「ドーナツが食べなくなってきた！」

華月が叫ぶと、ユキさんまでがそれに賛同する。

「なに、彼作れるの？」

「めっちゃ上手いよ」

「ほうほうほうほう！」

俺は痛いほどに4つの目から視線が突き刺さり、降参というように両手を挙げた。

「……台所かります」

「喜んで。手伝いましょう、シェフ」

俺はげんなりしながらも、立ち上がった優希さんの後に続いた。

まさか、タイムスリップを経験し、21年前の人様の家の台所で料理する羽目になるとは……。

世知辛い世の中だと思い知る、15の夜だった。

埋めないで（１）

私は、テーブルに頬杖をついて、ぼけっとその光景を眺めていた。ものすごく珍しいその様子を、ぜひともビデオにでも録画してパパやママに見せたいくらいだ。

「もりあがってるね」

はっとして、声の方を振り返ると、仕事を終えたママが帰ってきたみたいだった。

「いらつしゃい。また来るような気がしてた」

私は返事の変わりに微笑み返した。

若くてもママの笑顔は、何も変わらない。

相手をも笑顔にさせるような魔力をもっているんじゃないかと思うくらい、優しい微笑みは世界で一番綺麗だと思う。

「おとといは、二人ともほんとに目の前で消えちゃうからびっくりしたんだよ」。でも、こうしてまた会えたってことは、無事に帰れたんだね？」

ママは持っていたかばんを椅子に置き、コートを脱ぎながら続けた。

「今日は彼も元気だし、よかったよかった」

ママの柔らかな視線が颯へ向かう。

その颯はというと、さっきからずっと台所で大騒ぎしていた。私はずっと放置。

何をしているのかというと、料理という名の格闘技。

「ちょっとそれはないでしょ。小麦粉と卵を混ぜるのは天ぷらで、フライとは認めん！ 邪道だ！」

と颯が反撃をするも、

「一緒に混ぜちゃえばいいじゃん。どうせ、お腹に入れば小麦粉と卵には変わらないし。だいたい、片付ける食器も一つ減る」

と優希ちゃんがカウンターを負けじと繰り出す。

「手間をかけるのが料理だろ！　だいたい、おいしいとは思えない、絶対！」

「ちっちゃい男だねゝあんた！　細かいことにガタガタこだわって」「細かくないっ！　手順をやつたろう！　っておい、聞けよ！　あゝっ！」

「はいはい。もう卵と小麦粉混ぜちゃった。残念残念」

「って、待て！　何を揚げるつもりだ」

「え？　バナナ」

「はっ！？」

「だから、ば、な、な」

「一度言えば、聞こえます！　そうじゃなくてバナナをフライにするわけ！？」

「え、知らないの？　おいしいのに？」

という具合に、ずっとこの調子で台所から実況中継のように流れてくる音声で、二人が何をしているのか手に取るように分かる。

その会話のペースの速さにもあっけに取られるけれど、何よりも颯のこんなムキになっている姿を見るのは初めてだった。

「なんだか、知らない人みたい。」

「あの二人、ずいぶん気が合うのね」

ママは、私の眉間を人差し指で軽く突つつく。おかげで、自分が険しい顔をしていることに気付いた。

「どうしたの？」

何て言っていいか分からなかった。

ただ、胸がもやもやするような気がした。

「なんでもない」

ママはすべてお見通し、というようにふつと表情を緩めた。

「それにしても、優希も珍しいわ」

「え？」

「あの子ね、男嫌いなものよ。優希にかかると、男の人は気の毒よ。汚物かゴキブリ扱いだもん」

ママは、クスクスと笑い声を立てる。

「一番下のちーちゃんも逆に彼氏がコロコロ代わるんだけどね、優希は誰とも付き合ったことがまだないのよ。それどころかね」

ママはそこで一度区切った。というよりも、自分で思い出したことがおかしすたらしく、一人で口を両手で押さえるようにして爆笑している。

「あ、ごめん。おかしくって」

「何、何？」

「前ね、あの子が『姉ちゃん、優希ね今日、へんな夢みたんだ』って言うから、何かと思ってよくよく聞いたら、『知らない男に告られる夢みて、断ったけどしつこいから、地面に穴掘って埋めたの』って言うの！」

「ええー！？」

私はその衝撃的な夢の内容に、思わず絶叫してしまった。その私の反応をみて、いよいよママはお腹を抱えて笑い出した。目には涙まで浮かんでいる。

「おかしいでしょ？」

「ていうか、怖い……何その夢……」

「だよ、埋めることないよね。どんだけ、男嫌いなんだか」

「……な、何があったんだろう」

そんなに男嫌いになるような、出来事が……？

顔を引きつらせながら、私は視線を台所の方へ移す。ちょうどその時、小競り合いをしていた二人が、私の絶叫に何事かと慌てて駆け寄ってきた。

「どうした華月！？」

「何、何？ 面白い話？」

二人して同時に、包丁や箸を持って現れたその姿から、優希ちゃんがそんなに男嫌いとは想像もつかない。

もし、颯が何かヘマをやらかして、優希ちゃんに嫌われるようなことがあったら……颯は埋められちゃうのかな……。

心の底からかわいそうな気持ちで颯を見やると、颯は「へ？」と小首をかしげた。同時にママがぶふつと噴出す音が部屋に響き渡った。

埋めないで(2)

それからと言うもの、颯は我が家で夕飯を作るのと同時進行でケーキを作り始めるようになった。昨日はベイクドチーズケーキ。今日はアップルパイみたいだ。

そして、出来上がったケーキを持って、21年前に飛び、待ち構える優希ちゃんの作ったケーキと食べ比べをする。もちろん、ママも千明希叔母さんも大喜びで私たちの来るのを待つようになったし、この間は仕事を終えたお祖母ちゃんが「……おや、うちの子が増殖してるような気がする」という一言を残して、自室へ行き爆睡するという爆笑シーンもあった。

ママの話だと、私たちはお祖母ちゃんには、千明希叔母さんのクラスメイトということになっているらしい。

そして、私たちは不思議なことに気がついてしまった。

確かに、6月1日、私たちが始めて21年前にタイムスリップしたときは、4月1日という日にちを指定したつもりだった。でも次の日は、特に指定したつもりはなかったのに4月3日に運ばれた。次の日は4日。

日にちが前後することはないし、10日後だったり、1ヶ月後だったりすることもなく、次の日もしくは2日後にタイムスリップすることができている。そして、タイムスリップした時間は20時頃で、大幅にずれることもない。

これは21年前という膨大な時間のことを考えると、ありえないくらい小さな誤差だと颯が不気味がっていた。

その時の、「まるで誰かが意図的にそうしているみたいだ」と低い声でつぶやいた颯の顔は、今まで見たことがない暗い険しいものだった。

けれど、親戚というよりも、突然姉妹が増えたような感覚で、毎日夜になるのが待ち遠しい。きつと颯だつて同じ気持ちだと思う。そうでなければ、手の込んだアップルパイなんて焼いたりしないだろうし。「邪道なヤツには負けない。料理の何たるかを知らしめてやる」とかなんとかブツブツ言いながら立つ颯は、なんだか殺気立っているようにも見えなくないし、相当気合がはいってるのは間違いない。今のところ、優希ちゃんも楽しんでるみたいだし、颯が埋められてないからいいかな。

でも、ふと思うこともある。

私たちは、このためにタイムスリップをしているのかな。

ずつとこんな生活が続くなんて思っではいなかったけれど、でも、こんなに急にこの楽しい生活に終わりが来るなんてこの時は思っても見なかった。

6月5日。

窓の外には、かなり太った月が静かに光輝いていた。

終章 それって贅沢だよ（１）

確かに、優希さんの料理は美味かった。

でもそのほとんどが、はじめて口にする味だ。そして、その出てきた料理を目の当たりにして、俺はすべてが点と線で繋がった気がした。ああ、だから母さんの料理は“不思議味”なんだな、と。

「……ねえ」

俺がキャベツを千切りしていると、その横で優希さんがフライパンに油を引きながら声をかける。俺もそちらを振り返ることなく、作業を続投した。

「はい」

「姉ちゃんの旦那さんってどんな人？」

フライパンに豚肉が入り、じゅつと、胃袋には刺激的な音を立てる。続いてたまねぎも放り込まれた。

「マメな人」

俺は優希さんの顔を見ずに短く答える。リズムカルに奏でられるまな板のトントントンという音は、フライパンに負けなくらい、いい音だ。

「ふ〜ん。それから？」

「マメで、変な人」

「どんな風に？ あ、醤油とみりん取って」

俺は言われるままに、足元の戸棚から注文の品を取り出した。普通は使用されるであろう、調味料の名がそこになくて、俺は戸棚を空けたまま聞き返す。

「酒は？」

「あゝこっち使う」

彼女は、冷蔵庫から芋焼酎を取り出し、にやりと笑った。

「ママの」

紙パックの表面、銘柄がでかでかと書かれたその芋焼酎を持つ優

希さん。その姿が妙に様になっていて、俺は、後々の不安を感じた。もし、俺が二十歳になって、現代で会ったりするような時、「晩酌付き合え、甥っ子」とか言われそうだ。そして、それに断る権利はおそらくというか、絶対というか、万が一にも、残されていないんだ。そればかりか、母さんまでもが悪乗りして、「あ、いいな。あたしも飲みたい」なんて言い出し、酒に弱い母さんはあつという間に泥酔。そして、大暴れを押さえ込む役か、介抱する役が回ってくるに違いない。

俺は一瞬で、そこまで考えをめぐらせて、別名“諦め”という、ため息をつく。

何が嫌かって。こんな鮮明に予想できてしまう自分が悲しい。「で？」

一人で凹んでいたら、先ほどの質問に対する答えを催促された。しかも一文字で……。この辺が、先ほどの俺の想像とリンクし、警報を鳴らしている気がした。

「父さんは、『俺は妻を愛していますから』とか真顔で、しかも平気で人前で言う人」

「変だね！」

返事は即答だった。

「俺たちの前でも、平気でいちゃつくしね」

「へへ。痛々しいね」

優希さんは、ケラケラと笑い声を立て、フライパンに芋焼酎を流し込んだ。

「うわ、酒くさっ！……しかも入れすぎじゃない？」

俺は思わず鼻をつまむ。

「はっはっは。酔っ払うなよ？」

「ちゃんと酒、飛ばしてくださいね」

「飛ぶ飛ぶ！ その代わり、作ってる人が酔う！ あははっ」

「おいおい……」

優希さんは冷蔵庫から出した生姜をすりおろしながら、そんなこ

とを言っていたが、ふと手を止めた。

「姉ちゃんは、幸せなんだね」

俺を見つめる彼女の瞳は、どこまでも優しく透き通っていた。

「そうなんじゃないの？」

俺は照れくさくなつてキャベツを再び切り始めながら、そう答えた。

俺自身も幸せなのか、と聞かれた気がしたからだ。どう言っていたか正直分からなかった。

今幸せなのか、俺は。

自分に問いかけてみても、答えが返ってくるわけもない。

ただ……父さんがいて、母さんがいて、華月がいて。

そんな当たり前な生活は、とても居心地がいい。

それだけは確かだ。

そして、そんな生活は決して当たり前なんかじゃないんだ。今を大切にしないければ、“当たり前”は続かない。そんな毎日、何かの拍子に簡単に壊れてしまうものなんだ。俺はそれを、知ってしまった。いや、知ることが出来た。

“当たり前”をずっと続けることは、簡単で、当然で、自然なように、実はとても努力のいることなんじゃないだろうか。

だって、人も周りもどんどん変化していく。自分だって、これから高校を卒業し、進学して、就職して、家を出て……。そんな、大きな変化が待っているのはわかりきっている。でも、そんな変動の波の中で、変わらない“当たり前”な心地よい場所がそのままであり続けるということは、すごいことなんじゃないだろうか。そして、それを守り続けていけるのは、両親や華月、そして俺自身なんだ。他の誰にも出来ないことなんだ。

「……家族か」

思わず俺の口から零れ落ちた言葉に、一番俺が驚いた。

「え？ 何？」

「……いや」

「何よ？ はい、完成。優希ちゃん特製、豚の生姜焼き」

「……汁だく過ぎじゃない！？ なんか生姜焼きっていうより、すき焼きみたいなんですけど……」

「気のせい、木の精、森の精」

「誰が面白いことを言えと！ 何だ、森の精って、妖精か！？」

俺が全力で突っ込むも、むなしく次の優希さんの言葉でさらりと流される。

「それにしてもさ」

「俺の話を聞けっ！」

「え？ 何か言った？」

俺はまたしても確信した。華月、お前が悪いんじゃないかな。華月のその性格は、母方の強い強い遺伝子のせいだったんだな。

それって贅沢だよ(2)

げんなりしながら、俺が肩を落とすと、優希さんはまったく気にも留めずに、話を先へ進める。

「あたし、21年後何してるんだろうね。一応、調理師免許とつて、自分の店でも出してるっていう将来設計があるんだけどね、今」
「考え直すべきだ!」

思わず力を込めて、即答してしまった。その様子に、珍しく優希さんはむっとした顔をする。

「何だよ。あたしの料理美味しいよ。ほら」

ほらと言いながら、優希さんは生姜焼きを手でつまんで俺に差し出す。せめて箸でやってほしい、と俺は心の中でつぶやくも、仕方なく口をあけた。差し出された生姜焼きは、適当に俺の口に放り込まれる。汁が頬つぺたに飛ぶくらい適当だ。

「……味はね」

色々なものに目をつぶって、俺は言葉を搾り出した。

「お客さんに出すには、色々問題があるみたいだけどね。まあ、追々改善すればいいんじゃないんですか?」

セリフの最後はわざと棒読みにして、俺の最後の抵抗を示す。といつても、それが相手に届くかどうかは別問題なのが世の常だ。

「21年後っていうと……あたしは39歳? うわ、すごくない!」

「何が……?」

「だって、39だよ! あたし、今18だし!」

「そら、21年後なんだから、逆に18のままだったら怖いだろうが!」

「あ、それもそうか。あんた面白いこと言うね」

俺は再びぐつたりと肩を落とした。そんな俺に追い討ちをかけるように、優希さんの命令が下る。

「あ、クレープフルーツ食べよう。冷蔵庫にあるから適当に切つてよ」

「……ハイ」

俺が冷蔵庫に手をかけた時、優希さんの静かな声が背中越しに届いた。

「まあ、なんにせよ、笑って暮らせてればいいんだ」

その、打って変わった優しい声に、俺は思わず優希さんを振り返った。その小さく華奢な背中からは、表情まで読み取れない。

「好きなことやって、笑って暮らせてれば、充分だよ。そう思わない？」

同意を求めるように、優希さんは俺を振り返った。その屈託のない笑顔に俺は息を呑む。

「だって、それが一番贅沢なことじゃない？」

再び、彼女は俺に背中を向けて続けたので、俺も冷蔵庫からグレープフルーツを取り出す。

「自分の好きなようにできるってことは、ありのままの自分でいられるってことでしょ？ 楽しくないわけない。毎日幸せだよ、きつと」

「ありのままの自分……」

俺は流しでグレープフルーツを洗いながら、つぶやいた。

「そのためには、勉強して、調理師免許とって……経理とか経営とか勉強したり……あゝ考えただけで嫌になつてきた」

優希さんは、眉間にしわを寄せ、本当に嫌そうな表情を見せたが、ふつと俺に笑いかける。

「でもさ、それは、好きなことやするための準備なんだからしょうがないよね。誰にも文句言わず、好きなことをして生きていくためには、やっぱり頑張らなきゃいけない時もあるんだよね。今は、その頑張らなきゃいけない時なんだなゝって最近思ふんだよ」

俺は、ただ、黙って優希さんの言葉を胸に刻み込んでいた。

『好きなことをして生きていくためには、頑張らなきゃいけない時

もある』

自分はどうかろう。俺は何をして生きていきたいのだろう。
考えたこともなかった。

俺は、これからどうなっていきたいんだろう。

ただ、高校卒業して、大学へ行って、就職すればいいわけじゃないことは分かっている。

俺らしいって、何だろう。

「あれよ、つまり！」

突然、優希さんは顔を上げ、明るく言い放つ。

「『働かざるもの食うべからず』」

思わず俺はがくつと、体を右に傾けてしまった。

「意味違わない！？ ていうか、それオチなの、まとめなの！？」

「ええっ！ 今すごい良いこと言っただけだと思っただけど！」

その真顔に俺はぼそぼそとつぶやくしかない。

「マジだった…………… 高校生もう一度やり直したほうがいいんじゃないかと」

「え、何！？ 何か言っただか、15歳！」

「滅相ありません、18歳のお姉さま」

「あ、あたしもうすぐ19だから、そこんところよろしく」

俺は、グレープフルーツを盛る皿を優希さんから受け取りながら、
問いかけた。

「いつ？」

「10日。しあさつてです」

優希さんは、俺にVサインを見せ、にかつと笑った。

「あ、ちなみに、今月は優希の誕生日月間なので、いつでもプレゼントは受付ます。お一人、いくつでも受け付けます。そしてさらに
なんと！ 今週は誕生日強化週間なので、毎日お祝いしてください
い」

「今日もアップルパイ持ってきてやったじゃん…………」

「聞こえてなかったようですね！ 毎日、毎日、ま、い、に、ち、

お祝いしてください！」

「……………はいはい」

「そうだ！ いいこと思いついた！」

俺は心の中で、絶対いいことのわけがない、と目を細めた。そして覚悟の上で次の言葉を待つ。

「あたしの40歳の誕生日までには、あたしを探し出して、ケーキ届けてよ」

「はぁ！？」

「甥っ子だろ、それくらいしろよ」

優希さんは俺の腕をバンバンと平手打ちしながら、

「さ、夕飯食べますか。姉ちゃん、かづちゃん、ご飯できたよ！」

と台所を後にしていった。

残された俺は、お盆を持ちながらも首をかしげる。

「普通、叔母が甥っ子にプレゼント渡しに来るもんなんじゃないのか……………」

当然ながら、その答えは返ってくるわけがなかった。

答えを探して

6月7日23時55分。

今日も、スイートポテトを持って21年前へ行ってきた。颯がスイートポテトを差し出すと、優希さんは一言「手抜きやがったな」と言い放ち、その後は颯と優希さんのいつものバトルへとすぐさま突入していった。

何だか最近、あっちへ行くと私はへんな気持ちになる。

ミサちゃん（ママはやめてと言われたのでちゃん付け）が帰ってくるまでは、リビングで一人ではけつとしていることが多い。何度か、私も台所へ行って手伝うと言ったのだけれど、「用が増える！」と毎度、颯に追い出される。二人は今日も、楽しそうにゴーヤチャップルを作り上げた。

帰ってきたミサちゃんとチーちゃんは、「最近晩御飯が豪華ね」と口々に言う。3人で夕飯が出来るまで、話に花を咲かせるのが日課になってきた。

21年前からは、大体2時間ほどで、私たちは引き上げることにしている。正確に、どのくらいまで居られるのかは分からないが、2時間くらいなら今のところ問題なく過ごすことができていた。

今日も、2時間の楽しい時間を過ごし、さつき現代に戻ってきたところだ。

戻ってくると、いつも体が鉛のように重い。何とか手足を動かして、服を着替えると颯のベッドに倒れ込む。そして限界まで分かってきたことを話し合いながら、眠りに落ちる。そんな毎日がこのところ続いていた。

「颯……あのオルゴールね……」

私はうつぶせになり、颯のベッドを占領しながらつぶやいた。すでに瞼が重い。

「オルゴール……？」

颯も遅れて、ベッドに入ってきた。私をぐいぐいと壁の方へ押しやって、自分の寝るスペースを確保している。

「あれ、おじいちゃんの形見なんだって」

「祖父さん？」

「うん、ミサちゃんが言ってた。おじいちゃんは、ミサちゃんたちが小学生の時に死んじゃったんだってさ。それで、お祖母ちゃんが看護婦しながら女手一つで3人を育ててきたんだって」

「祖父さんはそんなに早く死んでたのか」

颯の低い声が心地よく耳に響く。

「それで、ママは高校卒業して、バイトしながら通信教育で、保母さんになったんだってさ」

「……………へへ。母さん……………頑張ったんだな……………好きな仕事に就くために」

颯は何か思い悩むように、そうつぶやいた。そのいつもと違う様子に、不思議に思いながらも、私は先を続ける。

「優希ちゃんは、調理師になるんだって。チーちゃんは、まだ高校1年だから決めてないけど、でも医療系に進みたいらしいよ」

「……………考えてるんだな」

「うん、私、チーちゃんと話しててすごいなって思っちゃった。同じ年なのになさ」

「そうだな」

「でも、『お金がかかるから』ってチーちゃん言ったら、ママが、『そんなの出世払いでいいわよ』って笑って言ったの。……………好きなことをしなさいよ、って」

好きなことかぁ、と私と颯は同時に、ため息をついた。

「たぶんさ」

颯はごろりと寝返りをうち、天井を見つめながらかみ締めるように続けた。

「あと3年間、考える時間があるんだよ」

「卒業するまで？」

「そう」

「見つからなかったら？」

「そしたら……………何かをとりあえずしてみるっていうのも手なんじゃないかなあ、とか思うけどね俺は」

私は颯の顔を見つめる。颯の目は閉ざされていて、もう心の中の自分しか映していないようだった。

「時間がかかってもいいんじゃない？　これだ、って思えるものに会ったら、それから始めるって手も……………あると思うけどね……………俺は」

「あるかな……………？」

私も目を閉じて、自分の手を胸の上に載せた。一定のリズムを刻む鼓動が、手のひらを伝って全身に届けられる。

「……………探すんだよ……………」

颯の声がだんだんとゆっくり小さくなっていく。

「……………探す……………気にならなきゃ……………見つかるもんも……………見つからない……………」

私はそつと颯を覗き込んだ。

急に不安に襲われる。

置いていかれる。そう思った。

このままじゃだめなんだ。私も、何か見つけないと、颯に置いていかれる。

颯ばかりがどんどん先に進んでしまう。

でも、どうやって探せばいい？

どうやって先に進めばいい？

何をすればいいの？

先生が教えてくれるの？

パパやママに聞けばいいの？

颯のまねをすればいいの？

疑問がいくつもいくつも浮かんできては、私の胸を締め付ける。
答えはわかっている。

『自分』の中にあるってことを。
自分で考えて探さなきゃいけないってことを。

齒車の回る音（1）

6月8日。

朝から降り続く雨は、明日満月を迎えるらしい、月明かりをも隠してしまう。

「あれ？」

華月が小さく声を上げる。俺は自分の机の上の時計を反射的に振り返った。時刻は22時を回っている。

「飛んでない……」

華月がきよろきよろとあたりを見回すのは、いつものように俺たちが21年前に飛ばうとした直後にこの異変が起きたからだ。

俺たちは、荷物を背負ったまま直立し、小首をかしげるだけだった。

「もう一度やってみるか……」

「そうだね」

「いつもと同じようにやったよなあ？」

「うん、同じだよ？」

言葉の端々に、疑問と不安が織り混ざる。そして、数分後、やはり状況は何も変わらなかった。

「何で!？」

華月がすかさず俺に食いつく。しかし、その俺も、予想外の展開についていけないのが現状だった。

「分からない……」

どうということだろう。

今までと何か違うことがあったのだろうか。
いや、何もない。同じことしかしていない。

21年前で、昨日、いつもと違うことをしたという心当たりもない。

なぜなのだろう。原因に皆目検討もつかない。

「ねえ……」

その時、華月が急に窓に近寄った。そして勢いよくカーテンを開け、窓までもを全開にした。そして、外を指差しながら、こちらを振り返る。

「これじゃない？」

外には、まるでシャワーの水のように、大きな音を立てて雨が降り続く。

「……雨？」

「だって、今までずっと雨なんて降ってなくて、元気に月が出てたよ？」

俺はその華月の視点に驚いた。俺にはまったくないファンタジーな発想だ。

なるほど、月か。

そういえば、21年前の夜空にも煌々と太った月が輝いていた気がする。

「その可能性もあるかもしれないな……」

初めてあの猫に会った日も、そういえば月が出ていて、その月明かりでぼんやり川原の様子が伺えたような記憶もある。

あの猫と月、何か関係があるのだろうか。

ここ最近、タイムスリップやら、猫がしゃべったとか、予知夢だとか、俺の想像をとくに通り越している。そればかりか、非常識が大手を振って歩くのを、常識が赤面しながら草葉の陰から見守っている状況だ。

もう、何があっても驚かないぞ。

そう。たとえば、壁から突然、織田信長が「あ、明智光秀知らない？」とか現れたって。

筆箱の中の消しゴムを使うたびに「痛てえっ！！てめえ、間違えるのも大概にしゃがれ。だいたいな、消し方になってねえんだよ。こつちとら、消し味に命かけてんだ、べらんめえ」とか言い出したって。

テレビの中から実寸代の猫型ロボットが「華月ちゃん、宿題やったの？」とかドラ焼き食べながら出てきたって。

俺は涼しい顔で「気のせい、木の精、森の精」と言い放ってやるんだ　たぶん！

「どうする？」

そう心の中で誓いをたてていると、華月が窓を閉めながら残念そうに問いかけてきた。

「もう一度やってみて、ダメだったら、雨がやむのを待つ……かな」
「そうだね」

すぐに、再度タイムスリップは試されたものの、やはり失敗に終わった。

俺たちは、同時に窓の方を見やり、肩を落とした。無情にも、雨の音が先ほどよりも大きく感じられる。

「これどうしようか」

俺は背中のリュックに入った、今日のケーキを指差す。何しろ祖母さんの分を入れて、6人前だ。二人で食べるには多すぎる。

「今日は、レアチーズタルトでしょ？　明日持っていけば？」

「嫌だ！　まずくなる」

「……………じゃあ、ママたちに協力を頼むとか」

俺は、ぽんと両手を鳴らした。その手があったか。

「そうだな。今日は情報収集日にしよう！」

一人納得した俺は、リュックの中からタルトを取り出そうとすると、華月は首をかしげながらその様子を見守った。

「何を？」

「優希さんや千明希さんの今の何とか、知りたくない？」

俺がにやりと笑いかけると、途端に華月は顔を明るくした。今日は、行けないとあつて、相当がっかりしていたのだろう。それは俺も同じだったが、こつちでも出来ることはあるんだと、華月自身も実感したに違いない。

そもそも、両親に詳しい話を聞きたいと、常々思ってはいたんだ。

しかし、多忙な両親に加え、俺たちも部活帰りに忙しくタイムスリップの仕度に取り組む。帰ってきたら0時を回っているし疲労が激しいので、電池切れのように爆睡する毎日だ。なかなかその機会が得られないでいたから、こんな日も実は必要だったのかもしれない。「ママ」！

次の瞬間、華月は激しい音を立てて俺の部屋のドアを開け放し、階段をものすごい勢いで下りていった。

「……壊れる」

俺は眉間にしわを寄せてつぶやくも、ケーキを持ってその後を追った。

歯車の回る音（２）

母さんの部屋の前へたどり着くと、すでに中から笑い声と明かりがドアの隙間からこぼれ出ていた。よくよく耳を澄ますと、案の定、前置きと常識というものを空のかなたへすっ飛ばした華月の会話が聞こえてくる。

「だから、ママ食べてあげてよ」

「懐かしいなあ。そういえば毎日ケーキ食べてたね、あの時」
「覚えてるの？」

俺はドアを開けて中へ入ると、ケーキの入ったケースと小さな皿とホークを差し出した。華月に、麦茶を冷蔵庫から持ってくるように指示を出す。

「なんとなく……かな」

途端に母さんの顔が少し曇った気がした。

「私たちのことは！？」

麦茶が入ったボトルとコップを３つ抱えて、走って戻ってきた華月が問いかける。俺はその華月から、コップを受け取りながら母さんを目で追った。

「それも、なんとなく。ところどころなんだ……私ね……」

母さんはそこで言葉を切り、俺から受け取ったコップを見つめる。その表情は、今まで見たことがないくらい、悲痛に満ちていた。

華月が心配そうな顔をしながら、俺を見る。その目が、どうしよう、と言っている気がした。

……何かがあった。

何か、言いたくないようなことが。

それはその場の空気を肌で感じれば、誰にでもわかることだった。そのくらい、部屋は重苦しく、張り詰めている。息をする音すら、大きく聞こえるようだった。

聞いてはいけないのだろうか。

俺は、その答えが出せないまま、じつと母さんを見つめる。

母さんは、はっとなつて俺と華月の顔を交互に見やり、ふわりと笑った。

「家族に秘密はいけないよね」

「秘密？」

華月は、その母さんの笑顔で、やっと息が出来る、とても言うように、ほっとした顔をして見せた。

「秘密っていうか……言つてないことがあるの」

まるで、この重苦しい空気を打ち消すかのように、母さんは明るく俺にケーキを催促しながら、続けた。でも、その声の明るさが、逆にこれから語られようとしていることを暗く浮き彫りにさせるようだった。

「言えなかったこと、かな。私自身の問題なんだけどね」

俺も華月もなんて返事をしていいのか分からずに、母さんの言葉に耳を傾ける。

「ほら、せつかくだからケーキ食べようよ」

母さんはにこりと笑いかけた。その目は笑っていない。こんな時まで、俺たちを氣遣うその優しさに、母さんの思いやりという心の強さを見た気がした。

「私ね、事故で3年間眠り続けていたことがあったのよ」

そのさらりと出た言葉に、俺は息を呑んだ。華月も口に入れたケーキでのどを詰まらせたようで、慌てて麦茶を流しいれている。

「事故つて……」

俺の背中を、冷たい汗が伝っていくような気がした。

「新しくに会う前のことなんだけどね。私、車で事故にあったのよ。だから、今は車運転しないようにしているけど。というより、運転できないんだけどね、怖くて」

そういえば、運転するのはいつも父ばかりだ。てっきり、運転するのが嫌いだとか、車にのると爆睡してしまうとか、道に迷って目的地にたどり着かないとか、そんな理由からだろうと思っていた。

「その事故の時のことは全然思い出せないし、事故前後のこともあやふやなの。目を開けた時には、なぜか病院のベッドの上で……新くんが目の前にいたのよ」

母さんは言い終わる頃には、嬉しそうに、ふふつと笑った。

だが、俺も華月も同時に小首をかしげる。

「待つて待つて」

「何で父さんが目の前にいるの？」

「だって、まだ事故の前には知り合っていなかったって」

「いつ出会えるわけ？ 3年間ずっと寝てたんだろ？」

俺たちの、連携攻撃にも母さんは動じない。さらに可笑しそうに声を上げて笑うだけだった。

「何て説明したらいいんだろっね。寝てる間に知り合った？」

「いや、俺に聞かれても！」

「意味わかんないし」

「ははは」

「ははは、じゃない!!」

俺と華月の声が重なるも、母さんはそれ以上説明するつもりはないらしい。ただ、嬉しそうな笑みをたたえるだけだった。

「私を救ってくれたのは、新くんと……優希よ」

再び、俺と華月は同時に小さく声を上げた。

俺の心臓がどくと跳ね上がる音が聞こえる。

何で、そこに優希さんの名前がでてるんだ。

一瞬にして俺の中を、黒い雲が覆うようだった。心臓から押し出された血液が、体中をめぐるのが分かるような緊張が俺に走る。

「事故にあった車に、優希も一緒にのってたの」

母さんの投げかける言葉は俺の頭をハンマーで殴ったような衝撃を何度も与えられた。頭が良く回らない。

今なんて言ったんだ？

先に、口を開いたのは華月だった。

「優希ちゃんはどうなったの？」

華月がぐくりと唾を飲み込む音を聞いた気がした。いや、それは俺の音だったのかもしれない。

「優希は……」

その次の言葉を聞かなくても、沈黙がすべてを語っていた。

「うそ……」

華月の手から落ちたホークが、甲高い音を立てる。

他には何も俺の耳に入ってこなかった。まるで、母さんの部屋にいるのに、遥か遠くで聞いているように感じる。

優希さんが母さんと一緒に事故にあった。

そして。

優希さんが死んだ……。

その瞬間、俺の中で何かがぶちつと音を立てたような気がした。そして、次の瞬間、俺の脳裏に、彼女の様々な表情が鮮明に思い出される。

「好きなことやって、笑って暮らせてれば、充分だよ」

その声が耳に焼き付いて離れない。

その笑顔が瞼を熱くする。

急に胸を締め付けられるような気持ちでいっぱいになった。もうこの世には居ないなんて。

会えないなんて。

夢を手に入れて、胸を張って生きている優希さんに会えると思ったのに。

絶対、優希さんの店に押しかけてやろうと思っていたのに。

「どう？ あたしの城よ。って、勝手にさわるんじゃない！」

なんて言われながら、厨房で料理してやろうと思っていたのに。死んでしまっているなんて。

俺は、取り繕うことも忘れて、じつと自分の手の甲に落ちる熱い雫を見つめた。後から後からあふれてくる涙で、視界が揺れ動く。

「だって……」

俺の口が勝手に言葉を綴っていた。

「だって……自分の店を持つって……今頑張って、好きなことするって」

だって……。

そんなことって……。

あんなに、楽しそうに夢を語っていたのに。

俺はその衝撃に、声も出ないでいた。しばらくして、華月のすすり泣く声が耳に入ってきた。顔を上げると、母さんの頬を、静かに涙の雫が伝うのが目に入ってきた。

「優希ちゃんは……」

涙をぼろぼろとこぼしながら、華月が母さんに詰め寄った。

「いつ……?」

母さんは力なく笑い、華月をそつと抱きしめた。

「優希の誕生日。19歳の誕生日に……私のすぐ隣で」

俺ははっとなって、母さんを見た。

「いつだって!？」

自然と声を荒げてしまうのを押さえることが出来なかった。

「21年前の　4月10日」

華月が俺を勢いよく振り返る。その瞳から、ますます涙が溢れ出す。華月も状況を飲み込むことが出来たのだろう。

なんてことだ。

どうして今日、飛ぶことができないんだ。

俺たちには何もできないのか。

このまま、繰り返される運命に、従うことしかできないのか。

もつと早く、母さんに聞いていれば!

俺はぐつと唇をかみ締め、震える手を握り占めた。

いや違う。

まだ、何か出来ることがあるはずだ。

そのために、俺たちはきつと。

「4月10日って……」

華月の弱弱しい声がかすかに耳に届いた。

俺も苦しい胸の痛みとともに、声を搾り出すのが精一杯だった。

「……昨日飛んだのが8日だ」

また会えるよね（１）

雨は次の夜まで降り続いた。

今日一日、何度窓の外を眺めたか分からない。夜は何度も目が開いて、そのたびに窓の外を確認する。

無情に響く雨の音に、胸が張り裂けそうになりながら、私は何度も祈った。

この雨が早くやむように。

重たい雲が消え去るように。

「よし」

私が窓を開けて、分厚い雲の隙間からぼんやりと姿を現した月を見たのは、6月9日、23時を回った頃だった。

今ならいけるかもしれない。

私は準備万端に用意された荷物を背負い、颯の手を取る。

「華月、いいか」

そういえば、颯はいつの間にか私を“かづ”と呼ばなくなった。

何でだろう。

ふと考えながら、颯を見上げる。

「21年前の4月10日、正確な時間は分からないけど、お昼ごろに母さんと優希さんは出かけたらしい」

らしい、という言葉に私は首をかしげる。ママは当時のことは覚えていなかった。だから、いったい誰から手に入れた情報なんだろう、と思った。颯はそれを私の表情から読み取ったみたいで、神妙な面持ちで続ける。

「千明希叔母さんに今日電話で聞いたんだ」

颯の話によると、ちーちゃんは、車に同乗してはいなかったから、事故の詳細はわからないらしい。

分かっているのは、その日はちょうど日曜日で、天気もよかったから、ママと優希ちゃんの二人でランチを食べに行くついでに花見

に行くことになったらしい、ということ。

その花見に行く途中で、二人は事故に会う。ちーちゃんも誘われたけど、用があったから断ったので、無傷ですんだ。そして病院から知らせを受けて、ちーちゃんが駆けつけた時、ママは意識不明で優希ちゃんは息を引き取っていた、ということ。

「だから、二人が出かける前に飛んで、優希さんが車に乗るのを止めるんだ」

「出かける前？」

「そう簡単に、話を聞き入れちゃくれないとは思っけど、何とかして優希さんは電車で花見に向かわせるんだ。母さんは車で、そして事故にあって生き残ってもらわないと母さんは父さんに会えない。そして俺たちは生まれてこないことになる」

「どうして、会えないの？」

「理由は良く分からないけど、千明希さんの話だと、突然父さんが家を訪ねてきて、病院で寝ていた母さんの見舞いに一緒に行ったそう。その日から、ちょこちょこ父さんは見舞いに行きだした。

そして、半年以上たった春、父さんが見舞いにきたその日に母さんは目を覚ましたらしい。だから、なぜか分からないけど、事故と母さんたちの出会いは繫何か関係していると考えるほうが妥当だ」

「つまり　ママが事故にあわないと、私と颯は生まれてこない？」

「そうだ」

颯は力強く言い放った。でも、声とは裏腹に青ざめた顔をしている。昨日タイムスリップしてはいないとはいえ、颯も私もほとんど寝ていない。私は、授業中に睡眠補給したり、昼休みに保健室で昼寝したりしたけど、きつと颯は……。

「颯…… 大丈夫？」

私はまじまじと颯の顔を見つめた。颯は、私の視線から逃げるように、ふいっと顔を背けた。

「大丈夫だ。行くぞ」

絶対大丈夫じゃない。いつもの颯なら、こういう時は私のおでこ

を、ぺちつと叩いて笑うはずだ。無言で颯の顔をうかがう私に、颯は断ち切るように言った。

「また、月が隠れる前に」

「……そうだね」

「とりあえず、１１時につくようにしよう。だめなら、また向こうでもう一度飛ぶ」

「わかった」

私の中の不安な気持ちは、やっぱり消すことができない。でも、その颯の決意に満ちた表情に根負けしてしまった。

渋々、颯の腕を取る。

「いくぞ」

颯の声を合図に、私たちは呼吸をそろえて目をつぶった。

数秒後。

おそろおそろ目を開ける。

そこは、大きな窓からさんさんと太陽の光が注ぎ込むリビングだった。

「うお、出た」

声の方を振り向くと、ちーちゃんがソファーに腰掛けて、テレビを見ながらアイスを食べている。なんて暢気な光景だろう。

私が啞然としていると、颯が声を荒げてちーちゃんに詰め寄った。

「二人は!？」

「ふぉえ？」

ちーちゃんはアイスを口に頬張ったため、へんな単語を返してきた。

「母さんと優希さんだよ！ 今どこ!？」

私は、慌てて壁にかけられた時計に目をやる。昼の１時半を回っていた。ぶわつと冷や汗が体中から出た気がした。

アイスを飲み込んだちーちゃんは、きょんととして私と颯を交互に見つめ返している。

「出かけたけど？ 今日は夜じゃないのね、来るの」

「出かけた！？ いつっ！？」

颯の声が裏返る。

「……1時間くらい前？」

それを聞くや否や、颯は私を勢いよく振りかえり、むんずと腕を掴んだ。びっくりするほど強い力だったので、思わず悲鳴を上げる。でも颯はそんなことすら、眼中にないようだった。

「1時間前に飛ぶぞ」

そう言った颯の顔は、完全に血の気が引いて真っ青だった。さっきの比ではない。

「でも……」

このまま、タイムスリップを繰り返したら颯が倒れてしまう。

私にでもそのくらいのことはわかるのだから、きっと颯自身が一番、その危険性を感じているに違いない。

「行くぞ」

私を見つめ返すその目は強く、何を言っても無駄だ、と語りかけていた。

「わかったよ……」

私は苦々しい気持ちで目をつぶる。

最後は私が、絶対颯を連れて帰る 何があっても。

そう心に誓った瞬間だった。

また会えるよね（２）

「あれ？」

一番聞きたかった声が耳に飛び込んできて、私は再び目を開けた。

「今日は夜じゃないんだね」

嬉しそうに笑う優希さんだった。

私はあたりを見回して愕然とする。それはどう見ても、移動中の車の中だった。

「え、あれ、何？！？ 二人とも、びつくりさせないでよー！」

ママは運転席からバックミラー越しに私たちに視線を送る。

「ちょうど良かった。今から姉ちゃんと二人で花見に行こうと思つてたんだよ」

軽やかにそう言った優希ちゃんの満面の笑みが、私と颯を一瞬にして凍りつかせる。

つまり、私と颯は、車の後部座席に飛んだらしい 事故を起こすだろうママの車の。振り向くと、隣の颯の顔が緊張し強張るのが分かった。私も知らず知らず手に汗を握る。

どうしよう。

このままだと、車は事故にあつて、そして、二人は 。

私の喉がごくりと音を立てた。背筋を冷たいものが走り、悪寒が全身を埋め尽くす。

何か、何か方法は……。

顎に右手をあてて考えようとした時、思いもかけない重みを肩に感じて、私は悲鳴を上げた。

「颯！？」

私の肩にもたれかかってきた颯の顔は、完全に土気色。もう自分で体を支えることもできないその様子に、颯が今にも意識を手放すというやばい状況だということを瞬時に悟った。

ということは、私の方の力もそんなに残されていないはずだ。ちゃんと、21年後の世界に帰る力は残されているんだろうか。ふっと黒い霧が、私の心にかかる。

もし、帰れなかったら、私たちどうなるんだろう。

もしかしたら この車で一緒に死ぬかもしれない？

自分の導き出した最悪の結末に、言い表せないほどの恐怖で手が震えた。

「何どうしたの？ また寝てるわけ？」

暢気な優希ちゃんの声に私ははっとなった。優希ちゃんは颯に指を刺しながら笑っている。

この笑顔を守らなきゃ。

どうにかして守らなきゃ。

颯がこうなっちゃった以上、今は私しかない。

優希ちゃんを助けられるのも、その後で颯を連れて帰れるのも、私にしか出来ない。

絶対に。

でも……どうしよう。

考えなきゃ。あたしが考えなきゃ。

何とか自分を落ち着かせて、考えをめぐらせようとしても、まったく成功しない。どうしよう、の5文字が頭の中でリピートするだけだった。

「無理」

半べそをかきながら私は颯に助けを求めて、颯の体をゆする。でも、颯はぐったりとして、目を開けることはなかった。

変わりに、助手席から再び声がする。

「どうしたの？ 何かあった？」

今度は、少し緊張感を持つてるような気がしなくてもない。気のせいかもしれないけど。

私はもう、腹をくくって全部話すことにした。

「あのね！　とりあえず車止めて」

「は？」

二人が同時に同じような声で反応する。

「何どうしたの？　彼、そんなに調子悪いの？」

ママがバックミラー越しに覗きこむ。

「違うけど、でもそうかもしれないけど。そうじゃなくて、とにかく止めて」

「止めてって言われても……ちょっとここじゃ無理」

ママはそわそわと視線を動かしながら、とめられるところを伺っているようだった。そんな時、目の前の信号が赤に変わる。車は少し危なっかしく停止線ぎりぎりで止まったようだった。でもそれは、ママにとっては珍しいことでもなんでもない。ママが運転する時はもつとスリリングなことはいっぱいある。

「とりあえず、止まっただけど」

ママがこちらを振り返った。

そういう意味じゃない、って突っ込む時間も勿体無く思い、私は一気に話始めた。

「あのね、この車は、もう少ししたら事故にあうの。それでママは病院に運ばれて3年寝込んで、優希ちゃんは――」

その時だった。

言いかけた言葉は形にならなかった。後ろからものすごい勢いで衝撃を受けたからだ。爆音が車内を駆け抜け、後ろの窓ガラスが激しい音を立てるのを聞いた。

わけも分からずに、私は助手席の座席の背もたれに体を押さえつけられた。そうする間に、再び右からの衝撃をつける。そして、最後に、一番激しい衝撃が前から受けたような気がしたけど、そこで私は一度意識を完全に手放した。

また会えるよね（3）

再び私が意識を取り戻すと同時に、膝に重みを感じた。ぼんやりとした視界がだんだんと定まるにつれて、私の上に颯が折り重なっているのが分かった。

私はがばっと起き上がる。起き上がったつもりだった。実際には、体がわずかに動いた程度。なぜなら、私の体は助手席と背中合わせにして、本来だったら足を置く場所におしりがすっぽりはまっている状態。その膝の上に、うつ伏せになった颯の頭が乗っている。どう考えても、身動きが取れない状態だった。でも、体に痛みを感じないところを見ると、私には主だった怪我はなさそうだった。

不意に、私の膝の上に頭を乗せたまま動かない颯に、不安を覚えて慌てて声をかける。

「颯？」

でも颯は動かない。

足の方から鳥肌がぞぞつという音とともに、一気に駆け上がってくる。

「颯、目を開けて！」

やっぱり反応がない。

嘘でしょう？

冗談やめてよ……。

瞬時に最悪のシナリオが再び私の中を駆け巡る。

「颯！ 死んじや嫌あゝ！！」

私は必死だった。永遠にも感じる短い時間、とにかく必死で泣き叫んだ。

すると、かすかに声が聞こえた気がして、はっと我に返る。

「……………いてえ」

耳を澄ますと、確かにうつぶせになった颯から発せられた声が聞こえてきた。

「颯〜〜！ 死んじやったかと思っただ〜〜」

再び私はがしがしと、颯の体をゆする。その動きに颯がいちいちうめき声を上げた。

「いてえって……や、やめ……」

「颯」

安心したら、ぼろぼろと涙がこぼれ出る。

「かつ……ふ……たり……は……？」

懇願するように颯がうめく。

「そうだ、ママと優希ちゃん！」

そこで、私は、二人の存在を思い出した。再び私は緊張に引き戻される。

私は何とか運転席と助手席を確認しようと、ちよつとずつ、おしりを動かして車の中央部へ近づく。そのたびに颯が悲鳴を上げていく。その痛がり様に尋常でないものを感じて、私は颯にたずねた。

「颯……どこか怪我した？」

その返事が返ってくるまでの間が長く感じる。

「……俺は……いい……から」

「怪我したんだね！ どこを！？」

しばらくの沈黙ののち、颯はしぶしぶと答えた。

「……足……かな……」

反射的に、手探りで颯の怪我を探す。すると、ぬめつとした感触とともに、颯が大きく悲鳴を上げた場所にぶち当たる。

その瞬間、ざあつと血の気の引く音を聞いた。出血多量、という

四字熟語が私を襲う。

呆然とする私に颯は、再び声をかけた。

「いいからっ……俺より……二人を！」

力強い声で颯が訴えてくるも、その声は、聞けば聞くほど、痛みをこらえて苦痛にゆがむ颯の顔が簡単に想像できた。

「でも……」

「はやくしろ！」

その大きな声に、私は渋々車の前方を確認した。ママのだらりとたれた手が見えた。そしてこの位置からは助手席がどうなってるのか確認することも出来ない。

「ママ！？ 優希ちゃん！？」

声をかけても反応がない。助手席と運転席を背後から叩いてみて、やっぱり反応がない。

私は何とか手を伸ばしてママの腕に触れる。

「ママっ！！」

私が声を荒げると、颯の弱弱い手が私に触れるのが一緒だった。私は反射的に颯を振り返る。

「……かあさんと……ゆき……じか……ん……止め……」

「時間！？」

突如、颯の手が力を無くし、ぱたりと音を立てて座席のうえに着地した。

「颯！？ やだ颯！？」

颯の手を両手で握り締め、振り子のように左右に振っても反応がない。慌てて、颯の手首の脈を確認する。……動いてる。

少しだけほっとした分、考える隙間ができたので、颯の言葉を反復することができた。

「時間を……とめる……？」

そんなこと出来るの？

瞬時に私の頭を、前に公園でへんな男が動かなくなった時の情景がよぎる。

私は、迷うことなく颯の手首を強く握り締めた。

今までのことを、考えれば、きっと、私が触っている人の時間をコントロールできる。そんな良く分からない自信とともに、私は強く心の中で叫んだ。

止まって、お願いっ！！

また会えるよね（４）

颯の手首の脈を感じながら、数秒。

その脈が突然止まった。

……止まった……？

死んだわけじゃないよね、時間が止まったんだよね。

答えが返ってくるわけもなく、でも、とにかく、颯の出血が一時的でも止まってくれればいい、そう願った。

さらに私は、体を再び動かし車内中央部へ異動し、必死で体をよじって運転席を覗き込む。

そして。

ママは、ハンドルの上に飛び出たエアバックの上に上半身を預けて、ぐったりとしていた。その額からは鮮血が流れ出て、ママの白いワンピースを染めている。再びママの頬を伝った真つ赤な雫が、スローモーションで落下し、ぽたつと大きな音を立てたように感じた。

私ははつと我に返る。慌てて腕をいっばいに伸ばし、ママの腕をなんとか掴む。

「ママ……！」

やっぱり、ママは反応しない。でも、手首は颯と同じように力強く脈打っていた。ほつとするのもつかの間、さっきと同じ要領でママの時間をとめる。すると、数秒後、ママの頬から、新たに落ちようとしていた赤い雫がそのまま動きを止めた。同時に手首の脈も動きを止める。

「……止まってる」

このまま救急車が到着するまで、持ってくれれば。

そう祈りながら、私が助手席の方に体をよじらせようとした時、また、ぽたつという音が耳に届く。振り向くと、ママの頬を伝う血液が、また流れ出しているのが分かった。

まさか……手を触れていないと時間は止まってくれないの？

じゃあ、颯の時間もまた　！？

私はあせる気持ちを抑え、再びママの腕を掴む。そして時間をとめる。

そのまま、颯の腕を掴もうとした。でも届かない。

どうしよう、優希ちゃんは……？

首だけを助手席に向けた時だった。

うそ……。

声も出なかった。

そこに見えたのは。

どう見ても　電信柱……。

「そん……な……」

これじゃ……誰がどう見ても……。

その衝撃的状况に頭が真っ白だった。

優希ちゃんの体があるはずの場所は、完全に電信柱に押しつぶされて存在していない。優希ちゃんの右半身がかすかに見えた気がした。

「おい、大丈夫か」

呆然としている私に、突然、窓の外から声がかけられた。声の方を見ると、運転席側の窓から、おじさんが携帯を耳に当てながら、車内を覗きこんでいた。

「救急車、呼んだからな。すぐ来るから、頑張るんだぞ！」

おじさんは、私の返事も聴かず、あわてた様子で窓の外に消えた。ぼーっとする頭でその光景を見送っていると、颯のうめき声が聞こえてきた。やっぱり、颯の時間も再び動き出してしまったのを察知し、慌ててママの腕を掴みながら颯の腕をつかめる位置まで体を移

動させる。そして颯の時間をとめた。

救急車が来るまで。

来るまでこのまま。

でも、私にももう限界が近づいてきているのは分かっていた。

急に体が重くなった気がする。

このままじゃ帰れなくなる。

この時代に私や颯が存在しちやいけないんだ。

どこにも私たちの居場所はないんだ。

だから、ママとパパがいる、私たちの家に帰ろう。

帰りたい……。

「颯……」

私はうつ伏せになったままの颯を眺めた。

颯、ごめんね。

優希ちゃん、助けられなかった。

ママも、血がいつぱい出てるし、助かるかわからないよ。

もし、これでママが死んじゃったなら、私や颯は21年後には存在しないことになっちゃうんだよね。それって、21年後に帰った途端に、私たちは消えちゃうってことなのかな。

だって、私たち、生まれてこなかったことになるんだよ。

ごめん、颯。

ごめん、ママ。

ごめん、パパ……パパからママを奪っちゃうかもしれない……私が。

パパに会いたいよ。

ママや颯と一緒にいたいよ。

ちゃんと生まれて来たいよ。

まだまだ、生きていたいよ。

一気に私の視界がぼやけ、あつという間にこらえられなくなった涙が、いつきに溢れた。両手をふさがれて、ぬぐうことも出来ず。

ただただ、はらはらと涙がこぼれた。

まもなく、だんだんと薄れ行く意識の中、救急車のサイレンが聞こえてきた気がした。

もう限界。

人が集まってきたら、帰れなくなる。

そう決意した私は、ママの方に顔を向けて、心の中で強く、祈るように、囁いた。

ママ、また会えるよね。

生きて生きて、生き抜いて。そして私たちを生んでね。待ってるよ。

絶対、ママとパパの子で生まれてくるから。

颯と双子で絶対生まれてくるから。

だから、生きて　　。

私はそつとママの腕を放した。そして、優希ちゃんの方を振り向き、目を閉じる。その惨劇の変わりに、ふんわりと笑う優希ちゃんの姿が脳裏に浮かぶ。

ごめんね。

優希ちゃんの笑顔を守れなかったよ。

そして、車の外にあわただしい人の気配を感じた瞬間、私と颯は車の中から　　時を飛んだ。

猫の標（１）

話し声が聞こえる。

でも、何を話しているのかは聞き取れない。

どうしたのだろう。目が開かない。

体も動かない。

「早く！」

女性の声が聞こえた。俺はその声の主がすぐに分かった。

優希さんだ。

近くに優希さんがいるのか？

そもそもここはどこだ？

そう思いめぐらせている間に次の声が聞こえる。

「だが」

聴いたことのない低い男の声だった。

「早く助けて！　だってこのままじゃ、絶対行く！」

優希さんが切羽詰ったように言った。

「……いいのか」

「これでいいのよ。あの子達　颯や華月が生まれているのが、何よりも証拠だよ。さあ、早く行つて！」

どういう意味なのかと耳を済ませている間に、その不可解な会話が終わった。そして、俺の頬に暖かなぬくもりを感じた。

……優希さんの手？

そう首を傾げようとしたが、体が動かない。そうこうしている間に、頭上から先ほどと打って変わった優しい声が降りそそいだ。

「せっかく助けに来てくれたのに、悪かったね」

その言葉で、一気に今までの記憶が電流のように脳内を駆け抜けた。

そうだ、事故！

どうなったんだ！

そう叫ぶことはおろか、指先1ミリも動かすことが出来ない。

「でもさ、これでいいんだ。あんたたちは、あんたたちらしく、楽しく生きていつてよ。姉ちゃん、ああ見えてドンくさいからさ、気をつけてやってよね。まあ、よく知ってるか。あ、それと、私の好きなものはアイスとジュースだから。よろしく頼むよ。」

何の話だ、何の、と頭上の声を聞きながら心の中で懸命に突っ込んだ。でも、そんな軽い気分も、次の一言で吹き飛んだ。

「じゃあ、ね。あんた…… 颯にあえて楽しかったよ。ありがとう。」

それじゃ、まるで別れの挨拶じゃないか。

何を言っているんだ。

俺は優希さん、貴方を助けに来たんだ。それがタイムスリップが出来るようになった理由だと分かったんだ。

白い猫から始まった不思議な現象も、貴方に出会い、そして救うためだったんだ。

絶対に俺が助けるから、だからそんな別れの挨拶はいらないんだ。だから 逝くな！

「優希っ！！」

その時、急に体が軽くなったと思ったら、声が出た。そしてほぼ同時に上半身を跳ね起こす。なぜか息が弾む。

俺はきよろきよろとあたりを見回した。優希さんの姿はどこにもない。その代わりに飛び込んだきたのは、満開の桜の木。

その桜には見覚えがあった。頭上に広がる大きな枝からひらひらと花びらが舞う。

何かがおかしい。

この桜はあの、川原の大きな桜に違いなかった。しかし、ここはどう見ても川原ではない。

だって 何もない。

桜と俺以外に何も存在していない。

どこまでも続く暗闇。空も地面も境目が感じられない。音も色も何もない。

「どこなんだ……ここ……」

つぶやいた声すら、あつという間に消えていくようだった。

どのくらい呆然としていたのだろう。

時間という概念すら忘れ去っていたその時、前方から声がした。

「おまえの来る場所ではない」

はつとなつて送った視線の先には　　白く輝く猫がいた！

「あ……」

なぜか、そこにその猫の存在があるのは当然に思えた。だがしかし、聞こえてきた声は以前のように老人の声ではなく、もっと若々しいものだった。

「おまえが、ここですることは何もない。帰るがよい、あるべき場所へ」

猫はその口調のせいだろうか、まるで月光を浴びているように光り輝いているせいだろうか、妙に畏怖を感じるほどに神々しい。

「ここはどこだ」

俺は搾り出すように、猫に問う。しかし、その問いに答える気はないようだった。猫は俺から視線をそらし、ゆっくりと体の向きを変え歩き出した。遠くから見るその様は、まるで真つ暗な空中を歩いているようだった。

「あ、おい」

慌ててその猫の方へ駆け寄る。　　つもりだった。

「な、なんだこれ」

走っているのに、前に進んでいる気配がない。桜の根元から離れることもなく、猫に近づくことも出来ない。

どうなっているんだ。

愕然としながら、ただただ猫が歩む方を見つめていた。すると、不意に、猫の足元に横たわる人影が現れた。その瞬間、猫が銀色に

発光し、一瞬にしてその姿が人型に変わる。

「えっ……」

小さく呟くも、整頓することとづくに放棄した思考回路では、何がどうなっているのか理解することができないわけもない。

猫が人になった！？

しかも、和装？

なんだか、教科書やテレビでしかみたことのないような着物の男がそこに座りこみ、倒れている人影を見つめている。そして、男はそつとその人を横抱きにしてこちらに歩み寄ってきた。

だんだんとその距離が縮むに連れて、男の腕の中にいる人物の顔がはつきりしていく。そして俺は息を呑んだ。

「母さん！」

そう、それは22歳の母さんだった。

「母さん！！ 大丈夫なのか！？ 母さん！？」

呼びかける声に、何の反応も示さない母さん。急激にその母さんを抱きかかえる得体の知れない男に対する嫌悪が生まれた。

「お前、母さんに何をした！」

「何も」

こちらの激情とは裏腹に、男は飄々と答える。それがさらに俺の気持ちを高ぶらせた。

「母さんを返せ！！」

「それはできぬ」

母さんを奪え返そうにも、足が一步もそこから動かない。そうこうしている間に男は俺から数歩のところまで近づいていた。

「この娘自身が自分で起きようとせぬ。到底おまえには扱いきれぬこと。諦めて立ち去るがいい」

「ふざけるな！！ お前はなんなんだ」

そこで、もう一人、さっきまでそこにいただろう人物の顔が頭によぎった。

「優希！ そうだ、おまえ、優希さんどこにやったんだ！」

すると男は、表情も変えずに答える。

「優希……それはあの娘のことか。いまここにはおらぬ」

「おらぬ、ってどこへやったんだ！」

「質問の多い男だ。もう、充分であろう？ 行け」

どこが充分だ、全然意味が分からない。

第一、何も質問に答えてないじゃないか。

そう抗議しようと唇を開きかけた。

その時。

「
颯っ！！」

猫の標（２）

ばちつと目が開いた。

目の前に、泣きながら覗き込む華月の顔。

ほっとした。

何かなんだか分らないが、ただただ、ほっとした。

夢だったのかな。

全部、夢だったのかもしれないな。

そう思っ、微笑みながら華月の頭を撫でようと腕を上げる。すると、突然に、激痛が俺を襲った。苦痛に悲鳴が漏れる。

「颯!？」

……夢じゃなかった……。

事故にあっ、俺たちは帰ってきたんだ。

全身の痛みがその真実を告げている。

「今、ママが救急車呼んでるから！ もう大丈夫だからね！」

俺を安心させようとしているのだろう。華月が涙で真っ赤になった目で、必死に訴えた。

「華月は怪我はないのか？」

「うん、かすり傷」

華月が泣き笑いになりながら、腕の包帯を見せた。

「そうか、よかった」

こうして、“家”があるということは、母さんは無事にあの事故の中、命を拾うことが出来たのだろう。

俺は、まっすぐに華月の目を見た。

「優希さんは？」

華月は押し黙る。

それがすべて答えだった。

「今何時だ？」

「ダメだよ、動いちゃ！」

「まだ、日にち変わってないんだろう？ もう一度飛ばう。今度こそ、車が発する前に飛んで……」

「何いってんの！ 無理に決まってるでしょ！」

「無理でも、いいっ！！」

俺は初めて華月に向かって怒鳴った。華月もびくつとなつて、言葉もなくしている。

だが、今行かないと、優希さんを救うチャンス永遠に失うんだ。今なら、まだ助けられる可能性があるんだ。

今しかないんだ！

「……無理でも。行かせてくれ。華月、お願いだ」

一言一言に懇親の思いを込めた。華月の目がおどおどと揺れ動く。どうしたらいいのか迷っている。

「颯……優希さんが……好きなの？」

思いもよらぬ言葉に今度は俺が言葉を失くす。

誰が誰が好きだって？

そんなの考えたこともない。

第一、あの人は叔母だろう。

「そんなはずないだろう。ただ、あんなに楽しそうに夢を語る優希さんの顔が、忘れられないんだ。華月だってそう思うだろう？ だから、助けにいったんじゃないのか？」

俺は華月というより、まるで自分に言い聞かせているようだなと思った。

そんな感情じゃない。

これは違う。

ただ、ただ、彼女の思い描く夢が、現実になったところが見たいんだ。

もし、その途中で手の届かないものとなつたとしても、彼女なら努力したことを誇りに思つて、楽しく生きていつている、そう信じていたんだ。

そんな彼女に会いたいただけなんだ。

「もう、飛べないかもしれないよ」

「やばくなったら、華月の判断で飛べばいい」

「でも怪我は……」

「たぶん、骨折かなんかじゃないか？ 動かなきゃ平気だ」

「動けない颯が何しに行くのよ！ やっぱりだめだよ！」

「……なんかやれることがあるかもしれないだろう！」

再び大きくなる俺の声に、華月が泣き叫ぶように言った。

「ちよつとは自分のことも考えてよ！ 今、颯の足は血だらけなん

だよ！ 颯が死んじゃうよ！！」

「それでもだ！！」

短い時間、俺と華月は無言で見つめあった。その視線はどちらも譲らない気持ちで満たされている。

猫の標（3）

そこで、俺は「じゃあ……」と妥協案を提案することに切り替えた。

「3日前の夜に行こう」

「3日前？」

華月が眉間にしわを寄せる。

「3日前の俺たちに会った。そして、今日起こったことを伝える。それなら俺は動かないですむだろう？　伝えてすぐに帰ってきて病院に行く。これでいいか？」

十中八九、事実を知った俺たちなら、別の行動が取れたかもしれない。そして、何か結果が変わったかもしれない。自分自身ではあるが、他力本願なところが不安を誘うが、でも、他の誰でもない自分自身を信じるしか、今は方法がのこされていないのは確かだ。

「……でも、それなら治療してからでも同じじゃない？」

「ほんの少しだけだ。5分もあれば説明できる」

華月はしばらく黙って俯いた。そして観念したように、「わかった」と呟いた。

「絶対5分で連れて帰るからね」

華月がそう念を押すと、俺の腕を握り締める。華月が目を閉じるのにあわせて俺も目を閉じた。

数秒後。

「……飛んでない」

その声に俺も目を開け、あたりを確認する。確かに、俺の部屋ではない。さっきまでいたリビングだった。

「もう一度！！」

俺は不安をかき消すように声を張り上げた。華月は黙って頷いて再び目を閉じる。しかし結果は変わらない。

「……なんで？」

華月は呆然と自分の手を見つめた。

「力がなくなっちゃったのかな……」

「時間はとめられるか!？」

俺の声に華月は返事もせず、再び俺の腕を掴んで目をつぶる。

「どうだ? 止まった?」

「……止まってない」

華月は気の抜けた顔で再び自分の両手を見つめている。

力が使えなくなった……?

それは。

「もう優希ちゃんは助けられない」

華月の呆然と呟いた声が俺の胸を貫いた。

そんな……。

助けられない……助けられなかった……。

じゃあ、なんのために俺たちは!

『まあ、なんにせよ、笑って暮らせてればいいんだ』

不意に優希さんの声が心にこだまする。

見上げた天井が涙で揺れ動く。

『好きなこととして、毎日笑って、それが一番贅沢なことじゃない?』

ごめん、優希さん。

何もできなかった。

何もしてやれなかった。

俺たちにはそれが出来たかもしれないのに。

貴方は夢に挑戦することすら出来なかった。あんなに楽しそうに俺に語ってくれた夢を、こんなに早くに手放さないといけないなんて。

本当は、すごく無念だったにちがいない。

だって、あれは優希さんだったんでしょ？
貴方は俺に『助けて』って言ったんだよね。
あの日、桜の下で見た夢の中、確かに聞いた苦しそうな声。
あの声は、俺に助けを求める声だった、そうでしょう？
あの白い猫は……優希さん、貴方だ。そうでしょう？
それなのに、俺は何もしてやれなかった。
何も……。

『これでいいんだ。あんたたちは、あんたたちらしく、楽しく生きていってよ』

不意に、違う優希さんのセリフがこだました。それは、俺の先ほどのおかしい夢のセリフだ。

いいわけない。どう考えても俺の都合のいい夢の中のセリフはずなんだ。

でも……。

『じゃあ、ね。あんた　颯にあえて楽しかったよ。ありがとう』

どうして、こんなにはつきり耳に残っているんだろう。

夢のはずなのに。

なんでこんなにリアルに感じるんだろう。

そんな別れの言葉なんて聞きたくないのに　。

ぐっと、感情がこみ上げてきて、いつきに全身から溢れた。もう自分ではどうすることも出来ない悲しみと、苦しみに、息も出来ない。

俺は顔をくちやくちやにして涙をこらえた。でもすぐに、耐え切れずに両手で顔を覆う懇々と泉のように湧き出る涙は、きつと枯れ果てるまでとまらない。

おれなんていわないで。
教わったのは俺の方だ。
楽しかったのは俺の方だ。
あなたの夢に俺も夢を見たんだ。

ありがとう。

俺、貴方の分までちゃんと生きるよ。
自分が笑って暮らせるように、夢を探すよ。

だから……。

もう一度あなたに会いたい
。

エピソード

それはこの世のものとは思えない暗闇の続く場所。あたりを見回しても、誰にも何も見つけることはかなわない。あるものは、闇、闇、闇。

その闇の中に、たった一本の大きな木がそびえ立つ。その木を照らす月も星も存在しないというのに、まるで木は自ら光を放つかのように、煌々と輝いている。

ふいに、一匹の白い猫がその木の根元に現れた。音もなく、そして、突然に。その白い猫もやはり、白く輝いて見えた。

ほどなく、その猫は銀色に強く閃光を出し、すっと人の姿になった。そして、木を見上げて、なにやら声をかける。

「ありがとう」

優しく微笑むその姿は、二十歳前後の女性の姿に見えた。

すると、木の枝からもう一匹の白い猫が軽やかに宙返りをし、女性の足元に着地する。

「おまえは変わったおなごだ」

白猫は、男の低い声を出した。

「あのままにしておけば、あの男は必ずまたおまえを助けに行っただろうに。力を取り上げるなどと」

「あれでいいんだ」

女性は静かに微笑んだ。

「きっと、あの子達は事故自体を起こさせないようにするんじゃないかな。そうしたら、あのこたちは生まれなくなる」

「おまえ自身が死なずにすんだ、と言っているのだ。もともと、そのために助けを求めたのではないのか？」

女性はふっと笑った。

「違うよ。あの子たちがいなかったら、姉ちゃんはあるまま事故で

死んでた。だから運んだんだよ。しかも、あの時間の車にね。それにさ」

女性は、そこで言葉を切って、くすつと笑う。

「あんな完璧なボケと突っ込みの双子の存在が消えちゃうなんて、勿体無いじゃない？」

まるで冗談でも言うかのように、けらけらと笑う。でも、彼女は後悔していなかった。そればかりか、これ以外の結末は望んでいない。

これで姉は幸せになれるのだ。結婚し、双子を生み。毎日楽しく子供たちと夫に囲まれて微笑む。その光景をもう3年近く実際に生活を共にすることで、充分に見てきた。

それを取り上げてまで、自分が生きていても楽しくない。少なくとも、自分はそう思ったから、これでいいんだ。

くすつと女性は笑うと、猫に向き直った。

「あとどのくらい時間があるの？」

「ほとんど残ってしまい」

「だよ、あの猫の体も、もうヨボヨボだもん。まだ9歳か10歳だからもう少しいけると思ったのになあ」

そう言った女性の顔は、とても晴れ晴れとしていた。

「じゃあ、行くわ。あんたも、いい加減あきらめて成仏しなよね」

「……………早く行け」

「はいはい。さうて、ケーキ食べに行くか。40歳の誕生日ケーキ、覚えてるかな、あいつ。アイスとジュースも持ってこないと絶対祟ってやる」

女性は猫に背を向け、ひらひらと片手を振った。そして、再び閃光とともに白猫の姿に戻る。そして闇に消えていった。

次に白猫が現れたのは、川原の木の下だった。

「……………どれだけ待たせるんだよ」

木の根元に腰を下ろした青年が、白猫に笑いかけた。白猫はまた

よたとしながら青年の方へ歩み寄る。

「ほら、ケーキ。さめちゃったから、まずいとか言うなよ。それと、溶けたアイスとぬるくなったジュースもどうぞ。つまみも各種勢ぞろい。好きなものを好きなだけ食べ」

青年は言うが早いのか、持っていた手提げから次々と食べ物を取り出しては、白猫の前に並べていく。

白猫は彼をじっと見つめた。

どうしても伝えたいことがあった。でも、もうその力も残されていないのは良く分かっている。伝わるだろうか。

最後まで必死に助けようとしてくれたこと。

あれから、諦めきれずに何度も助けに行こうとしたこと。

全部知っている。

もう充分だから。

だから、自分を責めないでほしい。

これは、運命なのだから。

微動だにせず、自分を見つめる白猫に、青年は躊躇することなく微笑みかけた。白猫はゆっくりと青年に近寄り、足に体を擦り寄せた。そして、その小さな口でケーキに一口かぶりつく。

「美味いだろ」

青年は満面の笑みで白猫に語りかける。

じっと白猫は青年を見上げた。

もう少し時間があれば。

白猫は思わずにいられない。

もう少しだけ、時間が残っていれば。

人の言葉が話せる力が残っていれば。

“ありがとう”と伝えられたのに。

もう限界だった。

白猫にはそれが分かった。だから、ずっと青年から目をそらし、

歩き出す。その背中に青年が思いもよらぬ言葉をかけた。

「俺も、貴方にあえてよかった。楽しかったよ」

白猫は思わず振り返る。

「ありがとう」

その青年の言葉をかみ締めるように味わうと、再び背を向けた。

それは一番言いたかった言葉だった。

そして、一番聴きたかった言葉だった。

次の瞬間白猫は再び姿を消した。

白猫は数秒の後、体に冷たい雨を感じた。

自分の時代に戻っては来たものの、もう立っているのがやっとだった。

いよいよその時が来たことを感じた。

白猫は自ら、“ここ”を選んだ。しかし、その理由は自分にもよくわからない。

自分が守ったものをこの目でもう一度見たかったのかもしれない。そして、自分が手に入れられなかった“場所”への憧れだったかもしれない。

いや、単純に“帰る”場所が他に思いつかなかったただけかもしれない。

こんな雨の降る庭先で自分は何をしてるのだろうか、と何だかおかしくなる。

すると窓の向こうから聞き慣れた子供たちの声がした。

「あ、ねこ！」

「あゝ！はだして外出たらパパがメッてするよ」

「でも、あのねこ、かわいそうだよ！ あ、倒れた！」

「あゝ！！ 外出たゝ！！ パパゝゝ！！ 颯がねゝ！」

白猫は、薄れ行く意識の中で、小さな小さな腕に抱かれるのが分かった。その腕にすべてをゆだねると何故かほつとした。あまりに小さく頼りない腕なのに、不思議だ。

白猫はそのぬくもりを感じながら意識を手放す間際……そつと心の中で呟いた。

その瞬間、小さな男の子は猫を抱きかかえたままビクつと体を硬直させる。そして、発作的に激しく声を上げて泣き出した。

「颯！？」

彼の父親が、雨に濡れてびしょ濡れのまま白猫を抱えている我が子を見るや、血相を変えて駆け寄る。

猫はどうやらすでに事切れているようだった。その猫の表情は、まるで微笑んでいるかのように穏やかだった。

しかし、異常なまでに泣きじゃくる息子の様子に、父親は必死な様子で息子に声をかける。

「颯！？ 怪我でもしたのか！？」

男の子は答えない。

何とも言えない気持ちでいっぱいだったからだ。

寂しい。

悲しい。

そして安堵と感謝と暖かな愛情。

そんな様々な感情が折り混ざった気持ちだったのだが、幼い彼には理解できるわけもなく。

ただただ、泣いた。

声が枯れるまで……。

あの時。

彼には聞こえた気がしたのだ。

腕の中で、永い永い眠りに落ちる猫の声を。

早く会いにくるんだぞ。

待ってるから　と。

あとがき

最後まで双子の奮闘記にお付き合いいただき、本当にありがとうございます。
ございます。

『桜華の雫』から始まった、このシリーズも、ついに2部が完結しました。

一部の桜華をかき始めたのが2008年のお正月あたりだったと記憶しています。

完結し終わったばかりで、頭が真っ白になって言葉がでてきません。
んが。

あとから、じわじわ完結の寂しさや達成感を味わうんだろうな
と思ってます。

それにしても、1部でも感じましたが、エンディングを執筆するのは本当に難しいことですね。

どう完結させるか。悩みに悩み、エピローグだけ三人称で執筆することにしました。

どうせ、颯と華月の二人の目線から交互に執筆しているのだから、全編三人称に統一すべきなのかなとも考えましたが……今の私には、三人称で表現するには難しいなと思い、このような形になりました。
国語、漢字、文法……もっと学生の時に勉強しておけばよかった
なあと後悔の嵐です。

今更、日本語のありがたみ、言葉の魔力に見せられて、今までほとんど活字に触れていなかった私が、本を読んで表現力の勉強をゆ
つくりしていこうと試んでいます。

それにしても、今回はストーリー的に、ハッピーエンドに仕切れ

ず、心にぽかんと穴があいてしまった感じです。

第三部……かけるかなあ……。

一言、読みました！の報告など、いただけると嬉しいです。
感想・評価等、聞かせていただけると、泣いて喜びます。

08・

9・27

日向あおい

追記。

現在、本編では触れることの無い、白猫や桜の木にまつわる話を別のシリーズとなるであろう『赤い月が見ている』で執筆中です。

当初、短編の白猫サイドストーリーになるはずだったのですが、思いがけず、長編大作になってしまいました！！

ジャンルとしては、歴史となりますが、ファンタジー要素が多分に含まれ、しかもオレ様なロミオ&じゃじゃ馬ジュリエットな設定になっていきます。舞台は平安初期の日本なのですが。

教科書にも登場する有名人物を主人公としています。

歴史かあ……と腰の引けてる、あなた！ 大丈夫です！

歴史：恋愛：ファンタジー 1：4：5

舞台が、平安時代というだけ、と言われてもいなめません（笑）

よろしければそちらでまた、読者の皆様にお会いできれば幸いです。

09・8・18

日向あおい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5691e/>

朧月の標

2010年10月8日13時29分発行